転生者は何を為すか

猫パン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貴公には転生してもらう。

そう言われた青年は、神の玩具となり第２の人生をスタートさせる。

彼は何を為すのか

いったい彼が転生した意味とは。

その答えは、彼ですら分からない

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 25
第3話 …… 44
第4話 …… 62
第5話 …… 84
第6話 …… 103
第7話 …… 122
第8話 …… 138
第9話 …… 166
第10話 …… 189
第11話 …… 207

第1話

ＩＳ学園。

『国立インフィニット・ストラトス専門高等学校』

ＩＳの登場から約半年、アラスカ条約に則り日本近海に新たに建造されたメガフロートに建設されたＩＳ操縦者を育成する特殊専門学校である。

操縦者だけでなく整備士や研究員等ＩＳに関わる多くの人間がこの学校を卒業している。

ＩＳ学園はあらゆる国家や企業から干渉を受けないと定められており、各企業や国家等が装備実験等で他国の生徒や国家代表候補等に性能試験をする場所にもってこいである

当然生徒も職員も警備員も一部を除いて全員女性であり、校舎や寮なども基本的に女性向けに造られている。
そんな女の園に、今年から男子が入学してくる。イレギュラーである男子生徒、それが2人もである。

「皆さん席についてくださーい、ＨＲを始めますよー」
教室前方のドアが開き、一人の女性が入ってくる。
童顔に眼鏡、低身長に服に着られていると言った感じのサイズの服を着ていた。
その女性が教壇に立つと、（約1名を除く）全員が席に着いている事を確認して口を開いた。
「私はこのクラスの副担任を担当する山田真耶です。皆さん、1年間よろしくお願いしますね」
若干緊張していたのかその震える声にぎこちない笑みが浮かぶ。
そんな真耶の言葉に「お願いしまーす」や「よろしくー」等の思い思いに返事が返っ

てくる。
返事が返ってきたのを聞いてようやくぎごちなさが取れた笑みを浮かべ、先程よりも数段落ち着いて話し始めた。
「じゃあ自己紹介をお願いしますね。えっと、出席番号順で」
全員視線をチラチラ向けながらも、自己紹介は進んでいく。
現在教室に居るたった1人の男子生徒、そして周りは全て女子生徒。
完全な針の筵状態な訳で、彼にはきつい状況だろう。
「…くん。織斑一夏くん！」
「は、はいっ!?」
上の空だった一夏の名前が呼ばれ、思わずと言った感じで声が裏返ってしまう。
案の定クスクスと笑い声が聞こえ始め、一夏の顔がほんのりと赤くなる。
「あ、ごめんね大声出しちゃって。自己紹介お願いできるかな？『あ』で始まって今『お』の織斑君なので」
「あ、はい。分かりました、前に立てば？」
「いえ、その場で大丈夫ですよ」
そのまま立ち上がり後ろを向く一夏。
最前列の席に座っていた為、振り向けば全員が一夏の視界に入る。

「あ、えっと…織斑一夏です。その、よろしくお願いします」
礼儀正しく頭を下げた一夏に、視線が集中する。年頃の少女達にとって、満足するはずがない。
自己紹介を終わろうとした一夏は、クラス中の視線を受け終わるに終われなくなっている。
意を決した一夏は深呼吸をして、思い切って口を開いた。
「以上です!!」
がたたっ。
ほぼ全員が椅子からずっこけた。
スパンっと、一夏の背後から近付いてきた人影が手に持っていた物で頭を引っ叩いた。
「いっ?!」
条件反射で頭を守ろうとしながら振り向いた一夏が、その人影を見て固まる。
黒のスーツにタイトスカートを着用した、かなり釣り目の女性。
「げぇっ!ギルガメッシュ!?」
バァンッ!
今度は先程よりもかなり大きな音が響き、一夏は机に沈み込んだ。

「誰が世界最古の英雄王だ、馬鹿者」
一夏を叩いたのは織斑千冬。
第一回モンド・グロッソで特異な技量を見せ、ブレオン機で総合優勝を飾った初代ブリュンヒルデ。
「織斑先生、会議を任せてしまってすいません」
「ああいや、適材適所だ。私では恐らくクラスへの挨拶等失敗するだろうからな」
そう言った千冬は真耶へとはにかみ、視線を前へと戻した。
「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君達新人を教え導く為1年間このクラスを担当することになった。私がブリュンヒルデだからといって遠慮せず、分からないことがあったらどんどん聞いてくれ。私達教師の仕事は分からない者に教える事も含まれるからな」
千冬の挨拶を聞いていた一夏の目が見開かれるが、周りの女子生徒達は違うようだった。
「キャーーー千冬様よ！本物の千冬様よ！」
「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」
等などと黄色い声援がクラスを飛び交う。
だがその声援を、千冬は少し鬱陶しそうにしながらも笑みを浮かべていた。
「元気の良いことだな。初日から授業があるが、そのテンションなら乗り切れるな」

その言葉に湧いていたクラス全員が押し黙った。
入学早々授業があるこの学園は、ＨＲ後すぐに始まる。
「ふむ、静かになったな。丁度いい、そこの空いている席に座る者を紹介する。おい、入って来い」
その言葉の後、千冬が入って来た扉と同じ扉が開かれた。
それは黒だった。
いくら改造制服が容認されているとはいえ、真っ黒の制服を着ているのはほぼ居ない。
クラス中の視線を集めながら教卓前に立った。
「鷲崎八雲だ、年は君達の2個上だが気軽に接して欲しい。趣味は和菓子作りとピアノ、ＩＳについてはそこまで知識は無いので過度な期待はしないでもらいたい。1年間よろしく頼むよ」
無表情。
声のトーンは変わっているのに表情が全く変わらない、そのせいか多少引かれていた。
それでも年上の男子だ、彼女達にとっても魅力的であった。
「自己紹介については文句なしだ、何処かの誰かとは大違いだな。なあ織斑」

「いや千冬姉、俺はーー」
スパンッ
本日3度目の打撃音が響き渡った。
「織斑先生と呼べ」
「…はい、織斑先生」
と言った会話により、クラスが色めき立つ。
「えっ…もしかして織斑くんって千冬様の弟?」
「いいなぁ、変わって欲しい」
一夏と千冬の関係性が明らかになった影響で、再度ざわざわと騒がしくなっていく。
ＩＳ操縦者にとって憧れであるブリュンヒルデの織斑千冬の弟であれば、羨ましいと思うのは仕方ない事である。
「さて、時間が無いのでこの辺でＨＲを終了する。他に聞きたいことがあれば各自聞くように、では授業を始める」

1時間目の授業が終わった休み時間、八雲は視線の嵐に晒されていた。
織斑千冬の弟と言うことで一夏もかなり注目されているが、突然見つかった第2の男性操縦者と言うことで一夏並みかそれ以上に注目されていた。
現に他クラスからかやって来た女子生徒が教室の入口から中を覗いていた。
そんななか意を決したように近付いてきた一夏が八雲に話しかけた。
「えっと、鷲崎さん？織斑一夏です、同じ男同士仲良くしたいなぁなんて思ったんですけど…」
「ああ、そんなに固くならなくても良い。年上と言ったがどうせ少し早く生まれただけだ、敬語も要らん。八雲とでも呼んでくれ、せっかく同じクラスになったんだよろしく頼むよ」
「こちらこそ宜しく八雲！」
握手をする2人にチラホラと出遅れたと言うような声が聞こえてくる。
「…少し良いだろうか」
そんな折、後ろから話し掛けられて2人して振り向いた。
そこに居たのは清楚美人と言った感じの少女。
腰まで伸びる長髪をポニーテールで纏めている。
「すみません鷲崎さん、一夏を借りても良いでしょうか」

「ああ、ご自由に。知り合いだろう？積もる話もあるだろうしな。ああ、あと敬語は要らんぞ。」
「感謝する、では行くぞ一夏！」
「ちょ、ちょっと待てって箒！」
箒と呼ばれた少女に連れられて教室を後にする一夏。
覗いていた女子生徒の半数は一夏の後をアヒルの子宜しく着いていき、残りは名残惜しそうにしながらも未だにクラスを覗いていた。
一夏よりも八雲を取った模様である。
「ねぇねぇやくも～ん」
一夏が去って数秒、隣の席の少女が八雲に話し掛けてきた。
早速妙な渾名が着いていたが八雲をもじったものだとすぐ分かる故にそのことには触れなかった。
「あ、本音ズルい！」
「良いなぁ、あの性格羨ましいかも」
牽制していた女子生徒達は、1人八雲に話し掛けた少女を羨ましそうに見ていた。
「どうした、確か布仏本音と言ったか」
「わぁ～、知っててくれたんだ～」

「俺を除いたクラス３０人、全員覚えている。これから1年間過ごすのに名前を知らない等失礼だからな」
「律儀だねぇ～やくもんは～」
　入学するにあたって見せられたクラス名簿、千冬が自己紹介の時間が無くなると踏んで先立って八雲に見せていたのだった。
「これから1年よろしくねぇ～」
「ああ、よろしく」
　それを見ていた周囲が八雲に詰め寄ろうとして一斉に席に座った。
　その直後破裂音が響き渡った。
「とっとと席に着け織斑」
「…ご指導ありがとうございます、織斑先生」

「ーーであるからしてＩＳの基本的な運用は、現時点各国家の認証が必要です。これを逸脱した運用をした場合、ＩＳ運行法第２条によって罰せられーー」

すらすらと教科書を読んで進んでいく真耶。
そんな真耶と教科書を交互に見ながら焦ったようにページをめくる一夏の姿。
ふと一夏が周囲を見回すと、何の焦りもなく普通に授業を受けるクラスメイトしか映らない。
「織斑くん、何か分からないところがありますか?」
「あ、えっと…」
「分からない所があったら遠慮なく言ってくださいね、何せ私は先生ですから」
様子を見た真耶が一夏を指す。
一夏は再度教科書へと視線を落とし、意を決して口を開いた。
「先生!殆ど全部分かりません!!」
「…えっと、全部…ですか」
途端に困り果てたような顔になる真耶。
それはそうだろう、この段階でほぼ全て分からない人間等真耶の教師人生の中で初めてなのだから。
他の生徒もこんな初歩が分からないのかと、驚愕を顔に浮かべていた。
「えっと、今の段階で分からない人は居ますか?あ、鷲崎くんは大丈夫ですか?!」

「事前予習のお陰で問題無いです、それに先生の教え方も上手ですのでとてもわかり易いです」
「本当ですか！ありがとうございます！」
　八雲の答えに笑顔を浮かべる真耶。
　そんななか気になったのか千冬が口を開いた。
「そう言えば織斑、参考書はどうした。今も持っていないようだが」
「古い電話帳と間違えて捨てました！」
　ズガンっ！
　再度、千冬の持つ出席簿が炸裂した。
「必読と大きく書いてあっただろうが馬鹿者、再発行してやるから後で取りに来い。良いか、今週中に覚えろ。」
「いや、1週間であの厚さはちょっと…」
「私はやれと言った。ただでさえ遅れている差をまた広げる気か？」
「はい、やります…」
　千冬に睨まれ、一夏はしょぼくれながら頷いた。自業自得とはいえ千冬の眼光に睨まれた一夏には同情を隠せない。
「貴様、『望んでこの場所に来たわけではない』と思っているな？」

その言葉に反応するように一夏はビクっと震えた。
「望む望まざるに関わらず、人は選択を迫られる。それが自分の意志かどうか等関係ない、たとえ理不尽でも受け入れそして選ばなければならない。どういう選択を選ぶにしろ、その時にやるべきことをやらねば切り捨てられる。今のお前は選択肢を突き付けられていることを忘れないように」
一夏は少し考える素振りを見せ、1人頷いた。
「分からないことがあったらどんどん教えてあげますからね、何せ私は先生ですから！」

「ちょっとよろしくて？」
「へ？」
2時間目の休み時間。
何かを決意したのか速攻八雲に勉強を教わりに来た一夏。
断る理由も無く、教えようとした時に突如声がか掛かる。

２人して振り向くと、そこには金髪碧眼の少女が居た。
「訊いてます？お返事は？」
「あ、ああ。訊いているけど…どういう用件なんだ？俺はこれから八雲に勉強を教わりたいんだ、出来れば手短に頼みたいんだが…」
「まあ、なんですのその態度は。私に話しかけられたと言うだけでも光栄な事なのですから、態度もそれ相応にするべきではなくって？」
「……」
この手の人間が苦手な一夏は若干口を引く付かせる。
ふと気になって八雲の顔を見た一夏は、途端に冷静になれた。
形容し難い程冷めた目で少女を見ていたからだ。
「悪いな。俺、君のこと知らないから」
「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして入試首席のこの私を？」
一夏が知らないと言った事で捲し立てるような剣幕で名乗りをあげるセシリア。
それに対し一夏は軽く手を上げて口を開いた。
「あ、質問良いか？」
「ふん。下々に要求に応えるのも貴族の努めですわ、よろしくてよ」

「代表候補生ってなんだ？」
がたたっ
聞き耳を立てて聞いていたクラスの女子、そしてそれを近くで聞いていた八雲ですらずっこけた。
「おい、嘘だろお前。知識が無いのは知っていたが、まさかここまでとは。良いか、代表候補生とは国が抱える国家代表ＩＳ操縦者の候補生。わかりやすく例えるならばオリンピックの強化選手だ、強化選手から出場選手が選出されるだろう？一言で言えばエリートだ。」
「そう、エリートなのですわ！本来なら私のような選ばれた人間とクラスが同じ等奇跡、幸運ですわよ？その現実をもう少し理解していただけます？」
「ほう、そうか。それはラッキーだ」
「…馬鹿にしていますの？」
冷たい目で一夏を見るセシリアだったが、一夏はその目を見ても何も思うところがなかった。
むしろ隣にセシリア以上の冷めた目でセシリアを見ている八雲が居たから、感情も冷静だった。
「大体、あなた方ＩＳについて何も知らない癖によくもまあこの学園に入れましたわね。

唯一男でＩＳ操縦出来る２人と聞いていましたが、とんだ期待はずれですわね」
「いや、俺達に期待されても困るんだが」
「ふん、まあでも？私は優秀ですから、あなた方のような人間にも優しくしてあげますわよ」
　物凄く上から目線の言い方に、一夏も気分が悪くなる。
「ＩＳの事で分からない事があったら、まあ泣いて頼むのなら教えて差し上げても良くってよ？何せ私は入試で唯一教官を倒したエリートなのですから！」
「入試…あれ？俺も倒したぞ、教官」
「…は？」
　一夏の何気ない一言で固まるセシリア。
　八雲も信じられないと言ったかんじで一夏を見ている。
「わ、私だけと聞きましたが…」
「女子だけってオチじゃないか？まああれを倒したって言って良いのか微妙だが」
　その言葉に八雲はその場面を想像出来た為幾分か落ち着きを取り戻した。
「あなたはどうなのですか！」
「俺か。あれに勝てる等造作も無いと言いたいが、４割削るのがやっとだったな。まあ世界最強の壁は高かったとだけ言っておこう」

そう語る八雲の顔には冷や汗が流れていた。

ＩＳ学園の入試には座学と実技があり、実技試験は学園の教員が教官となり試験者と相対する。

試験内容はＳＥ（シールドエネルギー）１０００に設定された訓練機に受験生が乗り、試験官側が５００。スタートして試験官のＳＥを１割削るか手に持っている武器を破壊すれば合格と言うもの。決して勝たなければいけない訳ではない。

そんな試験だが八雲の相手は千冬だった、それも割とガチな実力を出していた。

セシリアも一夏もそれに勝ったと思ったのだ。

だがセシリアの教官も一夏の教官も察するに同じ人らしく、ドジをしているらしいと。

その時点で千冬ではないと確信した。

その時チャイムが鳴った。

「っ!!また後で来ますわ、逃げないことね。良くって??!!」

そう言ってセシリアは自分の席に着いた。

ふと抱いた疑問を飲み込んで。

結局一夏は勉強を教われなかったのだが、いいのだろうか…

「ではこの時間は実際使用する各種装備の特性について……ああ、そうだ。その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

３時間目。

千冬が教鞭を取る授業と言うことでクラスも、そしてとなりに居る真耶ですら気合が入りノートを取っていた。よほど大事な授業らしい。

そんななか千冬がふと思い出したように言う。

「クラス代表者とは簡単に言えば学級委員長みたいなものだ、だがＩＳ学園独特なのはクラス代表者がクラス対抗戦に出る事だな。対抗戦は現時点での各クラスの実力推移を測るものだ、今の段階では大した差は無いぞ。どうだ、我こそはという者は。自薦他薦は問わんぞ」

ざわざわと色めき立つ。

そして団結したかのように１つの結論に到達する。

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「じゃあ私はやくもんなのだ～」
「私も私も！」
たった2人の男性操縦者。
その2人が同じクラスに居るのだ、そのネームバリューを利用しない手は無いのだ。
「って俺?!」
自分の名前が出されている事に気付いた一夏が立ち上がった。
だがその背に突き刺さる視線は『彼なら何とかしてくれる』と言った期待が籠もっていた。

「ちょ、ちょっと待った！俺はそんなのやらーー」
「自薦他薦は問わんと言ったぞ。他薦された者に拒否権等あるものか。大体そこの男を見てみろ」
そう言われて八雲を見る一夏だが、真っ直ぐこちらを見ていた。そして目が語っていた。
『座れ』と。
「八雲は良いのかよ!?」
「やれと言うならやるさ、拒否する理由がない。第一せっかく推薦してくれたんだ、ここ

でやらなきゃ失礼だろう？」
「話は着いたか？なら座っていろ織斑。他に居ないか？居なければ２人で決選投票をーー」
「待ってください！納得がいきませんわ!!!」
　千冬の言葉を遮り、机を勢い良く叩きながら立ち上がったのは先程絡んできたセシリア・オルコット。
「そのような選出は認められません！大体男がクラス代表等いい恥晒しですわ！この私、セシリア・オルコットにそのような屈辱を１年間味わえと言うのですか!?実力を考えれば私がクラス代表になるのは必然、それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困りますわ！私はこのようなこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気等毛頭ありませんわ!!」
　唐突に始まった演説。
　面倒臭さを感じた八雲は早々に聞くことを放棄していたが、一夏は違ったようで。
　当初は期待、そして今は困惑した表情で聞いている。
「良いですか！クラス代表者は実力トップがなるべきであり、現在このクラスのトップは私ですわ！大体、文化としても後進的な島国で暮らさなくてはならない事自体耐え難い苦痛でーー」

「イギリスだって大した国じゃないだろ。世界一不味い料理で有名じゃねぇか」
「なっ!?」
一夏がキレたのか、言い返してしまった。
それを聞いた八雲も、流石に頭を抱えた。
いくら相手が、自国を侮辱する発言をしたとしても自分が同じような発言をして良い理由にはならないのだから。
「あ、あなた!私の祖国を侮辱しますの!?」
「そっちが先に侮辱したんだろ?」
売り言葉に買い言葉、八雲からしても幼稚な子供の喧嘩にしか見えない。
それを子供がやっているならまだ見ていられる、だが2人は高校生だ。
十分大人の仲間入りを果たしている男女が売り言葉に買い言葉でカーッとなって喧嘩等、幼稚以外の何物でもない為八雲は無視していた。
故にこれ以上ヒートアップしないようにと抑えた千冬の提案をバッサリ拒否したのだ。
「織斑先生、話し合いで解決しないなら俺は降ります」
「まあお前なら言うと思ったが一応聞いておこう、何故だ?」
「誰が見てもわかるでしょうに。売り言葉に買い言葉でカーッとなって喧嘩ですよ?子

供じゃ無いんですから。それに巻き込まれるなら俺は全面的に降りますよ、推薦してくれた人に申し訳ないですけど」

それを聞いた千冬が腕を組んで考え出す。

だがこれで参加していれば、彼女にとってむしろ良かったのかも知れない。

それをよく思わないセシリアが口を開いた。

「ふん、逃げますのね。やはり男性等弱くて醜い下等生物に過ぎないようですわね」

「流石に言い過ぎだと思うが、そこのところに何か思う事は無いのか？」

「あるわけないですわ。この私と戦うのが怖い男に何を思えと？あなたでこれなら、あなたの親もさぞ醜い下等生物なのでしょうね」

「……！」

セシリアがそう言った途端、何かが切れる音が響いた気がした。顳顬を引く付かせる八雲の顔は、相当に酷いことになっていただろう。

現に何人か、青い顔になって座り込んだ。

「家族を侮辱するとは、よほど死にたいらしいな小娘。穏便に済ませてやろうかと思ったが……やめだ」

途端、八雲の姿がブレた。

否、ブレたように見えた。

「は、え？」
瞬きをしたその数瞬、八雲はセシリアの目前に居た。
首筋に手を突き出して。
たったそれだけの行為だが、誰も目で追う事ができなかった。
ただ一人、千冬を除いて。
「何のマネだ、世界最強」
「傷害になりそうだったので止めただけだが？むしろその言葉は私が言うべきだろう、一体何のマネだ？鷲崎八雲」
セシリアの首筋、その数センチ手前で八雲の腕は止まっていた。
否、止められていた。
千冬の手によって。
「そこの小娘は、よりにもよって俺の家族を侮辱した。その手を退けろ世界最強」
「織斑先生と呼べと…まあいい。退ける訳にはいかんな、私の前で犯罪でも起こすつもりか？」
「犯罪ではない粛清だ、こういったタイプは言っても無意味。ならば体で聞かせるしかない、だから退け世界最強」
「ふむ。なら先程の提案で決着を付ければ良いだろう、ＩＳを纏ったうえでの模擬戦と

いう形式なら私は何も言わん」
そう言われ、少し考えた後八雲は拳を収めた。
そして改めてセシリアへと向き直り口を開いた。
「お前の望み通り戦ってやろう、今から楽しみだなあおい」
そう言って席へと戻っていく八雲。
その姿を、セシリアはただただ見つめるしかなかった。

第2話

「うう…」

放課後。

今の一夏にとって難し過ぎた授業は、一夏をぐったりさせていた。

八雲に教えを請おうとしたが、アレ以来かなり不機嫌だった為声をかけるのを躊躇った。

昼も誘おうと思った一夏だったが、声をかける前に教室を出て行った為出来なかったのだ。

「あ、良かった。織斑くん鷲崎くん、まだ教室に居てくれたんですね」

「はい？」

教室に残っていた八雲による気まずい雰囲気の中にいた数名のクラスメイトと一夏、そんななか来たのが真耶。

手に書類が入ったバインダーを複数持っていた。

「えっとですね、２人の寮の部屋が決まりました」
そう言って部屋番号の書かれたキーを手渡す真耶。
この学園は全寮制であり、外部から通うという事は禁止されている。
これは学園の生徒が登下校中に勧誘や拉致、暗殺等に合わないために保護する目的もある。
「あれ、俺の部屋って決まっていないんじゃ無いんでしたっけ。前に聞いた話だと1週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」
「そうだったんですけど、事情が事情なので一時的措置として無理矢理部屋割りを変更したんですよ。本当申し訳ないんですけど、本日から寮に入ってもらいたいんですけど…本当に無理矢理部屋割りを変更したので個室では無いので、相部屋ですけど」
「はあ、分かりました。あ、でも荷物が無いので一旦帰っても良いですかね」
「あ、荷物ならーー」
「私が手配しておいた。まあ生活必需品だけだがな、ありがたく思え」
後ろから、入って来た千冬がそう声をかけた。
恐らく一夏の脳内で何かしらの曲が掛かっているだろう。
「ああ、鷲崎。お前の荷物は既に部屋に搬送されている、後で確認するように」
「了解です。あとご迷惑をおかけしたようで、すいません織斑先生」

「いや、ああ言われてはキレるのも仕方が無い。実際、お前がキレていなければ早々に話を終わらせるつもりだった。恐らく私もキレていただろうからな」

そう言った千冬の持つ出席簿がミシミシと悲鳴を上げる。

国を侮辱されて良い顔をする人間は居ないだろう、肉親を侮辱されて良い顔をする人間はもっと居ないだろう。

その例が八雲だっただけだ。

「じゃあ時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の1年生用食堂でとってくださいね。各部屋にシャワーがありますので、今はそっちを使ってください。一応大浴場もあるにはあるんですが、諸々理由がありまして織斑くん達は今の所使えません。」

「え、何でですか?」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか?」

「織斑くん!女子とお風呂なんて駄目ですよ?!」

そう言われて初めて気が付く一夏。

この学園の男子は八雲と一夏のたった2人なのだ、2人の為に大浴場の時間を調節するのがどれほど大変か等想像を絶するかも知れない。

「なら少し距離を取るべきか、俺は性犯罪者と馴れ合うつもりは無いのでな」

「い、いや入りたくないです！だから距離取らないで！」
「ええっ女の子に興味がない？えっと、それはそれで問題のような気が…」
「どうやら距離を取る選択肢は間違っていないようだな、俺の後ろに立たないで貰おうか。」
　スッと八雲が逃げるように千冬の背後に回る。
　それを見た千冬も後ろに回った八雲を庇うかのように片手を広げた。
「ふむ、育て方を間違えたか？何時からホモになった、織斑」
「あんたもか千冬姉!!!」
　一夏の悲痛な叫びが響き渡った。

「織斑くん男にしか興味ないのかしら？」
「それはそれで…ジュルリ」
「中学時代の交友関係を洗って！直ぐよ直ぐ、明後日までには裏付けとってね！」
「一夏×八雲？八雲×一夏？どっちも良いわね」
　不穏な掛け算が聞こえた気がした。

「えっと、それじゃあ私達は会議があるのでこれで。織斑くん、鷲崎くん寄り道はしても

時間までに部屋に帰るようにしてくださいね」
そう言って真耶は去っていった。
遅れて千冬も後を続いて歩きだし
「ああ、そうだ鷲崎。つい先程鷲宮から伝言を預かっている。『2番アリーナで待っている』と。確かに伝えたぞ」
「ありがとうございます、織斑先生。確かに聞きました」
軽く手を上げ、今度こそ去っていった。
「さて、一夏。俺は予定が入ったので先に戻っていろ、恐らく夕食までには戻れると思うがな」
「そうか、分かった。じゃあまた後でな！」
「ああ、後でな」
いい笑顔で手を振りながら、一夏は寮へと小走りで歩いていった。
「あいつからの呼び出し…やはり嫌な予感しかしないな」

「遅い！呼び出してから来るまでが遅すぎる！」
「いや、伝言聞いたのついさっき何だが？いやむしろ連絡入れてくれればすぐ分かったんだがな」
第２アリーナに入った八雲を待っていたのは、憤慨する少女だった。
もう一人、傍らに少女を連れて仁王立ちしている。
「我が姉。八雲。間違ってない。伝言。違う。携帯。なんの為？」
「うっさいわね真由美！分かってるわよ！」
妹に指摘された事が正論だと分かっていても、指摘された事実に照れ隠しのように怒鳴る。
「で、何の用件で呼び出したんだ叶（かなう）。まだ初日だぞ？」
鷲宮叶、そして鷲宮真由美。
現日本国家代表と代表候補生だ。
特に叶は世界の国家代表の序列３位を拝命している、そして妹の真由美も日本国内の候補生序列４位の実力者だ。
「聞いたわよ、イギリスの候補生と戦うんでしょ？」
「手が早い」
「耳が早いな、まあその通りだ」

昼前の出来事だと言うのに、放課後の今既に知っていた。
「まあ貴方なら負けはないと思ってるわ、何せ私が色々叩き込んだんだからね！」
「我が姉。八雲。あの時死にかけた。やりすぎ」
「いやまあアレのおかげで割と上達したから文句は無いんだが…」
八雲の額にはツーッと冷や汗が流れていく。
思い起こすのは1年前。
八雲が試作ＮＥＸＴのテストパイロットに選ばれたという話を聞き付けた叶が突然襲来してＩＳの基礎から実技から叩き込み始めたのだ。
その当時はコアを乗せるつもりの無い新規のＡＣ　のテスターとして搭乗していたのだ。
当然の要らない知識になるはずだったが、２人目になったことでお察しである。
尚、八雲はＮＥＸＴプロジェクト進行後直ぐにＩＳコアと呼応したため厳密に言えば最初の男性操縦者と言える。
「一応。血が繋がった従兄妹。我が姉。慈悲は？」
「うっさいわね、あるからやったに決まってるでしょ」
鷲宮家。

その母親の旧姓が鷲崎なのだ、それがなんの接点もなさそうな八雲と国家代表を繋ぐ繋がりである。
血の繋がりがある家族だからこそ厳しく教え込む。それは無様を晒さない為、そして自衛の為の実力向上の為でもある。
「八雲、構えなさい。今日は生身で行くわよ」
「今日はそういう気分か」
「ええ、行くわよ!!!」
八雲の両腕が下がった瞬間、叶が瞬時に近付き蹴り込む。
蹴りを横に流した八雲が、流した力を利用して得た遠心力と体重を乗せた拳を叩き込む。
「ハァ!!」
「クッ、きっつ…」
男女差も体格差もある為強烈な一撃となり、それをガードした叶が口を零す。
女子の体重と男子の体重が乗った攻撃なら、必然的に後者の方が威力が増す。
「代表ナメんな!」
「ッチ!」
ガードした体制から一点、瞬時に腕を掴み投げに掛かる。

そしてそのまま膝を出そうとして、それを捌いた八雲が咄嗟に後ろに飛んだ。
「あんたのそれ、本当厄介。どうやって読んでる訳？」
「まあ、目だな。後呼吸か」
「本当頭おかしいわ！」
会話中の八雲の不意を打って真由美が後ろからボールを投げる、だが八雲は叶の方を見たまま避けたのだった。
「それはどう説明するのかしらね？後ろを向いたまま避けてるし」
「勘と言えば満足か？」
「はぁ、もう良いわ時間だし」
「八雲。異常」
溜息を着いた叶が解散を促す。
それを聞いて一言呟いた真由美が一目散にアリーナを出て行った。
「じゃあまたね八雲」
「ああ、またな」

「１０４０室、ここか」
叶とのど付き合い（意味深）を終えた八雲は荷物確認も含めて自室の扉に向き合っていた。
貰った鍵と部屋番号を２度確認した後、間違えていない事を確認してからドアをノックした。
「ん、人の気配はあるが動いていないな…ドアから５歩か」
ノックをしても無反応だった為同居人は留守だと思ったが、よくよく感じてみれば部屋の中から人の気配がするのだ。
ドアの前に居るという事は歓迎するために居ると判断し、八雲は意を決してドアを開けた。
「おかえりなさい。ご飯にする？お風呂にする？それとも、わ・た・し？」
「……」
人は許容量オーバーの情報が脳に入るとフリーズするらしい。
目の前の裸エプロンを着用した女子生徒を前に、八雲は固まっていた。
「おかえりなさい。わたしにする？わたしにする？。そ・れ・と・も？わたしにする？」
「ふむ。現状が見えてこないが、ひとまずお前が痴女だと言うことは分かった。」

「反応しないどころかその言い草は酷くないかしら!?」
唐突な痴女呼ばわりに女子生徒は声を荒げる。
だが裸エプロンなんて格好をしている時点で、言い逃れなどできるはずもない。
そしてまたマニアックな事に制服についているリボンを、裸エプロンの状態で首に付けていた。
もはやそういうプレイなのかもしれない。
「そのリボンの色からして2年だろう? なら裸エプロン先輩とでも呼んだほうが良いか、いやむしろ省略して痴女ロン先輩か」
「その呼び方は私の尊厳とか色々と無くしそうだからやめて頂戴、本当切実に」
八雲の呼び方に対して必死に懇願する少女、その姿は滑稽だったが。
「で、上級生が1年の寮室になんのようだ。誘惑なんて冗談は言わんよな?」
「んーそうねぇ、簡単に言えば護衛かしらね」
「護衛か、たかが生徒にと思ったがそうでもないのか」
「ええそうよ。貴方達2人は世界初の男性操縦者、それをよく思わない人も大勢居るわ。この学園にも少しね」
裸エプロンでベットに正座する少女は、胸を張りながらそう言った。裸エプロンだからだいぶ強調されていたが。

「さて。改めて私の名前は更識楯無、この学園の生徒会長をやっているわ。護衛の為同室になるわ、これからよろしくね」
「鷲崎八雲だ、これからよろしく頼むよ。裸エプロン先輩」
「だからその呼び方はやめて頂戴！」
「で、本当の要件はなんだ？」
　不意を突いた八雲の言葉に、思わず楯無の頬が引き攣る。
　それを見た八雲は本当に確信した。
「ふむ、護衛は嘘ではないが本当でもない。となれば、監視か」
「…っ！」
「まあ、推察は出来るだろう？織斑一夏が世界初の男性操縦者として見つかって、その後発見されたのが俺だしな。あいつには姉の威光を注視してか国がバックについたが俺は一般人のままで、研究機関が寄ってたかって俺を拉致しに来るかもしれない故の保護。で、監視は俺の入試の結果だろ？」
「ええそうよ、貴方は入試で織斑先生のＳＥを４割削ってみせた。ＩＳに乗っての戦闘行為はあの時が初めてであるはずの貴方が、圧倒的な戦闘能力を誇る初代ブリュンヒルデを相手によ。到底、見つかったばかりなんて思えない。それこそ前から動かせたのを隠していたかのように怪しいのよ。故の監視よ」

楯無が言った通り八雲は怪しいのである。
全国一斉調査で見つかって入試まで2ヶ月あったとはいえ、その2ヶ月間でブリュンヒルデの操る打鉄のSEを4割削る事ができる一般人などありえないのだ。
故に一般人では無いのではないかと、楯無は思っているのだった。
「バレたなら仕方ないわ、ハッキリ聞くわね。貴方は何者？貴方はこの学園の敵？」
いつの間にか手に持っていた扇子を八雲に突きつける楯無。
その目は、値踏みするかのように鋭かった。
「この学園が俺の大切なものに手を掛けない限り、敵にはならんよ。」
「セシリアちゃんの前例があるのだけど、朝の事は忘れたとは言わせないわよ？」
「あれはあの女が悪いだろう。人の家族を侮辱して、無感心でいられる程俺は出来た人間じゃない」
「ふーん、まあ今は信じてあげるわ」
そう言った楯無は扇子を引っ込め、代わりに右腕を出した。
「じゃあ改めて、これからよろしくね八雲くん」
「ああ、裸エプロン先輩」
「ちょっと！もういい加減忘れてよ！」
「その格好でいる限り無理な話だ」

そうこうしているうちに時間は過ぎ、八雲は見事夕食を逃すのだった。
その事に気づいたのはふと時計を見たとき。
現在時刻は１８時５８分、食堂が閉まるのが１９時だ。
そして八雲の寮室は寮の端の方で、そこから食堂まで例え全力疾走したとしても２分では着かない。
「はぁ、初日から食いそびれるとは…」
「あら本当ねぇ、お姉さんお腹空いたわ」
「白々しい事、一体誰のせいでこうなったんだか」
そう言いながら、八雲は部屋に届いていた荷物を漁り出す。
楯無も興味深そうに脇から覗くと、それを押し退けるように八雲が手で制する。
そしてお目当ての物を取り出すと、１つを楯無へと投げた。
「おっと、んーなになに。『夕飯一膳分のエネルギー補給食』これトーラスの新作エネルギー食ね、準備が良いと言うかなんて言うか。」
「腹は膨れないが、１食分のエネルギーは補給出来る。どうせ食べ物も用意してないんだろう？」
「まあそうなんだけどー」

もしゃもしゃと補給食を食べながら楯無は顔を赤らめる。
自分の分がないだけなら我慢すれば良いが、楯無は八雲の夕飯の時間も潰してしまっているのだ。
故に恥ずかしさと申し訳ないなさとが入り混じって、楯無は不貞腐れながら食べていた。
一方の八雲は足りなかったのかもう一本を取り出して食べ始めた。
そして食べながらタオルと水筒を取り出すと、立ち上がってドアへと向かい始めた。
「あら、どこに行くのかしら？」
「日課だ。夕飯を食べた後は大体体を動かしているからな、環境が変わったからと言って変えるわけにもいくまい」
「いい心掛けね、私も着いて行っていいかしら？」
その言葉に少し考える八雲。
まだ初日で、尚且新入生である。
そんな八雲が上級生を連れて歩いて有らぬ噂が立つと自分の立場が悪くなるかもしれないし良くなるかもしれない。
だが彼女は生徒会長だ。
今の所学園内での後ろ盾の存在しない八雲にとって、生徒会長と親しい人間だと思わ

れる事は別に悪いことではない。
そして彼の知らない事だが、生徒会長の選定基準は会長が卒業時に後任を選ぶ、もしくは現生徒会長と正面切って戦い打ち倒す事。
”生徒会長は最強であれ、何時如何なる時でも挑戦を受け付ける”
これがＩＳ学園の生徒会長の実態である。
つまり、生徒会長であること＝学園内最強の存在だということなのだ。
「まあ別に構わないが、特別な事は何もしないぞ？ただグラウンドを走るだけだしな」
「それでもいいわ、気になるだけだもの」

そう言って着いてくる楯無を横目に見ながらも、八雲は立ち上がる。

「それはいいんだが…その格好で行くのか？」
「ん？…あっ？！待ってて、直ぐに着替えるわ!!!」
指摘するまで裸エプロンで居た事を忘れていたのか、慌てるようにバスルームへと走っていった。
因みにだが、本当に裸エプロンだった訳では無く下に水着を着ていた事がバスルームに向かう際の後ろ姿を見た八雲が後に語っている。

楯無も意外と純情な乙女らしい。

そして２時間後。

そろそろ門限だということで八雲は切り上げ、後ろを着いてきている筈の楯無の方を向いた。

が、楯無はだいぶ遠く、２０ｍ程度離れた辺りでくたばっていた。

「はぁっ…はぁっ…」

「大丈夫か？」

「大丈夫な訳…はぁっ…無いでしょ…はぁっ…」

八雲のペースは速く、楯無がいつもトレーニングで走る速さの倍はあった。

男女の歩幅の差というのは大きいもので、楯無の２歩が八雲にとっての１歩であった。

八雲に置いて行かれないようその歩幅の差を足を出すペースを上げる事で解決し、楯無は八雲と並走していた。

普段より速いペースであるにもかかわらず八雲と並走していた楯無だが、それが３０分を超えたあたりから置いてかれ始めた。
置いて行かれそうになる度に少しペースを上げ、ペースを上げたことで疲労がいつも以上に蓄積し自然とペースが落ちる。
そしてそれに気づいてペースを上げるの悪循環になっていた。
そしてそこから1時間経つ頃には諦めたのかいつも通りのペースに戻ったのだが、最初に飛ばしていたのが仇になり残り３０分を死にそうになりながらも完走したのだった。
そして現在、屍と化している。
そんなになるまでしないで途中でリタイアすれば良かったのに、楯無は走りきった。
完全に意地である、途中で諦める事は楯無のプライドが許さなかったのだ。
「もう、絶対着いてこないわ。どういう体力してるのよ…」
そう呟いた楯無の視線の先に居る八雲。
彼は最初から最後まで同じペースをずっと保ちながら2時間走っている、それなのに薄っすら汗をかいている程度であまり息が上がってないのだ。
「日々の積み重ね、最初は３０分すらキツかったがな。毎日必ず限界まで自分を追い込めば、これくらいは普通に出来るようになるだろ」

「いや、普通じゃないわそれは。自分を毎日追い込むなんて早々できる話じゃないわよ」
「やる前から諦めているから出来ないと言うのだろう?実際やってみて、続けてみなければ結果は分からない筈なんだがな」
八雲の言う事は最もなのだが、果たしてそれを実行出来る人間がどれ程居ることか。
楯無の態度に首を傾げながらも、2人で部屋に戻っていくのだった。

第３話

翌朝、八雲は割と早めに食堂へと来ていた。
運動部もある関係上、朝の食堂は６時から開いている。
昨日食べそびれたからか、早くに食べておきたいというのもある。
正直エナジーバー２本程度食べた所で、空腹が我慢できる訳が無いのだ。
「あ、鷲崎さん。ここ座っても良いですか？」
「ああ、構わない」
ＡセットとＢセットの２つを食べていた八雲に声をかける少女、許可が出ると少し小さくガッツポーズをして安堵の溜息を零していた。
「昨日の今日で話した事は無かったな、鷲崎八雲だ。よろしく頼む」
「相川清香です、こ、こちらこそよろしくお願いします！」
相川清香、八雲と同じ１組の出席番号１番の活発少女である。
そんな清香は少し緊張していた。

女子中学校出身故男性にあまり慣れていない事もあるが、八雲は清香にとって２つ年上なのだ。

「そんな固くならなくても、もっと砕けた話し方で良いんだがな。敬語もいらんぞ」

「アハハ、ありがたいですけど…良いんですか？」

清香の脳裏では、昨日のある場面がずっと巡っていた。

そう八雲のブチ切れた場面である。

当事者では無かった清香ですら、その場面を見て恐怖を抱いている。

それ程までに印象的だったのだが、それでも打ち解けようと意を決して話し掛けたのだ。

だいぶ勇気がある少女だと言える。

「昨日の事か」

「っ！はい…でも、意味も無く行動した訳ではないって分かってますから！」

そう言った通り、八雲がキレた理由は家族を侮辱されたからだ。

誰だって家族を侮辱されたら怒る、自分だってそうなのだからと思ったからだ。

ただその後の行動が、少女達にとっては過激であり、それは清香にとっても同じだった。

「ありがとう、理解してくれる人が居るのは嬉しい事だ」

「いえいえ、そんな大層な事じゃ」
だいぶ打ち解けたのか、敬語はまだ混じっているがかなり砕けてきている。
２人共も食べ終わり雑談しているが、そこからはもう殆ど緊張は感じられなかった。
「あー、きよっちズルいっー！」
「清香が抜け駆けしてるー！」
「佳奈！ほのか！違うんだってば！」
そこにやって来た２人の少女。
２人共同じクラスであり、八雲とも席が近い。
湯本佳奈と七瀬ほのかだ。
「ねえねぇ鷲崎さん、きよっちと何話してたの？」
「清香、随分楽しそうだったもんねぇ」
「ちょ、２人共っ?!」
佳奈もほのかも、楽しそうな清香と八雲の話が気になって仕方なかった様子だ。
清香も２人の話に慌てるが、１番の理由が昨日の八雲を見ているにもかかわらず普通に話し掛けた２人に驚いていた。
「２人は俺が怖くはないのか？俺に話し掛けてきた時相川は凄くビクビクしていたが」
「ちょ!!鷲崎さんっ!?」

２人に対する思わぬ援護に清香は慌てる。
だが件の２人はそうでも無かったようだ。
「へぇ清香がねぇ」
「でもきよっちの場合男の人と話すの久しぶりだから緊張てのもあるんじゃない？」
「い、言わない!!」
更に弄られる清香は、顔を赤く染めてテーブルに伏してしまった。
「でも実際は私も怖かったです。ですが考えてみて思ったんですよ、家族を侮辱されたら誰だって怒るって。鷲崎さんは家族愛が特に強いから、あんなふうにキレちゃったんだって」
「そう考えたら怖いなんてバカらしい考えかなぁってね。清香もそう考えたから鷲崎さんに話し掛けたんじゃない？ねぇねぇ清香、そこんところどうよ」
伏してぷるぷる震えている清香、その腕の隙間から見える頬をツンツン突いているほのか。
もう真っ赤であった。
「流石にそのへんにしておいてやれ、見ていていたたまれなくなる」
「はーい、結構楽しかったんだけどなぁ」

その後もワイワイと迷惑にならない程度の声量で騒ぐ３人と、聞きに徹しながらも時折会話に混ざる八雲の図が出来上がる。

八雲が食堂に入ってから既に1時間弱は過ぎている。１０分で食べ終わったのだが、清香や佳奈、ほのか達と喋っていたのでだいぶ時間が経っていた。

それだけの時間が経てば起き始めてきた生徒達も続々とやって来て朝のラッシュ気味だった。

「あ、おーい八雲!!」

その時、食堂の入口付近から声が響いた。

男声の為対象は簡単に分かる。

織斑一夏だ。

一夏は八雲を見つけると、定食セットを持ちながらズンズンと歩いてきた。

それを慌てるように自分の定食を持って追いかけるポニーテールの少女だが、その顔は物凄く不満気だった。

「今日は居るんだな、昨日の夜来なかったから何かあったのかと思ったぜ。大丈夫なのかよ」

「ああ、特に問題ない。それとすまんな」

「良いって良いって。あ、それよりさーー」

一夏がほぼ一方的に会話を畳み掛けてくる。
それをよく思わない少女が、４人居た。
１人篠ノ之箒。
彼女は一夏と2人での朝食を楽しみにしていたがこれである。
残り3人は清香、佳奈そしてほのかである。
この3人は八雲と談笑していたのだ、その楽しい時間を現在一夏に遮られている。
例え人気者でも、人が話している所に割って入ると不快に思われるのは仕方がない。
この3人としても一夏とも話をしたいと思ってはいたが、こうなってしまうと少しずつではあるがその気持ちも薄れるだろう。
自分達にも話を振ってくれる訳でもなく、一夏は八雲にほぼ一方的に会話を振っているのだから。
「い、一夏。その、そろそろ…」
流石に3人への申し訳無さが大きくなり過ぎた箒が、一夏へと進言する。
「ん、ああそうだな。じゃあ八雲、また後でな」
「ああ、教室でな」

そう言って一夏は空いている席を探しに行った。

その後ろ姿を追い掛けるように箒は慌てて、こちらへ一礼してから小走りで立ち去った。

「例え面倒だと思っても顔に出してはいけない」

びくっ

３人が八雲の言葉に反応し、驚愕を浮かべる。

「会話中に割り込んで来るのはあまりよろしくは無いが、それでも露骨にそれに反応しては駄目だ。それに気付かれた時、それ以上に面倒になるからな。特にああいうタイプだと」

八雲が年上ということもあり、すんなりと3人に受け入れられる。

特に八雲の場合、割と実体験の為言葉に重みがあった。

「さあそろそろ授業の支度だ、あまりモタモタしてると恐い先生の雷が落ちるからな」

「それは嫌だね、よし。じゃあ鷲崎さんまた後で」

「私も！鷲崎さん後でねぇ～」

佳奈とほのかは食べ終えたトレーを手に立ち上がり、挨拶をしてその場を立ち去った。

「わわ、待って待って。鷲崎さん、教室で！」

「ああ。転けるなよ?」
「大丈夫です!待ってよ、２人共ー」
清香も慌てて立ち上がり、２人を追い掛けるように小走りで歩いて行った。
「鷲崎、恐い先生が来てやったぞ」
「おはよう御座います、織斑先生。態々後ろに立たないでください」
「脅し文句に私を使ったようだからな、ちょっとした意趣返しだ」
それを聞いた八雲は溜息を隠せなかった。
このキツそうな教師がここまでノリが良いとは、正直思わなかったからだ。

「さっきのはあれか、早速３人もハーレムを作ったのか?このプレイボーイ」
「んな馬鹿な。俺はハーレムなんぞに興味無いですよ。それに彼女達に失礼ですよ、そういう事は」
「意外…でもないか、固そうなお前らしい。さて、何時まで食べている!!!食事は迅速に取れ、遅刻者にはグラウンド１０周させるぞ!」
八雲との会話を切り上げた千冬は、食事中の少女達に一喝した。
現在時刻は７時３０分になろうところ。
食堂自体は８時まで開いているのだが、４５分からホームルームなのでそろそろ終

わっていないとまずいのだ。
１５分余分に食堂が開いているのは休みの生徒の為だ。
重病ではない限りではあるがなんとか自力で食堂に来れる生徒の為に、自室まで持って帰れるメニューがその時間に提供されるのだ。

１時間目も終わり小休憩も兼ねた休み時間。
一夏は相変わらずグロッキー状態であった。
そもそも参考書を捨てた一夏の自業自得と言ったらそれまでだが、授業の進行スピードが早いことも要因の１つだ。
そしてそんな一夏を取り囲むように女子の約半数が詰め寄っていた。
一方の八雲だが、半数近い女子が一夏のもとに居る為割と空いていた。
そこに朝の３人が居た。
昨日の件でクラス内で少々シコリが残っている八雲、その近くに居る３人には好奇な目が向けられている。

話してみれば良い人なのにと3人は思うのだが、如何せん昨日の件が強過ぎた。
全員の前でキレたのだから、仕方がないとは思うが。
「ねえ織斑君、千冬お姉様は自宅ではどんな感じなの？」
「え、案外だらしなーー」
スパンッ！
小気味よい音が教室に響き、一夏は机に伏した。
そして叩いた本人はといえば、顔が薄っすらと赤く冷や汗をかいていた。
「休み時間は終わりだ、授業を開始するので座るように」
いつの間にか休み時間が終わり間近だったらしく、都合良く戻って来た千冬が秘密をバラそうとした一夏の頭を引っ叩いたのだ。
「ああ、そうだ織斑。お前の専用機を政府が用意させるようにとのことだ」
「へ？」
「だが学園にも予備機は無い、本来なら政府特命と言うことで直ぐに用意しなければいけないんだがな。まあ用意できるまで少し待て」
「???」
千冬の説明を聞いても一切理解していない様子の一夏。
そんな一夏を他所に少女達は色めき立つ。

「１年のこの時期に専用機かぁ。ーーーやっぱり千冬様の弟だからなのかな？」
「政府から支援が出てるって事だよね、良いなぁ」
「私も専用機欲しいなぁ」
　全く意味が理解できていない一夏を置いていくように少女達はいつか自分もと、期待を膨らませる。
　そしてそんな一夏を見兼ねた千冬は教科書の最初のページを音読させる。
　それでも理解半々といった一夏に溜息を隠せないが、千冬は授業を進める。
　が、その時質問が上がった。
「あの先生、鷲崎さんには専用機って無いんですか？」
「ああ、鷲崎には必要ない。あいつは企業代表としてここに居る、当然専用機も持っている」
　その千冬の言葉に、流石の八雲も頭を抱えざるを得なかった。八雲の顔からして、本当に言って欲しくなかったようだ。
　そしてその言葉に特に反応したのはあの３人だ、他の面々は総じて驚愕となんでこいつがといった視線を送っていた。
「鷲崎さん専用機持ってたんだ！」
「しかも企業代表だって！凄い！」

清香と佳奈が八雲を褒めるように声を上げる、一方でほのかはクラスを見渡していた。

そして全員ではないが八雲を睨んでいる人を見つけて溜息を吐くのだった。

ＩＳが世に出て女尊男卑が広まり、ＩＳを女性だけが使える神聖なものと崇める人が数多く居る。

俗に言うＩＳ信者なる人にとっては、男性操縦者というのは神聖なＩＳを穢したとして目の敵にされている。

ほのかが見たのはそういった類いだった。

「ーーまたあの人は余計な事を…」

一方の八雲は、クラスメイトの何人かから睨まれている事など何処吹く風、千冬を睨んでいた。

態々知られないよう自己紹介の時ですら自分が企業に所属しているのを言わなかったのだ、それをこうしてバラされた。

知られると騒がれて面倒だからこそ黙っていたのに、これでは何にも意味が無い。

「さて、時間も押しているので授業を始めるぞ」

「安心しましたわ。まあまさか訓練機で対戦しよう等とは思っていなかったでしょうけど」

授業が終わって早速一夏の席に押しかけたセシリア。

一夏と八雲の席は２つ程離れている為か、セシリアは八雲の所に視線を向けないように立っていた。

八雲がセシリアにブチ切れてからまだ１日、それで気軽に話しかけるようであればヤバい人である。

「まあでも勝負は見えていますが、流石にフェアではありませんものね」

「ん？何でだ？」

「あら、ご存知ありませんの？この私セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生。つまり現時点で専用機を持っていますのよ！」

ババン

腰に手を当てた状態で一夏にむけて人差し指を向ける。

「へぇー」

「……馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーと思っただけだよ。どうすげーか分からないけど」
「それを一般的に馬鹿にしていると言うでしょう!?」
バンと、一夏の机を両手で叩いた。
その衝撃で一夏のノートが落下したり、びっくりした少女達が振り向いたりしたが些細なこと。

「…んんっ。さっき授業でも言っていたでしょう。世界にＩＳは４６７機しかないのです。その中でも専用機を持っている私は、全人類６０億超の中でもエリート中のエリートなのですわ！」
長々と熱弁しているセシリア。
一方八雲はというと。
「あ、鷲崎さん。ご飯行きませんか？」
「あ！きよっち私も私も！鷲崎さん、私も行っても良い？」
「私もご一緒したいです！」
「ああ、良いぞ」
知り合ったばかりとは思えない位馴染んでいる。
もう完全に傍から見ればハーレムだが、八雲にそんな気は無いのだ。

席を立った４人だが、それを恨めしそに見つめるセシリア。
昨日の今日である故に、話し掛けようとすればフラッシュバックするのだ。
セシリア自身それが何なのか理解できていないが、尋常じゃない恐怖心が湧き出てくる。
八雲に言い返してやると意気込んでも、目の前にすると頭が真っ白になる。
恐らくだが、しばらくこの状態が続くであろう。

「そういえば鷲崎さん、オルコットさんとの勝負は大丈夫なんですか？」
「あ、それは私も思った」
そう思うのも当然である。
八雲は最近見つかったばかりの男性操縦者である、故に心配なのだろう
せっかく仲良くなったのだから、無様に負ける姿等見たくはないのだ。
「ああ、大丈夫だ。確実に勝てるだろうさ、代表候補生だとしても情報通りのあいつ程度なら」
そう言った八雲に３人共首を傾げる。
「セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生で専用機はブルーティアーズ、ＩＳ適正

はＡでＢＴ適正もＡ。適正から考えると偏光射撃（フレキシブル）を使用できるが、彼女自身が使ったという記録は無い。機動射撃より静止状態での射撃に特化したスタイルで狙撃を得意としている一方で接近戦を非常に苦手としている。ＢＴ兵器による対象の足止めを得意とし、常に対象の死角や反応の遅い場所を攻撃する癖がある。こんなところか」

「凄い、こんな情報をどこで…」

「ネットで探せばすぐ出てくるぞ？ＩＳてのは現在世界中の注目の的だ、ましてや代表候補生や代表なんかの情報は特にな」

「そうなんですか」

「あ、本当だ！」

佳奈が自分の携帯で調べた結果を見せる。

そこには先程八雲が言った事やその他代表候補生の考察等が事細かに書かれていた。

「これで相手の情報を俺は既に持っている、この時点で相手がどういう戦術を使ってどういう行動をするのかが想像つくだろう？」

「あ、確かに。使う武器も使う戦術も、全部書いてあるもんね」

「ああ、この時点で相手がどういう事をしてくるか俺は分かっている。だが相手は？俺の情報を持っているか？」

「あ!!」

清香が声を上げる。
そして残り2人も気付いたようでハッとする。
「俺の情報なんて男性操縦者であること位だろう？どうだ、俺がどういう戦術を取るか誰も知らないだろう。それにあの性格だ、どうせ男だからと慢心し油断するだろう。その油断もまた、攻撃する隙になる」
「あれ、でもその条件なら織斑君とも同じじゃない？」
「違う。俺とアイツでは現在の状況が圧倒的に違う。バラされてしまったが現時点で専用機を持っている俺は何時でも練習を出来るがアイツの専用機は今は無い。そこもまた大きな差だが、あいつの思想も問題だろうな」
「問題？何かあるの？」
「昨日の言い合いを傍から聞いていたが、アイツは正々堂々といった勝負を好むと思う。そんなアイツが事前情報を仕入れてから勝負に挑むとは思えないんだよな」
そう言った八雲の声に、あの時一夏が言った言葉を思い出す。
真剣勝負だと、そして代表候補生相手に本気でハンデを聞いた。
しかも自分にではなく相手にである。
代表候補生相手にそれは、もはや無知なのかと。
「まあそんなわけで、アイツの勝率は低いんじゃないかと思っているが…番狂わせは起

きると思う」

それは転生者であるが故の言葉でもあった。

原作では戦の最中に成長し、代表候補生であるセシリアを油断と慢心、そして機体性能の差があったにもかかわらず追い詰めている。

機体特性を把握していなかったが故に敗北だと言われているが、初心者に近距離特化のピーキーな機体を渡す方も渡す方である。

原作通りであれば零落白夜が搭載されている為いい所までは行けるだろうが、シールドエネルギーを使うと言うことを知らずに敗北というところは変わらない筈である。

「(最も、俺が居る時点で既に乖離は始まっているからな。恐らく今後は原作通りには行かんだろう)」

第４話

翌週。
特筆するような出来事があった訳でも、ましてセシリアと八雲が和解した訳でも無い。
本当に２人はあれ以来会話すら存在しなかった。

「なあ、箒」
「なんだ、一夏」
いつの間にか管制室に来ていた箒に一夏は、問いかける。
ていうか本当いつ来たんだろうか。
「気の所為かもしれないんだが」
「なら気の所為だろう、私には預かり知らぬ事だ」
「いやいや、ＩＳの事を教えてくれるって話はどうなったんだ？」

「……（フイ）」
「…目を逸らすな」

一連のやり取りを見て八雲はため息を吐く。
イチャイチャするなら状況を見て他所でやってくれとか、ＩＳに関して触れてないのかとか、色々言いたいことがあったがこうも見せつけられると本当何も言えなくなる。

そして現在は一夏対セシリアの対戦カード前だと言うのに、この状況である。
一夏の専用機が対戦のこの日この時間になっても搬入されていないのだ、正直言って問題である。

「織斑くん!!!来ましたよー！」
ピット搬入口からバカでかいコンテナと、真耶がやってくる。
余程急いでいたらしく、一夏の前に到達するとその荒れた息を整えるべく深呼吸をしだす。
「はい、そこで止めて」
「うっ！」

ノリなのかなんなのか、一夏は真耶に息を止めるように言った。
それに素直に従ってしまう真耶も真耶であったが。
スパンっ！
「目上の人には敬意を払え、ましてや相手は教師だぞ」
少し遅れてやって来た千冬が一夏の頭を引っ叩いた。
「千冬姉…」
パァン！
再度打撃音が響いた。
「織斑先生と呼べと何度言わせる、そろそろ学習しろ馬鹿者」
公私混同を許さぬ千冬に、一夏はまたもや出席簿を食らっていた。
「山田先生、もう息止めていなくても大丈夫ですよ」
「プハーっ……ありがとうございます、鷲崎君」
「いえ。アイツの言うことを素直に全部真に受けない方が良いかとは思いますがね」
一方の真耶の後処理には八雲が当たっていた。
正直悪い人に騙されそうな先生である。

「あ、こんな事をしている場合じゃないんですよ！来ましたよ、織斑君のＩＳが！」

そう言って開けられたコンテナの中に鎮座していたのは美しい程に純白の機体。

白がそこに居た。

「受領してすぐさまオルコットとの試合は流石に酷だろうからな、対戦カードは前もって変更してある。鷲崎、行ってくれるか？」

一夏が純白の機体『白式』に乗り込んだ当たりで千冬から声がかかる。

流石に初期化（フォーマット）も最適化（フィッティング）も終えてない機体で戦う等ただの無謀である、故に千冬は既にその両方が終わっている八雲を先に出す事にしたのだ。

「了解です」

八雲はそのままピットゲートへと進み、右腕に付けていた腕時計を撫でた。

「Ｓｔａｌｋｅｒ、起動シーケンス開始」

『Ｓｔａｌｋｅｒ、通常モードで起動します』

唐突に響いた声に一夏は目を輝かせるが、千冬の睨みで初期化に専念するよう名残惜しそうに白式に視線を落とす。

「モードアーリヤ、展開」

『装甲パックＡＡＬＩＹＡＨを展開します』

展開されたのは白式とは正反対であろう黒色の機体。

所々流線型をした形状の装甲で全身を包み、ヘッドパーツが展開され紅いモノアイが発光する。
非固定浮遊部位（アンロックユニット）なのか、機体の周囲を浮かんでいる黒色の球体。
トーラス社の集大成、ＩＮＦＩＮＩＴＥ・ＣＯＲＥ『ＮＥＸＴ』

「鷲崎八雲、Ｓｔａｌｋｅｒ　出るぞ！」

爆音を一瞬響かせてアリーナへと飛び出した。

アリーナへと飛び出した八雲はヘッドパーツを展開させ顔を露出させる
その目はただ一点、セシリアを見つめていた。
「っ!!」
セシリアが幻視したのは煮え滾るような劫火。
特に表に出ていたのが、本人が必死に抑えていたであろう怒りである。
この一週間、八雲はセシリアを避け続けた。

理由としては単純、この戦いで決着を着けると決めておきながらその前に怒りが爆発するのを抑える為であった。
それが今ほぼ解放されているのだ。
殺気と共に怒りが劫火のように見えたと言うことだ。

「最初に言っておく、手加減等期待するな。俺は全力でお前を潰しに行く、精々足掻けよ？」
ニヤリと三日月の如く吊り上がった頬、引き攣った笑顔だと言うのに殺気と怒りをばら撒いているせいで恐怖の対象にしかならない。

「ふ、ふん。貴方の方こそ無様に負ける準備はよろしくて？私は貴方を全力で撃ち抜きますわよ」
恐怖で指が震えながらも、セシリアは無理矢理にでも奮い立たせて強気に振る舞う。
そうでもしないと八雲の殺気に呑まれてしまう、そうなってしまえば最早戦うどころではないのだ。
互いに睨み合って居る中、スタートのブザーが鳴り響き。
八雲は姿を消した。

「へ？」

間抜けな声を出したセシリアだったが、突如ロックオンアラートが鳴り響いた為焦って回避行動を取る。

そして横目で通り過ぎた影を見ると、そこにはブレードを振り抜いていた八雲の姿があった。

「な?!いつの間に?!」

唐突な回避行動で機体制御が崩れているのを好機と見た八雲がその場で１８０。ターンして再度向かってくる。

そしてまたセシリアは、八雲の姿を見失った。

「どうしてですの?!ロックオンはされる、敵の位置も分かる。なのに一瞬でハイパーセンサーからも振り切られる速さなんて…」

そう、八雲は消えた訳ではない。

ただセシリアの視界外へと、クイックブーストで移動しただけだ。

その速さにハイパーセンサーのロックオン機能を振り切ってしまうのだ。

そもそもとして彼女達国家代表や代表候補生達が主に使う最新機である第３世代機は理論実証実験の意味合いが強く、安定した性能を誇る第２世代機である打鉄やラ

ファールとは違い特筆した性能を持つ。
イギリスのＢＴ兵器、中国の龍砲、ドイツのＡＩＣ、アメリカの銀の鈴（シルバーベル）、ロシアの清き熱情（クリアパッション）、日本の山嵐（未完成）等など。
彼女達の持つ専用機は各々の性能に特化している。
その中にただ単純に速いだけの機体を捉える術を持っているのはいない上に、ハイパーセンサーに頼り切りの為極端に速くなったり遅くなったりする機動に弱い。
そもそも全方位見渡せると言っても集中出来る方向は、所詮人間は1方向のみだ。
だからロックオンも自分の視線の先に対象を入れることで行っている。
ならその視線から逃れる事で、ロックオン等外せる。
だが時々セシリアの後ろを取ってから止まる為、その時は簡単にロックオン出来る。
だがいざ撃とうとライフルを構える前にまた振り切られる。
「くッー・お行きなさい、ブルーティアーズ！」
故にセシリアは切り札を切った。
機体と同名のＢＴ兵器。
思考によるコントロールにより稼働するそれはセシリアの思ったままに移動し八雲の周囲を等間隔に包囲しようと移動を開始する。
だが彼女のそれは非常に脳の領域を圧迫する。

自身の行動中にＢＴ兵器を使いながら、ライフルで狙撃が今まで出来ていない事からもそれが伺い知れる。

故に八雲は簡単に対策ができた。

ＢＴ兵器が出たと同時にブルー・ティアーズから一際大きいロックオンアラートがなり、ボボボボとＳｔａｌｋｅｒの周りを浮遊している球体から数発のミサイルが発射された。

計４発。

それはある程度上空に上がったあと、各４０発の子機となってＢＴ兵器に向けて加速を開始した。

クラスターミサイル

親となるミサイルの中に大量の爆弾を格納しており、ある程度の高度から雨のように爆弾を降らせるのだ。

だがトーラスが普通にクラスターミサイルなんぞを作るはずもなく、セシリアが避けたコースを辿るように全ての子機がセシリアを含めた５つを目標に追尾し始めたのである。

自身が移動中に殆どＢＴ兵器を動かすことが出来ないセシリアにとって、この現状は自身の手札を潰された事を意味する。

ＢＴ兵器を動かすにもライフルで撃ち抜くのも、彼女は静止で行う。
ＢＴ兵器を使いながら常に移動し続けなければいけない戦場というのが彼女の苦手分野であった。
「遅い遅い、後ろががら空きだぞ」
前方から迫るクラスターミサイルを避ける為に回避行動をしても鬼のような追尾能力で避けても追尾してくる。
３回程避けた当たりで、ミサイルの軌道を見誤ったのかセシリアのギリギリを掠めるように避けた。ギリギリだったが避けられた事に安堵した瞬間、その避けた隙を突くように背後から八雲がセシリアを蹴り飛ばす。
ブーストチャージ
ブーストを吹かして蹴り飛ばすだけのあまり高威力とは言えない技。
だが衝撃と浸透してくる蹴りの威力はそのまま故に、セシリアは少し止まってしまう。
そしてハッとする。
止まってしまうと何が起こるか。
「…あ」
八雲が避けた隙を突く前にこれ幸いと撒いておいた多量のクラスターミサイルが、セ

シリアへと着弾して小規模ながら爆発を起こした。

「嘘でしょ…」

観客席に居た楯無は驚愕を隠せなかった。

セシリア・オルコットはあれでも代表候補生だ。

それにその他候補生を圧倒する狙撃能力や、ＢＴによる擬似的な集団戦の展開等を得意としている。

それを八雲は実力を出す前に翻弄し、何もさせないでミサイルを当てた。

国家代表クラスであれば彼女を完封できる人間は数名居るが、何もさせずに一方的に攻撃できる人間はブリュンヒルデ位しかいない。

そもそも八雲の速度がおかしいのだ。

肉眼で認識出来る速度ではなく、セシリアが翻弄されている事からハイパーセンサー

ですら認識出来ない速度であることがわかる。

「警戒が必要かしらね…」

ふと楯無が周囲を見れば、セシリアの勝利を疑わなかった生徒達が目を見開くほどに驚きこんな事は認められないとばかりに騒ぎ始める。

それを見て溜息を隠せなかった。

女尊男卑の思想

楯無にとって嫌悪感しか抱かない思想。

そもそもＩＳが出たからと言って世界に５００機も無いのだ、７０億の人類に対して５００弱の機体。

それに表沙汰にされていない盗まれた機体や研究用、そして学園に配備されている訓練機等を除けばその数は４００を切る。

たったそれだけで女性が強いと思うのはおかしい事なのだ、なのに女尊男卑的思想が広まっている。

「全く、バカらしいったらないわね」

「……ふむ、仕留めきれなかったか」
黒煙が晴れて、ボロボロになりながらも八雲を睨んでいるセシリアがそこに居た。
損害レベルＤ、残存シールドエネルギー５９。
ブルーティアーズも全損しており、手に持っているエネルギーライフルも砲身がひしゃげ、火花が散っていた。
セシリアはライフルを捨て、空いた右腕を構える。
そこに出来た光の渦から、１振りのナイフが出現した。
「私は……負けられない。負けるわけには……いかない!!!!」
最後の力を振り絞るように叫んだセシリアが、突き出すように右腕を構える。
その動作に機体が感応するかのように、爆発的な加速が生み出された。
ＩＳというものには、正確に言うなればコアには自我があると言われている。

それは操縦者と共に成長するとも言われている。
ならば操縦者の想いに応えても不思議ではないのだ。
既に朦朧としている意識の中、一矢報いようとしたセシリア。
だがミサイルが着弾した時点で限界を迎えていたのだ、八雲の元に辿り着く前に彼女は意識を手放した。
だが
彼女の執念に感応した機体は加速を緩めなかった。
一切減速をせずに八雲に突っ込んでいくブルー・ティアーズ、操縦者の制御を離れてコア自らの意思で機体を動かすという異例の事態を迎えていた。
「ほう、大した執念だ。敬意を評して沈めてやろう」
そう言って八雲はＭＯＯＮＬＩＧＨＴを、突っ込んできたブルー・ティアーズに振り抜いた。
その結果彼女は、エネルギー切れで機体もろとも堕ちていく。
だがエネルギーが切れた機体は、操縦者の保護が上手く働かない。
そんな状態で堕ちればただでは済まない。
だがそれを許す八雲では無かった。
瞬時に加速して、落下中のセシリアを抱きかかえて地面へと降り立つ八雲。

その事に歓声が上がった。
そして操縦者の意識、エネルギーが共に切れた事で放送が入ったのだった。
『セシリア・オルコット戦闘不能。勝者鷲崎八雲！』

時は少し戻り戦闘開始直後。
真耶も千冬も自身が知らない機体ということで、計器によるデータ収集をしていたのだが
「織斑先生…これは見間違えでしょうか。鷲崎君の機体、操縦者の保護設定が効いていないように見えるんですけど…」
「何だと？」
操縦者の保護設定。
ＰＩＣによる抗重力や対Ｇシステム等、主に操縦者を高速機動から守るシステム群の事を指す。
だが真耶の計測結果を見るとその効力が効いていないように見える。

「あの機動をしていて保護が効いていないだと、そんなありえない話が…」
千冬が珍しく慌て始める。
高機動戦闘というものは、思っている以上に体へとかかる負荷が大きい。
瞬時加速を多用して世界の頂点を取ったが故に、その危険性がかなり大きいということも。
保護設定というものは操縦者の負荷を減らす為に存在する。
音速を超えるまでは行かなくとも弾丸以上の速さで動く事は常々であり、保護が働いていなければ高機動を行う度に内臓がシェイクされたような痛みにのたうち回る事となる。
「あれ程の機動を保護無しで行うなど、常人では考えられない…いや、そうか」
とある考えが千冬の脳裏をよぎった。
1度だけ出会ったことがある病人が患っていた病気だが、一見しても何も分からないのに判別が容易なそれ。
「山田先生、恐らくあいつは無痛症だ」
「無痛症…ですか？」
「ああ。先天性や後天性もあるが無痛無汗症とも呼ばれ、文字通り痛みを一切感じなくなる病気だ」

痛みとは脳が発する警告だ。
だが無痛症の人間はその警告を受け取ることができない。
それはつまり常人ならのたうち回るような痛みでも、体に異常をきたすような傷を負っても本人は気付く事が出来ないのだ。
「試合が終わったらそれとなく聞いてみるが、一応２人分の救護室の用意をしておいてくれ」
「はい！」

「負けた……負けてしまった」

意識不明で救護室へと運び込まれていたセシリアが目を覚ますと、体の到るところに湿布が貼られており、独特な臭さが部屋を満たしていた。
それを見て試合を思い出して、自身の敗北が現実のものだったと悟った。
しかも完封されているのだ。
あれだけ大口を叩いておきながら、手も足も出ず敗北したのは自分の方だった。

なんて無様なのだろうかと
しかも相手は自分が侮辱した男である、さぞ笑い者だろう。
一見した限りだいぶ温厚な人間だった、それがあれ程怒りに燃えていたのだ。
自分が言った言葉がどういう結果を引き起こし、どれ程の不興を買ったのかようやく理解した。
どれ程愚かな考えに染まっていたのかを。

「謝らなければ…」
たとえなんと言われようとも、侮辱してしまったことは事実。
故にセシリアは、全身に走る激痛を無視して起き上がった。
「つぐ！」
最後の機動はセシリアが成功させたことの無い瞬時加速（イグニッションブースト）であり、体への負担も大きい。
それをセシリアは自らの意識がないまま機体が勝手に発動させたようなものである。
肉体が動かないのに装甲は勝手に動いてしまう、そうなると体にどれほど負荷がかかるか。
それが今激痛となって現れているのであった。

ガラガラ

唐突に救護室のドアが開く。

そこには未だＩＳスーツを着用した八雲が立っていた。

「あ…」

その姿を見たセシリアの顔から血の気が引く。

あそこまで怒らせてしまった八雲が目の前に居るのだから。

だが１度決めた事から逃げる事は、彼女のプライドが許さなかった。

「本当にごめんなさい!!貴方の家族を侮辱してしまって、不快な思いをさせてしまって!本当にごめんなさい！」

セシリアの国にはない、日本式の土下座していた。

激痛が走る体に鞭を打ってである。

だが彼女にそんなことを気にしている余裕はない。

ここで謝らねば更に印象が最悪になるだろうし、恐らく自分の今後は無いだろうと。

たとえ何を言われようとも、たとえ許されなかったとしても。

彼女には謝る選択肢しか存在しなかった。

「顔を上げろ」
八雲は土下座をしているセシリアに視線を合わせるようにしゃがみこんだ。
「人間は間違う生き物だ。故に間違える事は悪いことではない。お前もその思想故に間違っただけだ。だが間違いを正す事も出来る。お前は見事に正せた、だからこうして謝ろうと思ったのだろう」
その言葉に、セシリアも頷く。
「故に許そう。だがこれだけは覚えておけ、俺は自分が何を言われようとも心底どうでもいい。だが家族を侮辱されることだけは到底我慢出来ん。２度目は無い、それは覚えておけ。」
「はい…分かりましたわーー」
ドサっ
緊張の糸が切れたのか、またもや意識を失って倒れるセシリア。
体は既に限界を超えていたのだから当たり前であろう。
彼女の体は無理が祟ったが故に、防衛本能が働いたのだ。
「ったく、世話の焼ける」
倒れたセシリアを抱き上げ、ベットへと寝かせる。

その顔には安堵の表情が浮かんでいた。

時は戻り、戦後。

気絶したセシリアを抱えながらピットに戻ってきた八雲だったが、出迎え１発目は一夏の罵声であった。

「なんだよあれは!!あんなの、勝負でもなんでも無いじゃないか!!」

確かに一夏の言う通り勝負ではなく、ただの蹂躙。

八雲はノーダメージでセシリアは危険域のダメージを負っていた。

とてもじゃないが一夏と戦うなんて無理だろう。

「勝負の結果だろう?こいつが負け、俺が勝った。ただそれだけだろう」

「でも、あんな一方的にしなくても…」

「何故だ?俺の実力がこいつを上回っていただけだろう」

「なら手加減すれば良かったじゃないか！何もここまでやらなくても…」

そういう一夏の主張にため息を吐く。

「じゃあなんだ？お前は俺より弱いから対等に戦う為に手加減してやると、こいつに言えと？それこそ侮辱だろうが」

「なんでだよ！女は守るものだろ！手加減して当たり前なんだよ！」

「お前の主張から言うと、女は本気で戦う価値も無い弱い存在だと言うことだが織斑先生もそこに含まれると言うことで良いんだな？」

「っ?!」

ようやく気が付いた一夏がバツの悪そうな顔を浮かべて目を背けた。

「お前の考えは前時代的な古い考え方だ、女尊男卑と呼ばれる今の時代には到底そぐわない。それにお前の考え方では全女性操縦者を否定している。気を付けたほうが良いぞ」

あ然としている一夏を他所に、セシリアを救護室へと運ぶのだった。

第５話

「遅かったな、織斑にでも絡まれたか？」
救護室にやってきた八雲を待っていたのは千冬だった。
入口付近の椅子に、まるで養護教諭のように座っていた。
「お前の戦い方は認められないって、正面切って言われましたよ」
「まあ正々堂々と戦いたがる織斑にとっては、お前の蹂躙するような戦い方は嫌だろうな」
そう言いながらも八雲は抱えていたセシリアをベットへと寝かせる。
千冬がここに居ると言う事は養護教諭が出払っているということでもあるので処置をどうしようか迷っていると
「ああ、数分で戻ってくるので任せても構わんよ。それより鷲崎、聞きたいことがある」
「何でしょう、織斑先生」
寝苦しく無いよう枕の位置を調整していた八雲が、千冬の方を向く。

「お前は先天性無痛無汗症だな？」
　八雲の手が止まり、目が見開かれる。
「どうしてそう思ったので？」
「どんな機体でもデータを取るようにしていてな、お前の機体には高速機動戦に必要不可欠な操縦者保護機能が働いていなかった。保護機能無しであの機動戦をすれば痛みでのたうち回るのが普通だが、お前は全く動じていない。恐らくと思ってな」
「……」
　言い当てられたかのように押し黙る八雲に、自分の推理が当たった事を確信する千冬。
「1つ訂正。俺は無汗症ではなくただ痛みを感じないだけです」
「ほう、やはりか」
　千冬の眼光が強くなる。
　無痛症とは最悪命に関わる場合もある。
　特に戦闘や訓練等が多数あるこの学園で無痛症では、多少の怪我でも気が付かない為重症化する可能性があるのだ。
　教師としては見過ごせないのだ。

「一応この機体を扱う上で会社から定期検診と治療用ナノマシンの摂取を義務付けられているんですが…」
「そこが解せないんだがな。何故保護機能が存在しない、本来存在している筈の機能であろう」
「そこはこの機体のコンセプトが原因ですかね」
その返答に千冬は首を傾げたため、八雲は噛み砕きながら説明する事にした。

ＮＥＸＴ『Ｓｔａｌｋｅｒ』のコンセプトは単体勢力、そして防衛の為の速度特化型である。
単体であらゆる状況であろうと活動する事をコンセプトに作られた機体。
リミッターや保護機能等で速度を落とすと、それこそあらゆる状況で活動するコンセプトが果たせなくなる為に削られている。
故にか常人ではＳｔａｌｋｅｒに乗る事など、ましてや乗りこなす事など出来やしない機体になったのだ。
「何だそれは…乗る人間の事を考えられていない等、普通じゃないぞ…」
「ええ、それは俺も思っています。うちの社長(父)も俺が乗るのは反対していましたよ、ですが社内でこの機体に乗れる条件を満たしていたのは俺しか居なかっただけです。」

「だが乗らないという選択肢もあっただろう、その機体以外にもＩＳはある。その機体じゃなければいけないとは思えないんだが」
「まあ、それはそうなんですけどね。会社の一員として、会社の目標を手伝う為にはこの機体じゃなければいけなかったんですよ」
　トーラスの目標は宇宙進出だ。
　その為に必要なのがＳｔａｌｋｅｒなのだ。

「で、その無痛症は問題無いのか？教師としては模擬戦等で異常が出たりしたら正直お前の模擬戦や訓練への参加を考えなければならないが…」
「問題は無いですね。怪我しても感知は出来ませんが、とりあえずはナノマシンで何とかなるので最悪はないと思いますけど」
「そうか、何かあったら必ず言うことだ」
　弟以外にもそんな態度をするのかと、八雲は目を見開いた。
「何だその顔は。生徒の心配をしない教師だとでも思っていたのか？」
「いえ、そういうわけでは無いのですが…」
「どうせあれだろう？貴様もブラコンだのなんだのと言うつもりなのだろう？」
　最早捲し立てるように言う千冬に、何も返せない八雲。

「ああそうさ、弟が大事だ。だが弟の事を、ましてや家族の事を大事に思わない姉等居ないだろう?お前と同じ事だ」
「そうですね、その通りです」

機体の損傷が規定値を超え、更に操縦者であるセシリアが未だ目覚めていない事を加味し繰り上げ勝利ということになった一夏。
釈然としない表情だったが八雲の言葉が余程効いたのか、先程からずっと無言であった。
そんな一夏は現在次の対戦カードである一夏対八雲の戦いの為ピットインしていた。
「織斑、準備は……大丈夫か?」
「……大丈夫、大丈夫だよ千冬姉」
「そうか、それと織斑先生と呼べと」

上の空だった一夏を流石に心配した千冬だが、その返答でさえ数瞬の間があり本当に大丈夫なのかと思っていた。
「大丈夫だ、俺の中で答えは固まった。後はアイツにそれをぶつけるだけだ」
「なら行って来い、全力をアイツにぶつけてこい！」
「織斑一夏、白式出るぞ！」
ピットから純白の機体が飛び立った。

アリーナにて相対する八雲と一夏。
既に試合開始のブザーは鳴っているにもかかわらず、２人共動こうとしない。

「お前の言った事少し考えてみたんだ、確かに俺の考えは今の時代に相応しくないって。でも皆を守りたいって思いは間違っていない筈だ！」
「ほう、確かに間違ってはいない。だがそれを望まれていなくても行うのか？助けて欲しいと言われなくても助けに向かうのか？自分の身を顧みずに」
「ああ、それが俺だ！例え無様に負けても、勝利出来なくても、守る事は出来る！」

その言葉を皮切りに、八雲は一夏へとブーストを吹かして突っ込んだ。
ＭＯＯＮＬＩＧＨＴを振り、その機体を斬ろうとするが、寸前で雪片弐型が滑り込みその軌道を妨害する。
「今のお前では身を挺しても精々１人を守れるかどうかだぞ！」
「それでも俺は諦めない！今諦めたら、俺は俺で無くなる！守りたい人も守れなくなる！それだけは、絶対に嫌なんだよ!!!」
そこで単一仕様能力（ワンオフアビリティ）『零落白夜』が発動し、八雲のＭＯＯＮＬＩＧＨＴの刀身を引き裂いた。
所詮エネルギーブレードだ、エネルギー無効化攻撃の零落白夜の前では紙同然だった。
「言うだけあるな、まさかこいつが斬られるとは」
斬られたＭＯＯＮＬＩＧＨＴが光を失い、刀身が消失したのを見て八雲は驚いていた。
エネルギー刃とはいえエネルギーがある限り刀身を精製し続ける武装だ、それが斬られただけで稼働しなくなったのだ。
その事に八雲の顔が引き攣る。
基本的に八雲の戦い方は情報戦だ。

相手の情報を調べ上げて対策を講じる、その際如何に相手に自分の情報のブラフを掴ませるかも考えている。
相手の情報から戦術を分析して使用する武器を選び、相手が行った行動によって最適な戦術をぶつけるやり方だ。
だが今回、一夏の情報は殆ど無い。
唯一八雲が知り得ているのは先程受領した
機体だということと、今体感したエネルギー無効化攻撃位だ。
それ以外の情報が何一つ無いのだ。
もう既に原作乖離が起きている為原作知識等は当てにならず、原作の一夏の情報では無く目の前の織斑一夏の情報が不足していた。
「だが、それだけだ。斬られたなら別のを出せば良い」
新たに展開した実体剣『叢雲』
トーラスが八雲の為に造った完全オリジナルの刀であり、ＭＯＯＮＬＩＧＨＴのようなエネルギー刃を出せるわけでもないただの刀だ。
「さあ来い！」
「うおぉぉおおぉぉ!!!!」
雪片が八雲の体スレスレを通り過ぎる。

傍から見れば雪片が勝手に八雲を避けているように見えるが、実際はそんなことはない。

一夏は全力で八雲に当てようとしているのだ。

誰も知らない事だが、八雲は転生者であり転生するにあたっての特典も貰っている。

異常な程の観察眼と直感を合わせた千里眼（偽）である。

これにより例え相手の情報が皆無でも、八雲は相手の行動を読むことが出来るのだ。

だがそれは一夏の攻撃を避けられる事の理由では無かった。

「くっ！何で当たらない?!」

「お前の攻撃は大振りな上に直線的過ぎる。避けてくださいって言っているようなものだ」

一夏の攻撃は何らかの武道に精通している者から見れば凄く読みやすい攻撃であった。

気合を入れる為にか声を荒らげ、酷く直線的で大振りな一太刀。

フェイントや足技等の小手先の技術も無いのだ。

そんなもの、太刀筋を見ていれば避けるのは容易い。

一夏の剣は所詮剣道の延長であり、それをＩＳで再現しているに過ぎないのだから。
「だったら！」
ほぼ無意識に発動させた瞬時加速（イグニッション・ブースト）が一夏の体を爆発的に加速させる。
だが瞬時加速というものは直線的な加速しか出来ない。
無理矢理曲がろうものなら内臓がシェイクされたような強烈な嫌悪感に襲われるうえに、掛かるＧによっては内臓を傷付けてしまうためである。
故にか、一夏はただ真っ直ぐに八雲に突っ込んでくる。
それに何かデジャブを覚えた八雲は半笑いを浮かべ、速度をそのままに突っ込んでくる一夏を投げた。
ぶつかる前に雪片を持つ右腕を掴まれ、流されるように投げ飛ばされる。
そしてそのままアリーナのシールドに叩き付けられて止まった。
残存ＳＥ２９

衝撃に嗚咽を漏らしている一夏の側に八雲が降り立ち、一夏は八雲を睨み付ける。
だが体は言う事を聞かない。
瞬時加速の勢いを一切殺されず、そのまま投げ飛ばされて壁に突っ込んでいる。
直ぐに立ち上がれる程軽く無かった。

「愚直に真っ直ぐにしか進めんのかお前は。そのザマでは誰も守れんぞ、自分の身さえもな」
「うる…せぇ、俺は守れる。守ってみせるんだ!!!!」
ほぼ気合だけで立ち上がった一夏。
それを見て口元が多少綻んだ八雲は叢雲を構えた。
「なら証明してみせろ、お前になら出来るはずだ」
「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!」
再度気合を入れるかのように咆哮した一夏が八雲に向かってまた瞬時加速を発動させる。
が、その軌道が目前で変わり、一瞬とは言え見失った事で八雲を驚かせた。

白式の２基のブースターでは本来出来る筈がない技能。
八雲のクイックブーストの真似事だ。
全ＩＳの中でも最高に近いブースター性能を誇る白式だが搭載されているブースターは２基と少ない。
それ故にたった１回だとしてもクイックブーストを成功させた一夏に、驚きを隠せない。

理論上は瞬時加速でトップスピードになった瞬間にブースターを止め、間髪入れずに別方向に吹かせば可能ではある。
だがそれを実行するなど狂気の沙汰ではない。
瞬時加速中に方向を変えると、体に物凄く負担がかかる。
それにエネルギーもだいぶ使うのだ、八雲の前に辿り着く前にエネルギーが切れる。
だがそれでも一夏は諦めずに雪片を八雲に向かって突き立てた。

『試合終了。勝者鷲崎八雲!』

それでも寸前でエネルギーが切れてしまった。
だがコツンと、八雲の装甲に触れることは出来た。
代表候補生であるセシリアが欠片も減らせなかった八雲のシールドエネルギー、それがたった1とはいえ確かに減った瞬間だった。

「良くやった織斑、負けはしたもののその気迫と覚悟は伝わった。」
開口一番、一夏を出迎えた千冬の１言。
千冬が無理を言ったのか、真耶や箒の姿はそこに無かった。
彼女なりの配慮なのか、姉弟２人で。

「千冬姉…俺、負けちゃったよ…」
「ああ、見ていたよ」
弱々しくなっていた弟を見て、精一杯の姉心は抱きしめるという選択肢を選んだ。

「だがお前の決意は私に伝わった、だから今は泣いて良いんだ一夏。」
「でも…俺はッ！俺はッ!!」
声にならない押し殺したような、一夏の泣く声が響いた。

「ええっ!?辞退するんですか!?」
その日の夜、八雲は真耶にクラス代表を辞退する旨を伝えに職員室へと来ていた。

「ええ、一夏の決意を聞いてあいつに任せた方が為になると思いましてね」
守るということは攻撃するよりも余程難しい。
それ故にクラス代表を一夏にすれば他クラスとも戦う事になり経験を積める。
それに自分がクラス代表になるより一夏を鍛える事もできるだろうとの考えもあった。

「そう言う理由なら分かりました。あー、でもオルコットさんがなんて言うか…」
「私に異論はありませんわ、山田先生」
居ない筈のセシリアの声が響いた。
真耶と八雲が振り返ると、壁を伝いながら歩いてきた、全身に痛々しいまでに湿布や包帯が付けられたセシリアの姿がそこにあった。
「って、オルコットさん！なんでここに居るんですか!?貴女はまだ寝ていなきゃダメなんですよ!?」
「これしきの怪我位、大した事ありませんわ」
真耶の言葉とセシリアの強がりにより、彼女は救護室を脱走してきたのが分かる。
全身の筋肉疲労に加え各所の打撲、その怪我を悪化させる原因ともなった瞬時加速。
打撲以外全て意識の無い間に負った怪我である故に、セシリアには酷い怪我だという

自覚が無い。

それでも全身に走る痛みは相当なものだろうに、こうして彼女はここに居た。

「無理をしない方が良いと思うがな。最初のミサイルで打撲と若干の脳震盪、無理な体勢での瞬時加速での筋肉疲労。痛みは相当だと思うんだが」

「ええ、ですが心配ご無用。この怪我は全て私の自業自得で負ったもの、無理の範疇には入れさせませんわ」

胸を叩いて強がりを見せるセシリアだったが、その行為も体に響いたようで顔を顰めていた。

それを見ていた真耶は教員としての立場上咎めざるを得ない。

「ほら、まだ怪我が治ってないんですから救護室に戻ってください」

「ですが！」

「ですがもカカシもありません、はい戻りましょうね」

「ああ、待ってくださいまし！クッ、痛みで思うように力が…って山田先生、どこにそんな力が！あぁ」

真耶に手を引かれ、抵抗するも強制的に連行されるセシリア。

痛みで力が入り辛いセシリアに何故か力が強い真耶に抵抗出来ずに引きずられて行

く。

「やれやれ」

それを横目に自室へと足を向けた八雲だった。

「それで、どうしてクラス代表を譲ったの？」

「何で知っているんだお前…」

部屋に帰って来て早々に楯無から質問が来る。

それは本当につい先程真耶に言った事であり、周りには当事者以外誰も居なかったのだ。

故に楯無が知っているのはおかしいのだ。

「え…いや、その…ね？八雲君ならそう言うかなぁって思っただけよ」

「ほう…」

「うぅ…ごめんなさい、気付かれないようにつけていたの…」

八雲の眼光に怯んだ楯無はあっさりと白状した。

無表情で見つめられると、流石にキツイものがあるのだ。

「…ストーカー先輩、別に怒っていませんよ。そんなにしょぼくれないでください」
「めっちゃ敬語！ってかストーカー先輩って何よ!?」
「尾行してた人間が何を言うか、痴女ストーカー先輩」
「また増えた!?ごめんなさい！謝るからもう忘れてよ!!」

楯無の１個上の為本来なら八雲の方が先輩なのだが、学年としてみれば八雲の方が後輩であるため先輩呼びは間違ってはいない。
だが楯無に対して普段使わない敬語を使った事から、何かしら思うことはあった模様。
「クラス代表ならアイツの方が纏め役として適任だと思ってな。それに経験を積む場としても適切だとな、アイツには決定的に経験が足りないからな」
「へぇ、色々と考えているのね」
関心するように頷く楯無を、若干白い目で見る八雲。
楯無ならそれくらい理解している筈だからである。
「…ごめんなさい、その目はやめて欲しいなぁ……」
普段から表情が変わらない八雲だが、それでも無表情で見つめられると言いようのない何かが襲ってくるのだ。

「あの、ね？八雲くん？可愛いお姉さんのお願いだからね？その目で見るのだけは」
「ん？」
「いえ、何でもありません…」
上級生としての威厳は何処へやら、それでいいのか生徒会長。
この２人の上下関係が確かなものになった証でもあるが、それは別のお話。

「鷲崎…八雲」
名前を呼んだ、ただそれだけで心の底から湧き上がるのは恐怖心。
彼の家族を侮辱してしまった自分が悪い事であるが、この感情だけは別物だ。
「いえ、違いますわね。彼は本来優しい人、家族の為に激情したのですから」
そう。

悪いのは自分。
あんな事を言ってしまった自分が悪いのだから。
それでも彼は許してくれた。
あそこまで言った自分を、それでも許してくれるのだから。
普通家族を侮辱した相手を許そう等とは思わないだろう、例え謝ったとしてもだ。
「本当に優しい方」

第6話

翌日のＨＲにて。

「では1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決定です。１繋がりでいい感じですねぇ」

嬉々として喋る真耶。

それに対し反応は3つに分かれている。

一夏のクラス代表決定に喜ぶ者達、八雲がクラス代表にならなくて落胆する者。

そして第3の、男がクラス代表になったのが許せなかった数名の女尊男卑思想の者。

「先生、質問です」

「はい、織斑君どうぞ」

「俺は昨日1勝しかしていないのですけど、どうしてクラス代表になっているのですか？」

一夏の質問に言い淀む真耶。

どうやって説明したものかと。
そんななか八雲が口を開いた。
「簡単な話だ、俺が代表に推薦しておいた」
「何で!?」
唯一２勝した八雲の言葉に驚きを隠せない一夏に八雲はたった一言言い放った。
「勝者の命令」
俺が勝ったのだから負けたお前がやれということである。
実に単純で、理不尽な命令である。
「じゃあオルコットさんはどうなるんだよ、１番やりたそうだったじゃないか」
「ああ、彼女なら快く了承してくれたさ。だから逃げるなよ？責任重大だからな」
「ぐっ……分かった、やるよ」
渋々ながらも了承した一夏にクラスが沸き立つ。
そして代表就任挨拶が行われ更に沸き立った。

余談だが、救護室で寝ていなきゃいけない筈のセシリアが突如教室に現れて土下座を刊行したのは些細なこと。
代表を決める際に言ってしまったことを謝りたかったらしい。

だがまたもや無断で救護室を抜け出してきた事に今度は千冬もキレて、強制的に連れ戻された挙句に1時間の説教を食らった模様。

翌週。

桜の花弁も全て散っている頃、1年1組はＩＳの実習が始まった。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実演してもらう。織斑、鷲崎、オルコット。試しに飛んでみせろ」

千冬の指示に各々展開する。

1番早かったのはセシリアである。

念じる必要もない、流石代表候補生である。

一方の八雲だが…

「Ｓｔａｌｋｅｒ、起動シーケンス開始」

『Ｓｔａｌｋｅｒ、通常モードを起動します』

機体に呼びかけてボディーアーマーのようにスリムな機体が呼び出される。
それは先週見せた八雲の機体とは全くの別物であった。
「鷲崎。色々言いたいことはあるが、それは口に出さないといかんのか？」
「ええ。俺の機体は少々特殊でしてね、万が一奪われた場合を想定して音声認識によるパスロックが掛かっているので。うちの技術班か俺の声でロック解除しなければそもそも起動しないようになっているんですよ」
ＮＥＸＴであるが故の弊害。
どんな状況にでも対応出来る単体勢力として作られたＳｔａｌｋｅｒが敵対者の手に渡る事は絶対に避けなければならない、故に渡ったとしても起動出来ないようにしたのだ。
「そうか、所でその姿は？」
「装甲は未調整で使った影響で再調整行きです、この姿はまあ骨格だと思ってください」
現在の八雲の姿はそれはもうスリムでＩＳと呼べるのかと思うほどだった。
ブランク体とトーラスでは呼ばれており、これに追加装甲を随時展開させることでどんな状況でも活動するコンセプトを満たしている。
「そうか。所で織斑、何時まで掛かっている」
千冬が視線を向け、慌てふためくように機体を展開させる。

完全に八雲の機体を見て気が逸れていたのが分かる。
急かされた一夏は右腕のガントレットに手を当てて集中する。
通常はアクセサリーになるはずの待機形態が何故防具なのか疑問が残るが、一夏は心の中で来いと叫んだ。
そうして白式が展開される。
「ふむ、まだまだだな。まあいい、よし飛べ」
突如突風と轟音が突き抜け八雲が独走する。
クイックブーストでの０１加速。
停止状態から瞬時にトップスピードになる。
置いてけぼりを食らった一夏もセシリアもポカンとしていたが、すぐにセシリアは八雲を追い掛けた。
一方の一夏だが、現行のＩＳよりもずっと高性能な機体の筈なのにその速度は遅かった。
「織斑、遅いぞ。鷲崎のは例外としてもスペック的にはブルー・ティアーズよりも出力が上だぞ」
と言われているが一夏の内心は穏やかでは無かった。
まあ、急上昇急降下を習ってすぐの実習の為、初心者の一夏がすぐに出来たら余程の

天才である。
　ようやく追いついてきた一夏が愚痴をこぼす。
「どうにもイメージが掴めないんだよなぁ」
　参考通りのセシリアや全く参考にならない八雲、２人のを見てもイマイチ理解できない一夏。
　セシリアのならなんとなく教本通りの飛び方だと分かるが、一夏には八雲の飛び方が参考になるとは思えなかったのだ。
　どう見てもブースターの暴力的な出力に任せて機体を吹き飛ばしているようにしか見えないからだ。
「こんなもの所詮イメージだ、教本通りのイメージで飛べるのは余程の理論派だ。こんなもの動けば飛ぶんだよ」
「そうは言ってもなぁ。だいたい空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ、どうやって浮いているんだこれ」
　ブースターを吹かさずとも空中に浮いていられる原理を、一夏は理解していない。
　そこに話を聞きつけたセシリアが近寄ってくる。
「説明して差し上げましょうか？とても長いですが、反重力力翼と流動波干渉の話にーー」

「止めておけ、今のコイツに理解出来る話では無い」
長くなりそうだったセシリアの話を途中で遮る八雲。
以前なら憤慨していたセシリアが遮られても無反応、それどころか八雲と会話しよう等とは以前からは考えられない。
「あの、私も八雲さんに教わりたいことがーー」
『一夏っ!!!!何時までそこに居る!早く降りて来い!』
突如通信回線から響く怒号、下を見れば真耶のインカムを奪い取った箒が声を荒らげていた。
「貴様は何をしている、教師の物を奪うな!」
それを見た千冬がインカムをボッシュート、出席簿アタックが炸裂した。
その際千冬はインカムを使っていなかったにもかかわらず八雲達まで声が響いた。
「ハイパーセンサーって凄いな、この距離で箒のまつげまで見える」
「因みにこれでも機能面でのリミッターが掛かっているんでしてよ。元々宇宙空間での稼働を想定してますもの、この程度の距離なら見えて当然ですわね」
セシリアが一夏に説明を入れる。
あれ以来友人関係になった3人は、以前のような険悪ムードとは程遠いものになっていた。

「織斑、鷲崎、オルコット。次は急降下からの完全停止だ、地表１０センチを目標に止まれ」
「了解です。ではお２人共、お先に」
すぐさま地上へと急降下していきみるみるうちに小さくなっていく。
その姿に感心をこぼす一夏。
「うまいもんだなぁ」
「伊達や酔狂で名乗れるほど代表候補生と言うものは軽くはない、あれくらい当然だろうさ。さて先行くぞ、止まる時は思い浮かべればだいたい応えてくれる」
そう言って八雲は背中を下にした落下体制を取った。
その行動に千冬を含めクラスメイト達や先に降り立ったセシリア、挙句近くで見ていた一夏すら首を傾げる。
「ＰＩＣカット、アフターバーナー起動」
突如轟音と共にそのままの体制で急降下する八雲。
その行動に悲鳴に近い声がちらほらと上がってくる。
地上に対して背中から落下するなど正気の沙汰ではない。
「ＰＩＣ強制再起動、メインブースター出力８０％。姿勢制御スラスター稼働、正位置に強制移動」

あわや激突といった瞬間に八雲が急停止した。
その瞬間砂埃が舞八雲の姿が完全に隠される。
砂埃が晴れると、そこにはジャスト１０センチで停止している八雲の姿があった。
「馬鹿者！心臓に悪い降り方をするな！貴様は恐怖心まで擦り切れているのか!!」
それはそれはお怒りの千冬。
「多少インパクトがあったほうが印象に残るかと思いまして」
「そんなインパクトなぞ要らんわ馬鹿者、何かあったどうするつもりだ」
嫌に心配する千冬に苦笑で返すしかない八雲。
千冬としては怪我に気付けない八雲に怪我をされて悪化したら大変だからである。
「八雲さん、心臓に悪いのであまりしないで欲しいですわ」
「ああ、以後気を付けるさ」
隣に来たセシリアにも心配を掛けたということを悟り、八雲は反省したという。

その後八雲の忠告を覚えていた一夏が墜落事故を引き起こす前に止まれたといった事があったが割愛する。

「次は武装の展開だ。織斑、接近武装を展開しろ」

一夏は瞬時に意識を切り替えるが、如何せんすぐには集中出来ない。
右腕を左手で握りしめ、集中力を高めていく。
あるところで右手に現れた虚像が実を結び現像として雪片弐型が握られていた。
「まだまだ遅いな、まあ初心者にしては早いほうか…次オルコット、武装を展開しろ」
「はい」

千冬の指示を受け、セシリアが左手を肩の高さまで挙げ、真横に手を突き出す。一瞬の爆発的な光の奔流の直後光が消えると、その手にはスターライトｍｋ―ＩＩＩが握られていた。
一夏に比べ圧倒的に速い展開速度に八雲も手放しで拍手を無意識にしていた。それに少し照れながらも、セシリアが目線を送ればマガジンも接続されセーフティも外され射撃可能状態へと移行していた。

「流石代表候補生、だが横に向かって展開するのは頂けないな。一体誰を撃つ気だ、正面に展開できるようにしろ」
「で、ですがこれは私のイメージを固めるために必要な動作で…」
「真横から正面に構え直す時間が隙になる。直せ、いいな？」

「ー、はい…」
正論を言われてはどうしようもなく、セシリアは押し黙る。
「オルコット、接近武装を展開しろ」
「え。あ、はいっ」
唐突な事に反応が遅れたが、それでも流石代表候補生。
瞬時にライフルが収納され、右手の光が影を描く。
だがそこから光は像を結ばず、空中をくるくると彷徨っている。
「くっ…」
「……まだか？」
「す、すぐです。ーーああ、もうっ!!!『インターセプター』!!」
半ばヤケクソに叫んだセシリア。
武器名を声に出した結果イメージは纏まり武器として具現した。
だがこの方法は教本の１番最初に書かれている初心者用のやり方だった。
代表候補生であるセシリアにとって初心者用の手段を用いなければ展開出来ないというのは屈辱であろう。
「何秒掛かっている、先の模擬戦ではもっと速い展開速度だったと思うが？」
「あれは！その、無我夢中で」

「ほう、代表候補生ともあろうお前が無我夢中にでもならねば接近武装を素早くコール出来ないと」
「それはっ…直します、はい」
琴線に触れたのか、その目は強い意志が燃えていた。
「鷲崎、射撃武装を展開しろ」
ボケーとセシリアと千冬のやり取りを眺めていた八雲に飛んできた指令。
だが慌てふためく事すらも無く、軽く手を振った瞬間に既に握られていた。
０４―ＭＡＲＶＥ
トーラスが開発した大口径アサルトライフルで、命中率や威力共に他社が開発したアサルトライフルを優に超える。
装弾数３０と他社に比べると少ない。
「ふむ、妥協点だな。次は接近武装だ」
「了解」
持っていた０４―ＭＡＲＶＥを放り投げ八雲は右手にＭＯＯＮＬＩＧＨＴを展開した。
正式には　０７―ＭＯＯＮＬＩＧＨＴ

剣としては特異な見た目をしており、刀身が全て高密度のエネルギーで出来ている。
因みに放り投げた０４―ＭＡＲＶＥが地面につく前に粒子となって消えた事で周囲を驚かせた。
遠隔収納だ、余程その武器のイメージが強くなければ無理な事なのだ。
特殊な改造が施されており、刀身を常時出しておく事もできるようになっている。
初期型の安定した試作品では斬る一瞬のみ刀身が出現する仕様だったが、それだとエネルギー消費が大き過ぎるとのことで変更になったもよう。
「射撃武装より早いな、癖か」
「恐らくは。剣ばかり使ってきたもので」
「ふ、射撃武装もそれくらい早くするように。では時間だ今日の授業はここまでとする」

号令をしたあと、千冬はそそくさと去っていった。

「織斑くん、クラス代表決定おめでと～！」
夕食後の自由時間の寮の食堂にて織斑一夏クラス代表就任パーティが行われた。

クラッカーが乱射され飲み物片手にワイワイと盛り上がっている。
何故か他クラスの生徒も居る事から騒ぐ口実になっている模様。
恐らく夜遅くまで行われると思い、八雲は日課のランニングを終えた後に来たのだった。

「はいは～い、新聞部で～す。話題の新入生、織斑一夏君と鷲崎八雲君に特別インタビューをしに来ました～！」
「「お～!!」」
新聞部の登場に盛り上がる一同。
「私は2年の黛薫子、新聞部副部長やってます。よろしくね～、はいこれ名刺」
そう言って手渡された名刺に書かれていた何とも画数の多い名前、八雲が知っている人達よりも倍以上画数が多いだろう。
「君が鷲崎君かぁ、あれ?さんの方が良いのかな?」
「いや、敬われる程上等な人間ではないし変に気を遣う必要もない。年上と言っても後輩として入っている以上な」
「そっか、うん。じゃあ君でも良いね。いやぁたっちゃんが体力馬鹿って言う鷲崎君には1度会ってみたかったんだよねぇ」

「ほう、アイツはそんな事を…いっその事ーー」
思考の海に沈んだ八雲を見て内心やらかしたかと思った薫子だったが、楯無の普段の行いの報いとして見ぬふりを決め込んだ。
「鷲崎君には後で話を聞くとして、ズバリ織斑君!!クラス代表になった感想をどうぞ!!!」
ボイスレコーダーを一夏にグイっと近付け、無邪気な笑みを浮かべる薫子。
対して一夏はあまり乗り気ではなさそうであった。
「えーっと、まあ。頑張ります?」
「えー、もっとこうなんかいいコメントちょうだいよ〜。俺に触れると火傷するぜ!とかさぁ」
「んー…自分、不器用ですから」
「うわぁ、前時代的だね」
自分で言ったセリフを忘れたのか、薫子の言葉に一夏は心の中でそうツッコんだ。
「んー、まあいいか。適当に造語しておくとして、八雲くーんそろそろ話聞かせてよー」
「ん、ああ。何が聞きたい?」
「たっちゃんが言ってたけど、どうしてクラス代表を譲ったの?贔屓目無しでも鷲崎君がクラス代表になった方が必勝間違いなしだと思ったんだけど…」
「それか、そうだな。アイツにも言ったがどこかの誰かが熱い事を語ってくれたからな、

なあ一夏」
「えっと、それは忘れてくれると…」
　一夏が恥ずかしそうに頭を書きながら懇願するが八雲はただ笑っているだけだった。
「まあ、それだけが理由ではないがな」
「ん、他にもあるの？」
「俺がトーラスの企業代表だというのは既に知れ渡っていると思うが、その会社からあまり乗る機会を作るなと言われてな。授業や催し物程度なら問題ないが戦闘行動や模擬戦はあまりするなってな」
「え…？」
　その言葉に薫子、他その場に居た面々は首を傾げる。
　本来企業から言われる事は率先して乗れと言われる筈であり、その逆は本来有り得ないのだ。
「これはオフレコで頼む。
　俺の機体『Ｓｔａｌｋｅｒ』は高機動機体でありながら、そのコンセプトの影響で操縦者を保護する安全装置の類は一切無い。故に俺の匙加減１つで何処までも加速出来る」
「すげぇな、あれ以上もあるわけか」

「ああ、まだ早く出来るぞ」
それを聞いた一夏が目を輝かせながら近付いてきた。
だが薫子の顔は一夏とは真逆であった。
「え…嘘、それって…」
「ああ、あんたが思った通りだ」
唯一察したのが薫子だけであった。
この場に居るのは新入生、つまり1年生ばかりであり2年生は薫子のみ。
そして薫子は整備科所属の生徒だ、八雲が語った事がどういうことか理解出来るこの場唯一の生徒であった。
安全装置が無い。
つまり保護機能も働かないのだ、高機動から操縦者を守るものが何一つとして存在しない機体だということである。
これは1年の後期に習う事であるが、保護機能が無ければ高機動戦など常人なら1分と持たずにリタイアする程強烈な痛みが襲う。
実際2年に進級時に支障が出ない程度に保護機能を弱めた機体で高機動の体験実習が行われるのだが、それでも全クラスの約半数が体調を崩す程だった。
薫子も勿論やっており、その後1日寝込む程だった。それが数日前の出来事だったた

め未だにその時の痛みを鮮明に覚えていた。
　そして整備科の生徒はそれをもっと掘り下げた事を教わる、保護機能の重要性とそれが無い事の危険性を。
　体に支障が出ない程度に保護機能を下げただけでそれである、保護機能が存在しない機体等乗っただけで体がボロボロになることが目に見えていた。
「だからオフレコで頼んだんだ、言わないで貰えると助かる。この話は終わりだ」
「わ、分かったわ。流石に記事に出来ないから、いい話ないかな？」
「いい話か…生憎その手の話題に縁がなくてな。ひとこと程度なら、『汝に月光の導きあれ』とでも言っておこうか。導きと言っても引導だがな」
「斬って捨てる気だね、うん。かっこいいから採用！あ、最後セシリアちゃんもコメント良いかな？」
　八雲の側に〝偶然〟座っていたセシリアにもコメントを求める薫子。
「その思い出したかのような言い方が物凄く気になりますが仕方ないですわね、次は私が完封して差し上げますわ。とでも書いておいてください」
「お、良いねぇライバル宣言かな？そういう熱い展開好きだよ私」
　八雲に対して指で銃を形作って撃つような動作をしながら言った事に、薫子は気分良く答えていた。

「じゃあ写真撮ろうか。んーせっかくだし1組全員で撮ろっか、パーティーだし」
その事に沸き立つ1組の面々。
「じゃあ撮るよ～４６７×４６７÷８９０は？」
「えっと…」
「「２４５．０４３８２だ（ですわ）」」
「正解～」
八雲とセシリアだけが答え、それとほぼ同時にシャッターが切られた。
あ然とした表情の一夏と引き攣った笑顔の八雲以外、全員しっかりとした笑顔だった事をここに記しておく。

第７話

「あ、おかえりなさい」
　八雲が部屋に戻ってくると、同居人である楯無が八雲のベットで寛いでいた。
　その姿はＴシャツ１枚だけの見る人が見れば何とも魅力的な姿だった。
「あら、どうしたの？お姉さんに見惚れちゃった？」
「……」
「ほらほら、黙ってないで何とか言ってくれないとお姉さん分からないぞ♪」
　自分の格好を利用して八雲の気を引こうとベットの上でポーズを取る楯無。
「人のベットの上で何を……まあいい。所で新聞部副部長が面白い事を言っていたんだが」
「面白い事？」
「ああ、どこかの誰かがの俺の事を脳筋体力馬鹿と言っていたらしくてな。なんでも青

い髪で赤目の女子生徒らしいんだが、生徒会長のお前なら知っていると思ってな」
「へ、へぇ。そ、そんな人が居るのねぇ、お姉さんびっくりだなぁ」
物凄く白々しい態度に八雲の目が細くなる。
もはや確信しているとしか思えない。
「で、この学園に居る青い髪で赤目の生徒は更識姉妹の2人だけだそうでな、妹の方はそもそも会ったことがないから必然的に姉の方になる訳だが、何か知ってるか？更識楯無？」
最早そこまで言われてしまえば言い逃れは出来ない、楯無は観念したかのように両手を挙げた。
「ごめんなさい、ちょっとした出来心だったのよ」
「ここまで簡単に自白されるとつまらんな」
「へ？」
八雲の言葉に、呆ける楯無。
「俺の事をなんて言おうが別にどうでもいいしな。だが普段から悪戯が絶えないそうだからな、ちょっとお灸を据えようかと」
「な、なんだそうなの……」
本気で何かされると思っていた楯無から力が抜ける、八雲の冗談は冗談だと思えない

からタチが悪いのだ。
「ごめんなさい、ちょっと腰が抜けちゃったから手を貸してくれないかしら？」
「たく、仕方ないやつだ」

次の日の日曜。
土曜の夜丸々使った一夏の代表就任パーティーも終わり、大半の生徒は未だ夢の中。
「もう定期検診か」
トーラスのロゴが入った紙を見ながら１人呟いた
月に１回、八雲は検診を義務付けられている。
八雲の専用機であるＳｔａｌｋｅｒは保護機能の類が存在しない、操縦者をパーツとして考えられた欠陥機であり、それに乗り続ける為にはトーラスが開発した特殊な医療

用ナノマシンの定期接種が必要不可欠だ。
その実施日が今日の午後と、会社から送られてきた書類に書かれていた。
迎えに来る人員や場所の指定までされていて、毎度の事ながら過保護だと思う八雲。
そんななか部屋の扉がノックされた。
日曜の朝に訪ねてくる物好きは誰だって思いながら扉を開ける、そこには一夏が居た。
「お前か。どうした日曜に」
「八雲！俺を、俺を鍛えてくれ！強くなりたいんだ！」
唐突に頭を下げた一夏に目を丸くする。
だが先の一夏の言葉を思い出し、その結論に至った事を知った。
一夏を下しセシリアすら下した八雲が強いという結論に至るのは至極当然であり、師事しようと思うのも当然の帰結だろう。
「廊下で話す事ではないな、入れ」
日曜の朝早くであるためまだ寝ている生徒も多数居る、廊下で大声を出せば結構響くのだ。
故に一夏を部屋へと招き入れた。
部屋に入った一夏はキョロキョロと周囲を見回す。

学園に来てから人の部屋に入ったのは初めてであり、興味が勝ったのだ。
そこで見かけたのは女性物であろう小物が置かれているベットと、八雲のであろう携帯や書類の山が広がっていたベットの２つ。
ルームメイトの楯無は現在生徒会の仕事で不在であった為、八雲１人であった。
「さて。鍛えて欲しい、か。そこに至った理由も知っているから鍛えてやるのは吝かではないが、まずはお前の意思を知らねば話にならん。お前はどういうビジョンを描いている」
「ビジョン…」
「強さにも理由が必要だ、お前はどうなりたい」
八雲が語るのは方向性の話。
一概に強さと言っても千差万別であり千冬のような圧倒的技量による強さから強靭な意思によるタフネスすらも強さの分類に入る。
だからこその確認だった。
「俺は守りたい。俺に関わる全ての人を、この手で守りたいんだ」
「やはり決意は変わらないか、分かった。だが守るということは圧倒的技量や力で他者を圧倒するよりも格段に難しい、攻撃は最大の防御とも言うように攻撃の方が簡単だ。お前が求めているものは相当な技量と知識を要する、かなりの難易度だがそれでもやる

か？」
「ああ、頼む」
　決して折れない一夏の思いに、八雲も乗る事にした。
「ああ、分かったやってやろう。だが午後から俺は居なくてな、昼までの少しの時間位しか空いていない。少しの時間でも出来る簡単な座学を教えてやろう」
　そう言って八雲は紙とペンを取り出した。
「まず第1にだが、お前は攻撃タイプの人間だ。それ故に守るとなれば今の戦闘スタイルでは到底出来ない、だからスタイルを変える必要がある。その為にまず自分から攻撃せず待ちに徹する事と、相手のペースに流されない確かな自分のペースを維持することが大切だ。ここまでは良いな？」
「ああ」
「これから先どんなタイプの人間と戦うかは知らんが、恐らく殆どの人間が攻撃タイプだ。さっきも言ったが相手に攻撃をさせないほど苛烈に攻撃すれば、相手は守らざるを得なくなり必然的にこっちのペースに持っていきやすい。相手にペースを握られると人はそれを崩そうと焦るから攻撃タイプの方が簡単なんだよ、だがお前は防御タイプを目指すと言った。つまるところ相手の攻撃を無傷で受け切る、又は完全に回避する為の技量とどんな攻撃かを見極める知識が重要だ」

八雲が淡々と語るそれを、一言一句逃すまいと真剣に聞く一夏。
茨の道であるが故に燃える、一夏はそのタイプであった。
「最初に教えたいのは相手の攻撃を予測する洞察力と、その攻撃を凌いだ後のカウンターだな。まず聞くが、相手の攻撃をどう予測する？」
「えっと、相手の動作を見ること？」
一夏は最も身近だった剣道を思い浮かべた。
相手がどんな動作をするか、その予備動作を瞬時に見極める事でそこを打たせないように守る。
そこに近いと思ったのだ。
「惜しいな、それも正解だが１番は目だ。」
「目？」
「今から攻撃しよう、ここなら攻撃する隙がある。何処に撃とう。目を見れば視線から攻撃先を読める、相手が自分の体の何処を見ているのかは常に考える事だ。そして予備動作と合わせればどこに攻撃してくるか分かる、まあ稀に視線と行動をズラすヤツも居るがな」
「なるほど、とすると八雲はズラす相手と戦った事があるのか？」
八雲はふと考える。

だがこれを言っていいものかと悩みだすが、一夏の真剣な表情から大丈夫だろうと決断した。

「1番強烈なのはお前の姉だな。あの人程やりにくい人も居ない、反応速度がおかしいにも程がある。先読みの先を行くとか反則だろ、2度と戦いたくないな」

そう言われた一夏はただただ頷くしかなかった。自分の行動を苦もなく読んで勝利した八雲が自分の姉を苦手としていた。

八雲がそうまで言う千冬に、勝てるビジョンどころか一撃当てる事すらも想像出来なかった。

（電話だ、出ないと殺す）

その時唐突にそれが響き、一夏は音の発信源を探ろうと辺りを見回した。

そしてそれが八雲の携帯だと認識し、その意外性に驚いた。

「もしもし?.ああ班長か、分かった助かる。後1時間だな、了解。…あー、その話は後だ。ああ、了解だ今から向かう」

通話を切った八雲が一夏に向き直った。

「すまんな、午後からの予定だったが早まったらしい。今日はここまでだ」

「いや、元々無理を言って頼んだのは俺の方だしな。今日はありがとう」

そう言って立ち上がった一夏がドアへと歩いていく。

その時思い立ったのか、八雲は自分の荷物を漁りそれを一夏に投げた。
「おい一夏」
「な、おっと。これは？」
一夏が受け取ったそれを見ると、ＵＳＢメモリだった。
そこにはガムテープで簡単に試合映像と書かれていた。
「それは俺の知り合いの代表候補生の戦闘スタイルを記録したものだ、お前が求める防御タイプのな。一応見ておけ、参考になる」
「ああ、ありがとな！」
満面の笑みを浮かべた一夏は、今度こそドア開け去っていった。
その姿を見送り、八雲は自分の支度に取り掛かったのだった。

「良し、外出届けを受理する」

「すいません、本来1年生はこの時期に外出出来ない所を無理言って」
「いや、今回は例外だ。お前の命に関わると知ってしまえば、ダメとは言えんさ」
八雲は千冬に外出届けを出しに来ていた。
本来なら男性操縦者であり新入生の八雲が外に出ると今はまだ混乱するからと、同じ理由で一夏も未だ禁止されていたのだ。
だが今回の外出は八雲の所属先であるトーラスへと行くだけであり、尚且目的が定期検診である。
受けなければ命に関わる大事な検診である故に、特例で許可されていた。
『織斑先生、トーラスから鷲崎君にお客様です』
「ああ、待合室に通せ。今2人でそこに居る」
『分かりました、向かわせます』
どうやら着いたようで、受付から千冬に連絡が来た。
そこから数分、雑談をしているとドアがノックされた。
「どうぞ」
「失礼する、待たせたな八雲。おや、そちらは世界最強ではないか」
入って来たのは白衣を纏った、目が死んでいる長身の女性。
胸に着けられたＩＤパスからトーラスの社員だと分かるが、それが無ければ不審者と

して通報されてもおかしくない程不気味な風貌だった。
「はじめまして世界最強、私はトーラス医療班班長『伊作美咲』まあ班長としか呼ばれてないから班長と呼んでくれ」
　八雲と同じように顔に表情が無く、千冬は苦笑いを浮かべる。
「はじめまして、私は織斑千冬だ。世界最強と言う呼び方はあまり好きではないので、できれば勘弁して欲しいが」
「ふむ、そうか。よくデリカシーが無いと言われるが、この事なのか？すまない」
　頭に疑問符を浮かべながらも謝る美咲。
　その事にふと千冬は、今は殆ど会っていない親友の顔が思い浮かんだ。

「おっと、時間が差し迫っているのを忘れていた。すまない八雲、もう少し話しておきたい事もあるのだがな」
「いや、いいさ。班長が俺の担当医である以上、これが最後と言うわけでもあるまいし」
　そう美咲に言う八雲。
　Ｓｔａｌｋｅｒに乗る以上定期検診は必須であり、それの担当医である美咲が学園に来るのも必須である。
　なれば千冬とも会うことはこれから先もあるのだから。

「では織斑先生。俺達はここらで行きます」
「ああ。道中気を付けるようにな」
先に出て行った美咲を追い掛けるように小走りで部屋を出ていく八雲。
その後ろ姿を見送りながら、千冬も仕事に戻る為歩き出した。

『スキャン完了。ナノマシン残量６０％、規定範囲ギリギリの結果です。ナノマシン再充填プロトコルを開始中……』
トーラス本社へと戻って来た八雲は受付からそのまま医療棟研究室のベットに寝かされた。
ナノマシンの補充設備が揃っており、ベット脇の両側から動脈注射の為の注射設備がアームに着いていてＡＩの判断で充填される。
「八雲君どうだい、ナノマシンと言えど体に何かを入れる感覚は」
「班長…俺の体の事を知っていてその言葉は、流石にどうかと思うんだが」
八雲の体には痛覚が存在せず、その影響なのか感覚も結構鈍いのだ。
「ふむ、それもそうか」
ナノマシンの再充填が終わった八雲の手を取り、ベットから起こす美咲。

「ああ、そうだ。開発部門から八雲君を連れてくるように言われてな……連れてきた」
「ども～、連れられてきました～」
「班長…」
　開発部門主任である伊作美咲の弟、伊作健が首根っこを掴まれてそこに居た。
　姉の美咲とは違い感情豊かで温厚なイメージを抱かせる好青年であるが、それを全否定するかのようなマッドサイエンティストぶり。
　八雲の機体Ｓｔａｌｋｅｒの設計、開発を手掛けたのが健だ。
「初期型ＰＡの問題点を総ざらいして設計し直した改良型が出来たんで、丁度良く検診に来てた八雲を呼んでもらおうと思ったんだがなぁ」
「開発以来改良の為設計段階からやり直したＰＡ装置が、ようやくか?」
「いやぁ、試作機を何度も作れる程の材料は無いしなぁ。核となる粒子ジェネレーターは作れたのが１つだけだしな」
　ＰＡを展開する装置に必要不可欠な物が粒子ジェネレーターである。
　粒子ジェネレーターのパーツで健が２度と手に入らないと言わしめた物が使われており、ＰＡ装置を２つと作れない理由である。
　それ故にＮＥＸＴも１機しか作れていないのだ。
「機体のメンテナスと同時に後で組み込んでおくから、開発部に顔を出してくれ。じゃ、

またな～」

そう言って去っていく健。

姉に連れて来られ２～３話しただけで戻っていくという、何とも時間の無駄感があるのだがこの会社では割とよく見られる光景であった。

「さて、補充は終わったので行くと良い。次の定期検診の日程は過度な消耗が無ければ予定通り１ヶ月後だ」

「ああ、ありがとう班長。ではな、ＰＡを組み込みに行ってくる」

そう言って八雲は退出し、開発部へと向かった。

「よう、来たな八雲。早速だが機体を展開してハンガーにかけてくれ」

開発部Ｓｔａｌｋｅｒハンガーにて、健は待っていた。

「さて、メインシステム接続。粒子ジェネレーター稼働、整波装置同調を確認。よし、稼働してみろ」

「了解、プライマルアーマー展開」

その瞬間、Ｓｔａｌｋｅｒの周囲を緑色のフィールドが展開される。開発以来Ｓｔａｌｋｅｒから降ろされていたＰＡ装置がようやく戻って来た瞬間だった。
「ＰＡ出力安定、良いねぇ最高だ。八雲、どうだい？」
「稼働も安定している、試作型と出力も段違いだ。最初からこの結果が良かったがな」
「そう言うなって。粒子ジェネレーターの稼働テスト時点で安定性が皆無だったんだからよ、ここまで漕ぎ着けるのに相当苦労したんだぜ？」
健が言うとおり、試作型のＰＡ装置は性能的にも出力的にも不安定であり初稼働時の被弾実験ではたった１発ＰＡに当たっただけで粒子ジェネレーターの回路が過負荷（オーバーロード）電流状態に陥ったのだ。
銃弾１発の質量ですら、試作型には大きな負荷がかかったのだ。
故に改良の為今までＳｔａｌｋｅｒから降ろされていたのだ。

「さあ、早速だが被弾テストだ。前回同様同じ弾丸を使う」
「了解、準備は出来てる」
「では発射」
ズドン
固定化された試験用の銃座から１発の銃弾が発射され、Ｓｔａｌｋｅｒへと着弾。

その手前で、緑色のフィールドに阻まれて弾丸は融解消滅した。
「弾丸の消滅を確認。どうだ八雲、異常は無いか？」
「過負荷異常も検知されない、異常と言う異常は無いな。全システム良好だ」
「そりゃあ良い、これでＮＥＸＴ計画は成功だ」

これでようやくスタートラインに立った、トーラスはようやく歩く事から走る事に移行したのだった。

第８話

第８話

「織斑君おはよー。ねぇ、転校生の噂聞いた？」

翌朝。

席に着いた一夏にクラスメイトが話し掛ける。

入学して既に数週間経っているのだ、流石に女子ともそれなりに会話出来ている。

因みにだが八雲はまだ教室に来ていない。

普段なら非常に早く来て本を読んでいるのだが、今日は珍しく遅かった。

「転校生？今の時期にか？」

まだ４月であり何故入学式に合わせなかったのだろうと考える一夏。

ＩＳ学園は転入条件がかなり厳しい。

国の推薦が無ければ入る事はできない位なのだ。

「そう！何でも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」
代表候補生と聞いて一夏は後ろの席のセシリアを見た。
彼女も代表候補生だからだ。
「あら、織斑さん。私を見ても何も情報はありませんわよ？同じ代表候補生だからこそ、他の候補生の情報を人に喋るのはご法度ですから」
「そうなのか」
「ええ、なので私からは何も言えません。まあ、公開されている情報なら別ですけどね」
そうセシリアが言った事で、頼みの綱が1つ切れる。
「どんなやつなんだろうな」
「む、気になるのか？」
「あ、ああ。少しは」
「ふん…」
一夏がそう答えると、箒の機嫌が悪くなった。
気が付かない一夏も一夏であるが、素直になれない箒も箒である。
それを見ていたセシリアだが、流石に溜息を隠せなかった。
「織斑君頑張ってね！織斑君が勝つと皆が幸せだから！」

「フリーパスの為に頑張ってね！」
そう。
クラス対抗戦の優勝賞品は食堂で使えるスイーツ無料パス１ヶ月分である。
スイーツに目がない女子にしてみれば、ぜひ欲しい物であるのだ。
「今の所専用機を持ってるクラス代表は１組と４組だけだから余裕だよ」
「ーーーーーその情報、古いよ！」
教室の入口からふと声が聞こえ、一斉にそちらを向いた。
ツインテールを揺らし、腕を組んで片膝でドアにもたれて居る少女が居た。
「２組も専用機持ちがクラス代表になったから、そう簡単に勝てると思わないでよね！」
「……鈴？お前、鈴か！」
「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」
ふっと小さく笑みを漏らし、トレードマークのツインテールが更に揺れる。
「何格好付けてるんだ？すげぇ似合わねぇぞ」
「んなっ?!なんてこと言うのよ、あんたは！」
顔を真っ赤に染めて憤慨する鈴、それを見てもしかしてと察するセシリア。
好きな人に恥ずかしい姿を見られて言いようのない感情を好きな人に当たってしまう、そんな感じに見えたのだ。

「罪作りな人ですわね…」
ボソッとセシリアは呟いた。だがその呟きは、ワイワイと賑やかな喧騒にかき消され聞こえた者は居なかった。
「そこな少女、入口を塞がれると通れないのだが」
ふと鈴の後ろから聞こえた男の声。
真っ黒い制服を着ているのはただ1人、そこに居たのは八雲だった。
そしてその後ろに佇む千冬。
この構図からしてどこからか一緒に歩いて来ていた事が分かる。
「うっさいわね、ドアなら後ろにもあるんだからそっちを使いなさいよ。私は一夏と話してるんだから」
そんな八雲の言葉を切って捨てる鈴。
いや、そもそも八雲を見なかった時点で眼中にないと言っているようなものだった。
それに困った八雲は、後ろに居た人影に声をかけた。
「織斑先生、俺面倒事は苦手なのであとは任せても良いですかね？」
「お前なら対処出来そうなものだがな」
「面倒事は勘弁ですよ、お願いします」
八雲と入れ替わるように千冬が鈴の背後に立った。

「おい」
「何よ!?うっさいわ…ね…」
　バシンッ！
　聞き返しながら振り向いた鈴だが、振り向いた瞬間に察したがもう遅い。
　千冬の強烈な出席簿攻撃が炸裂し、鈴は目を回した。
「もうＳＨＲの時間だ、お前は２組だろう。さっさと戻れ、そして入口を塞ぐな。邪魔だ」
「ち、千冬さん…」
「織斑先生と呼べ。あと目上の人には敬語を使え馬鹿者」
　先程八雲の言葉を切って捨てた事に千冬はご立腹であった。
　年上は敬うものだと思っている千冬だからこそでもあった。
「すみません……一夏！また後で来るから逃げないでよね！」
「さっさと戻れ、もう一発行くか？」
「は、はい！戻ります!!」
　そう言って２組へと戻っていく鈴。
「お前も座れ、鷲崎」
「了解」

立ち去っていく鈴を見ながら八雲も教室に入って行く。
「一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったが？」
「あ、いや。えっと箒？」
八雲が教室に入ってすぐ、箒が一夏に詰め寄っていた。
その他気になったクラスメイトも一夏に詰め寄って質問攻めしていた。
「座れ馬鹿共」
バシン。
一発分の音だけ響き、立っていた全員の頭に対人宝具（出席簿）が炸裂した。
「…フフ」
この日常、この場面を見て笑ってしまうのは仕方のない事。
だからこそ、セシリアは笑いを堪えるのに必死だった。
バシンッ
「イッ?!何故ですの!?織斑先生！」
「人の不幸を笑っていた気がしたからな」
「理不尽ですわ!!!??」

午前の授業も全て終わりお昼休み。
箒が一夏に突っかかり、何やら言い合いしている。
そんな中八雲は、お昼の為に教科書類を片付けていた。
居ないとは思っているが、もし何かが無くなるなんてことが起きてからでは遅いのである。
「あの八雲さん、お昼ご一緒してもよろしいでしょうか?」
そんななか、セシリアが八雲をお昼に誘った。
あの1件以来セシリアは八雲との仲を少しでも深めようと積極的に話し掛けていた。
一度出来た印象を払拭する為に、セシリアは奮闘していた。
「あ、私達も良いですか?」
そこには佳奈、清香、ほのかの3人が居た。
「ああ、良いぞ」
「やった!」
八雲に比較的近いこの3人が声を掛けてきたのは、セシリアにとっても渡りに船だった。
八雲と1対1で話すのに未だ恐怖心が勝る為、そばに誰かがいる状況がありがたいのだ。

「ありがとうございます、３人共」
「気にしないでオルコットさん、皆仲良くだよ」
「そうそう、オルコットさんとも仲良くしたいし」
３人の優しさに瞳が潤むセシリア。
当初クラス内でギクシャクしていたセシリアも今や受け入れられ、セシリア自身もそれに感謝しつつクラスメイトと交流をしようと奔走しているのだ。
隣で言い合いをしている箒と一夏を横目に、４人で食堂へと向かう八雲。
未だ緊張するセシリアを3人がフォーローし、八雲との会話が成り立っていた。

４人で食堂へと着くと、何やら騒がしかった。
よくよく見れば先程クラスの入口で格好付けていた件の中国代表候補生《凰鈴音》と一夏、そして箒が何やら言い合っていた。
「ねえ、やっぱりあの2人って織斑君の事…」
傍から見ても簡単に察する事が出来た清香は、小声で話し掛ける。

「ええ、恐らく確定ではないでしょうか。織斑さんを見るあの２人の目、恋する乙女としか言いようがないですわよ」
「そうだよねぇ。でも織斑君もなんで気が付かないんだろう、結構あの２人分かりやすいと思うんだけど」
　人の恋路は、傍から見ると何とも面白いものだ。
　応援するも、微笑ましく見守るも。
　邪魔さえしなければ、馬に蹴られて死ぬ事もないのだから。
「あ、あれが俗に言う鈍感ってやつかな」
「あそこまで好意を向けられて気が付かないのも稀だろうな、見ていて面白いから退屈はしないが」
「もう、鷲崎さんってば。人が悪いですよ」
　話しながらも着々とご飯は減っていく、八雲等既に食べ終えている位だ。
「ねぇ、あんたが２人目？」
　そんな中、いつの間にやら来ていた鈴が八雲に話しかけた。
「ああ、どうやらそうらしいな」
「ふーん」
　品定めするかのように八雲を見る鈴。

一見して優男のように見えるが、基本的に覇気がない八雲。
鈴から見た第一印象は弱そうだった。
だが事前情報で八雲が一夏と、同じ代表候補であるセシリアを圧倒的な技量で下しているのを知っている為、最終評価的にはよく分からないやつとなる。
「中国代表候補生、凰鈴音よ。よろしく」
「トーラス企業代表、鷲崎八雲だ。よろしく凰鈴音」
一応の笑顔を浮かべて握手をした鈴だったが、一方の八雲の笑みは引きつっている為セシリア達は苦笑いを隠せなかった。
「へぇ、あんたがあの変態企業（トーラス）の企業代表なんだ」
「へ、変態？」
鈴の放った一言に八雲以外の一同は首を傾げる、その様に八雲はなんとも言えなかった。
「そ、変態。造る武器造る機体、全てが浪漫と実用性を合わせたもので何より使い手を選ぶ。好みもあるだろうけど、それで付けられた名前が変態企業」
「あ〜、だから変態企業なんだ」
トーラスの商品カタログを見たことがある3人は思わずと言った感じで頷く。
だがセシリアは日用品系列でしかトーラスを知らなかった為、八雲が勧誘用に持って

いたカタログを見せてそれを実感した。
「まあ反論出来んな、うちの技術者は可笑しい奴らだし。こんな機体を造る奴も居るしな」
　そう言いながら右腕の腕時計を撫でる八雲。
「Ｓｔａｌｋｅｒだっけ？何なのよその機体。試合映像見たけど、本当に頭可笑しいんじゃないかと思ったわよ。あんな機動、廃人になってもおかしくないわよ」
「否定出来んな」
　セシリア対八雲の模擬戦の映像がブルー・ティアーズとＳｔａｌｋｅｒの目線映像として一部代表候補生へと公開されており、最早何をやっているかほぼ分からなかった程だ。
「じゃあ私は行くわ、じゃあね」
　挨拶するやいなや、鈴は走って食堂を後にした。
　まさに嵐のような少女だった。

　その日の夕方、涙を流しながら走り去る鈴を寮の廊下で見かけた八雲だった。

あれ以来不機嫌な箒や鈴をよく見るようになった八雲、全て一夏が居るときに起こっている事から色恋沙汰だと言うことは分かっていた為放置していた。

他人の色恋沙汰等に下手に干渉するとろくな事にならないと思っている為であるが、面倒事になるかもしれないと言うのが主な理由であった。

既に数週間立ち5月に入っているにも関わらず3人が言い合っているのを見ている為、もう既に見守る事をすら面倒になっているのだ。

3人で一夏を取り合い、訓練も何やらゴタゴタしている為、八雲が教える前に鈴や箒に一夏は引っ張られる。

教える時間等ほぼ無かった。

そんな折クラス対抗戦のカードが2日前に発表になり、対戦カードが初戦1組対2組であった。

そして現在、八雲を含めたいつものメンツで観戦席に座っていた。

噂の新入生同士の戦いとあってアリーナは満員御礼、それどころか通路やアリーナ外

のリアルタイムモニター等で観戦する生徒で溢れていた。
そんな中２人が入場して客席が沸き立つ。
空中にて向かい合う２人の間には緊張感が迸り、それがなお客席からの期待感を溢れさせる。

「鷲崎さんはどっちが勝つと思います?」
予想をし始める清香が八雲に振り、他のメンツも考える。
全員一夏の努力も機体性能も知っている為一夏と答えたいのが、鈴の事を知らないということが悩みどころだった。
「さあどっちか、それにしても凰鈴音ねぇ…来歴凄いな、１年ちょっとで代表候補生になっているのか」
「ええ!?本当ですの!?」
同じ代表候補生であるセシリアが驚愕を露わにする。
代表候補生と言うのはそう簡単になれるものでは無いのだ。
セシリアや他の候補生ですら、代表候補生になるまでに３年あまり掛かっているのだ。
他の候補生が時間かかり過ぎと見るか、それとも鈴がずば抜けていると見るか。

「とんだ才覚の持ち主だと思うが、果たして一夏が勝てるかどうか。一夏にとって強敵だろうさ」

そう言った八雲が視線を移すと、２人が何やら話す声が聞こえた。

『一夏、今謝るなら許してあげる。少し痛めつける程度にレベルを下げてあげるわよ』

『雀の涙程度の手加減だろ？そんなのいらねぇよ、全力で来い』

鈴の挑発に乗らず、冷静に返す一夏。

て言うか一夏よ、まだ喧嘩していたのか。

『ねえ一夏、一応言っておくけどＩＳの絶対防御も完璧じゃないの。ＳＥ（シールドエネルギー）を突破する攻撃力があれば本体にもダメージを貫通させられるのよ』

鈴のその言葉に、一夏は息を呑む。

実際世界では操縦者に直接ダメージを与える為だけの装備も開発されている。

トーラスでもそれは造られており、その威力はまさに絶大。

一撃でＳＥを全て消し飛ばせる威力だった。

アラスカ条約違反だとも言えるのだが、そもそも守っている国の方が少ないだろう。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーッと鳴り響くブザーとほぼ同時に、一夏と鈴は動いた。

ガキンっ
重量級のそれが一夏の雪片弐型を純粋に重量差で押し返す。
それを不利と悟った一夏は瞬時に後退し、鈴を正面に捉えた。
『ふぅん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。まあでも…』
ガシャンと、もう片方の青竜刀の柄同士が連結され１つのバトンとなる。
両端に刃の付いたそれを、縦横無尽に振り回し高速回転するそれを一夏へと叩きつける。
細身の雪片では、受け続ければ刀身を壊してしまう可能性が頭に過ぎったが抜け出そうにも攻撃が苛烈過ぎて段々と焦りが出てくる。
そこで一夏は八雲の言葉を思い出した。
《焦るな、鈴のペースに呑まれるだけだ。集中しろ、目を見れば攻撃を予測できる筈だ》
剣戟を辛うじて避けながら呼吸を整え、一夏は剣先だけを追うのを止め鈴の目を見始めた。
『っ!?』
想い人に見つめられる。
鈴にとって恥ずかしいという感情が沸き立ち、同時にその決定的な隙きを逃さず、一

夏は距離を取った。
スーッと一夏の目が更に細くなり、自然態へと近づいていく。
自分のペースを乱した鈴は、一夏のペースに呑まれまいと焦り早速切札を切った。
肩アーマーがスライドし、中央に鎮座するその球体が光る。
その瞬間、一夏を見えない何かが襲う。
《龍砲》
空間に圧力をかけ砲身を精製し、同じく圧力をかけた砲弾を発射する砲身も砲弾も見えない第三世代兵器だ。

既の所で避けた一夏を再度強襲する何か、だが目を見続ける一夏はほとんどギリギリで避ける事が出来たのだ。
そしてそれが、鈴を更に焦らせる。
自分の切札が一切当たらない、鈴にとってペースを乱したとき以上に焦った。
『あーもう何なのよ!?砲身も砲弾も見えない筈なのに、何で避けられるのよ!?』
『……』
憤慨する鈴が一夏に向けて更に龍砲をぶちかます。
だが見えない砲弾をまるで見えているかのように無言で避ける一夏に、鈴は焦りを募

らせる。
『何か言いなさいよ、この馬鹿!?』
『……』
憤りを隠せず感情のままに龍砲に一夏に乱射するが、それでもなお当たらない。
「ほう、驚いた。たったあれだけであそこまで変わるか」
一夏の変わりように目を見開いた八雲。
軽く助言しただけでここまで動けているのだ。
「八雲さん、もしかして織斑さんに何かお教えに?」
「時間が無かったから助言だけだがな、相手の目を見て行動を予測しろとしか言っていない。だがあそこまで変わるとは元々何かしら持っていたのだろうな、もう既に超集中（ゾーン）に入っている」
模擬戦中でも少しは喋る一夏が今は一言も喋らず、常に相手の動向を見ている。
訓練時の一夏を知っている人からすれば、その変わりように驚愕だった。
『八雲君!!未確認の熱源がアリーナ上空にーー!!』
ズドオオオオン!!!

楯無からの通信が終わる前にアリーナを轟音と衝撃が襲った。
その光景を見て、忘れていた原作知識が蘇った。
そして八雲が状況把握した瞬間にアリーナ出口にある隔壁が下り扉が全てロックされていた。
そしてアリーナ中央の砂埃が完全に消えると、そこには全身装甲の不明機が鎮座していた。
上空にはアリーナのシールドに大きな罅が入り、大穴が空いている。
そのことから侵入してきた不明機だと理解するのにそう時間はかからず、観戦席が大パニックになるのは当然だった。
「皆落ち着いて!!!」
この場に居る唯一の代表候補生であるセシリアが声を張るが、全員に広がったパニックは終息することなく伝染していく。
そんななか八雲は拡張領域にしまってあるノーパソを取り出し、千冬へと個人秘匿通信(プライベートチャンネル)を繋げた。
「織斑先生」
『何だ鷲崎、生憎とこちらは忙しい。用がないならーー』
突如千冬の居る管制塔の権限が全て乗っ取られた。

それも外部からやってきた不明機よりも上位の権限による外部からのハッキングだ。
それと同時に照明も落ち、一層の事パニックが広がって行く。
Ｓｔａｌｋｅｒとケーブルで繋いだＰＣにより、八雲は冷静に観戦席にあった通信ポートを開き端末を接続。そこから無類の演算速度でハッキング返しをしていく。
「俺が今からやる事を全て黙認して貰えれば、あと１分程で全権限を取り戻せますがどうします？」
『……分かった、責任は私が取る。早急に取り戻せ』
『お、織斑先生?!』
通信で真耶が慌てる声をバックに、八雲は腕時計を触った。
「侵入開始」
Ｓｔａｌｋｅｒが光を放ち、端末やパソコンには目まぐるしく表示される０と１の羅列。
八雲は視線を感じながらもキーボードを叩いていく。
傍からみて何をやっているのか、清香達には全く分からない。
「さあゲーム開始だ、糞兎」
カタンと、エンターを叩いた音が響き。

数秒後に下りていた隔壁やドアロック、更には遮断シールドレベル４すらも解除されピットも入口が開き、管制塔の権限も元に戻った。
『良くやった鷲崎。オルコット、近くに居るか？』
「はい、八雲さんの隣に」
『そうか。そこからならピットが近いな、織斑の援護に向かえ』
「了解ですわ。ーーでは八雲さん、行ってきますわ」
セシリアの言葉に片手を上げて返事をし、なおもキーボードを叩き続ける音は止まらない。
学園を介し侵入してきた経路を強引にこじ開け、侵入を開始した大本のパソコンまで辿り着く気である。
「ッチ、アイツめ。一時的に開いただけの経路で良くもまあここまで荒らしたものだ」
八雲が辿り着いた瞬間に開かれていた経路は閉じ、回線を締め出された。
「一足遅かったか。だがまあ、届いただけで良しとしよう」
八雲が顔を上げると、ちょうど不明機がセシリアの銃撃により機能を停止するところだった。

遮断シールドを突き破ってアリーナに侵入した不明機。
それを冷めた目で見る一夏。
未だに超集中状態が続いている為、現状把握が凄く冷静に行えた。
《所属不明機を確認、ロックされています》
白式がハイパーセンサーへと緊急通告を飛ばしてくる。
『一夏！試合は中止よ！すぐにピットにーー』
鈴が一夏へと叫ぶのを最後まで聞かずに一夏は鈴に向けて走り出し、鈴へ向けて放たれた砲撃を抱えて回避する。
『織斑！無事か!?おい!?』
「……」
『返事をしろ一夏！』
「あ、千冬姉…」
千冬が管制塔から一夏に呼びかけるが、一夏の反応はかなり鈍かった。
そして千冬の２度の呼びかけにようやく反応し、超集中状態が解ける。
それと同時に、言い得ぬ疲労感が一夏を襲い倒れかけた。

「ちょっと！倒れるなら抱えるんじゃないわよ!?ぶっ飛ばすわよ！」
「あ、ああ。悪い…」
そう言って鈴を降ろす一夏。
降ろされた鈴は顔を紅くしながらも、乱入者へと視線を向けた。
『織斑、凰。無事か？』
「あ、はい。怪我は無いです」
『そうか。なら良い、現状を説明する。現在アリーナ入口やピット、管制塔や隔壁等のドアロック遮断シールドもレベル４に設定され教員部隊も突入できない状況だ。３年の精鋭が今ハッキングで取り返そうとしているがもう少しかかる、酷な事を言うようだが暫く耐えて欲しい』
千冬の言葉に２人して顔をしかめる。
相対した一夏だが不明機は砲撃以来動かない。
それがまた不気味さを醸し出し、恐怖感を煽る。
「おい、お前何者だよ」
「……」
当然不明機は反応しない。
それどころかその場から動こうとしない。

「もしかして…」
それを見て一夏はとあることを思いつく。
突如として横に走り出た。
「ちょ、一夏!?」
「動くな鈴!ちょっと試したい事がある!!」
そう言った一夏を、不明機は砲口を合わせて追っていく。
ズサーと一夏が突如立ち止まると不明機の砲口も止まる。だが砲撃は来ない。
「やっぱり……」
一夏が何かを確信したように頷く。
そんな中一夏の開放回線(オープンチャンネル)が音声を拾う。
『織斑先生、鷲崎君から通信です。繋ぎます』
『ーー何だ鷲崎。生憎とこちらは忙しい、用がないなら』
『織斑先生!?またハッキングが、今度は外部から!?』
そんな中、煌々と点いていたアリーナの明かりが全て消えた。
それと同時に止まっていた不明機も動き出し、一夏もそれに合わせて鈴と合流を開始した。

「鈴。これは勘なんだが、アイツには人が乗っていない気がするんだ」
「はぁ?!何言ってんのよ、今だって普通に動いて攻撃しているじゃ危なッ！」
先程まで止まっていた不明機も普通に攻撃しているため、鈴は一夏の勘を否定する。
「うおっ。さっきまでは俺や鈴が動いた時だけアイツも動いてたんだ、だが今さっき外部からハッキングを受けたって山田先生が言ってたんだ」
「で、無人機が遠隔操作されてるって思ったわけ?」
鈴は一夏に怪訝な顔を向ける。
だが一概に否定出来ない為、鈴もそうじゃないかと思い始める。
「無人機なら出来るとでも?」
「ああ、無人ならこいつで…全力でたたっ斬れる」
シャキと、雪片を構える一夏。
零落白夜
一夏の専用機である白式の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティ）の効果であるバリア無効化攻撃であれば無人機だろうとＳＥごと両断出来るだろう。
その代わり欠点として自分のＳＥを消費するという、諸刃の剣である。
「それは良いけど一夏、エネルギーは残ってる訳?」
「ああ、３５０程」

「…なんであんたの方が多いのよ」
鈴の残存エネルギーは１８０。
一夏と約倍近い差があった。
「いやまあ、当たってないし……ごめん」
「申し訳なさそうにすんじゃないわよ!!余計腹立つのよ!!?」
小声で叫ぶ高等技術で鈴が憤慨し、謝る一夏を見て更に腹を立てる悪循環。
そんな折消えていたアリーナの電気や、隔壁等が開いていき不明機も動きを止めた。
「今だ！鈴、アイツに向かって衝撃砲を最大出力!!」
「うっさいわね、分かってるわよ!!!」
残った全エネルギーを焚べる勢いで消費していき、龍砲がガタガタと揺れる。
充填限界へと達したエネルギーが臨界寸前で発射口に溜まっているのだ、長時間は溜められない。
「撃つわよ!!!」
ズガンッ
見えない砲弾が轟音を立てて発射され、射線上に一夏が躍り出る。
「なっ?!一夏!?」
「うぉおぉお!!」

今にも爆発寸前のエネルギーが背中に着弾寸前、一夏は瞬時加速（イグニッション・ブースト）を発動させる。

瞬時加速とは放出したエネルギーを再度取り込み圧縮、それを放出することで爆発的なエネルギーで加速するものだ。

自分で外部に出したエネルギーを取り込めるなら、外部からやってきたエネルギーでもいいということである。

そして瞬時加速の速度は取り込んだエネルギー量に比例する為、臨界寸前のエネルギーを取り込んだ場合の速度は最早桁違いである。

外部から取り込んだおかげで自前のエネルギーはほぼ残っており、そのお陰で零落白夜を最大出力で展開出来た。

「当たれぇぇぇぇぇ!!!!!!」

だがその斬撃は砲口のある右腕を肩から両断しただけに留まり、不明機によって一夏は殴り飛ばされる。

そして全エネルギーを込めた上で攻撃を喰らった影響で、白式は強制解除される。

「一夏っ!?」

「くっ!」

肩口から火花を上げながらも一夏へと近付いてくる不明機を、一夏は睨みつける。
『全く。無茶し過ぎではありませんか?織斑さん』
その時不明機の胸辺りをレーザーが貫いた。
結構な出力で撃ったらしく、その大きく開いた穴からオイルらしき黒い液体が流れ出て肩口の火花に引火して盛大に爆発を起こしていた。
「セシリア!?」
ピット入口。
そこにはスターライトＭａｒｋⅡを構えているセシリアが立って居た。
『何にせよ、これで終わりですわね』

クラス対抗戦はこうして幕を閉じた。

その日の夜
八雲の部屋に千冬がやって来て、あることを告げた。

来月転校生が来るため、部屋替えだと。
そのため千冬は楯無を急かして荷物を纏めさせると、荷物事連れて行った。

第９話

第９話

６月頭の日曜。

八雲は生徒会室へと招かれていた。

今までは生徒会長の楯無と同室だった為色々な情報共有等自室で出来たのだが、今月来る転校生の為に楯無が移ってからは生徒会室で情報共有をしていた。

「早速だけど八雲君、君に関係する２つの悪い話があるんだけど…どっちから聞く？」

「呼び出しておいてそれはどうなんだ？まあいい、１つ目からだ」

そう言った八雲に楯無は机の上に広げてあった書類を手に取り、八雲へと手渡した。

「事実か？これは」

「ええ、フランス政府から送られてきたプロフィールよ。同時に八雲君の同室となる相手」

そこに書かれているシャルル・デュノアなる名前はまだいい、その下に書かれている

性別が男となっているのだ。
「男性操縦者が見つかったのであれば、もっと騒ぎになる筈だ。それに一夏が見つかった後に全国で行われた適性検査で俺のように見つかる筈だ」
「そう、そこなのよねぇ。」
そう言って楯無は八雲の手にある書類を睨む。
２人の男性操縦者（一夏と八雲）が見つかってからも男に対する適性検査は今だ行われているのに、シャルル・デュノアに関してはそれに引っかかる事も無かったのだから。
「これが懸念１つ目、ほぼ確定だろうけど女の子よ。で、２つ目なんだけど……」
そこで珍しく楯無が言い淀んだ。
割とズバズバ言ってくる普段の楯無とは違った為に、八雲も首を傾げる。
そして意を決するように、１枚の紙を八雲に手渡した。
そこには裏面までびっしりと書かれている八雲の誹謗中傷、特に多かったのは八雲の持つ機体についてだった。
「代表候補生のセシリアちゃんと一夏君を下したのは機体が凄いから。あの機体が無ければ誰でも勝てる。千冬様の弟ならともかく、男が専用機を持っているなんて許せない。いやぁ、流石のお姉さんも凄い量過ぎて何も言えないわ」
「……」

「あの…八雲君？……ごめんね？」
　この結果には流石に八雲も言葉が出なかった。
「これね、ほとんど八雲君と関係無いクラスや学年から来てるのよ。しかも投書されたの最近なの」
「流石に機体が無ければ弱いと思われているとは、思わなかったぞ」
　これでも強い方だと自負している八雲にとって、機体が無ければ誰でも勝てる等と言われるとは流石に予想外であった。
「そうねぇ。入試の結果を知っている身からすれば、正直貴方とは戦いたくないわ」
　ごく一部の教員と生徒会長、そして学園長のみが立ち会った一夏と八雲の入試。
　その中でも八雲は、試験官として出てきた千冬相手に負けたとはいえＳＥを４割削ったのだ。
　訓練機同士とはいえ、ブリュンヒルデを相手に４割も削れる人間は居ないだろう。
　かく言う楯無も、千冬相手に４割なぞ削れる訳がないのだから。
「それでね、もう直ぐ行われるトーナメントなんだけど……八雲君は訓練機で出て欲しいなぁって……」
「噂の払拭……だけでは無さそうだな」
「訓練機で出て貰えれば噂も払拭出来るし、何より実力を示せるからね」

楯無が言うように専用機持ちが専用機を使わず訓練機でトーナメントを勝ち進めば、その実力は確かなものだと示すことが出来る。
「訓練機で出場するのは分かったが、手続きは……」
「それはこっちでやっておくわ。何か要望はあるかしら？」
「ならラファールで頼む、接近の打鉄よりは万能型の方が良い。だがブレードは積んでくれ」
打鉄は刀を主体とした接近型の機体で、ラファールはカスタム次第で武器庫とも呼べるオールラウンダーが特徴の機体だ。ラファールの方が打鉄よりも装備数が段違いであり、系２０位あるのだ。
「あら？自分の会社のは使わないの？」
トーラスもＩＳ　学園に機体を卸しており、機体名を荒波と言う。
ラファールや打鉄と比べると速度が抜きん出ているが、遠近両方とも対応出来る万能型だ。
「俺の機体の事で言われているのに、俺の会社の機体使ったら同じことだろうが」
「それもそうね。来週中には八雲君の元に行くように手配しておくわ」
トンっ
手に持った書類をテーブルで整えた音が響き、話を変えるように雰囲気を切り替え

る。
「そう言えば他の役員はどうした、生徒会を1人で運営している訳ではあるまい」
「ええ、あと会計と書記（布仏姉妹）が居るわ。ただ今日は日曜日だし、お休みよ」
普通は生徒会といえば会長、副会長、会計、書記、庶務と5人で構成されるのが一般的だ。
それを3人となれば仕事が溜まる一方だろう、だが会長席に溜まっている書類の少なさを見れば、3人で回せているのだろう。
「3人か、少ないな。庶務と副会長は居ないのか」
「そうねぇ、いまいちピンとくる人が居なくて居ないままになってたわ。…あ、八雲君副会長にならない？待遇は約束するわよ？」
「ふむ……まあ、考えておこう。では俺はこれで」
おねがいね～
楯無の気の抜けた声を背にしながら、八雲は生徒会室を後にした。

「ん？この感じ……」
生徒会室から出た八雲は、廊下の窓から見える学園への入口に目を向けた。
本島との唯一の接続口であるモノレール駅がある広場があり、この学園へと入れる空を除いた唯一の道である。
そこに見えるは日曜の喧騒、外出する生徒達の列。
普段と変わらない休日の風景、訝る事などありはしない情景。
「鼠が入ったか……いやぁ違う」
空を見る八雲は、見えないその何かを睨んでいた。
「うさぎ……か」

「……やっぱりやっくんなら気付くよね」
部屋の至る所に機械の部品が散らばり、ケーブルがさながら樹海のように広がっている。
その真ん中に立っている青いワンピースの上からエプロンドレスを着た女性が、ＩＳ

学園の写っている画面を見ながらそう言った。
「ごめんねやっくん。もう、私は追い掛けられないの……イカロスみたいに、私の翼はもう無いの」
かつて撮った写真を見ながら涙を流す女性。
トーラス社をバックに社員と共に撮った、思い出の写真だ。
「皆、ごめんね。せっかく応援してくれたのに、私にはもう……夢を追い掛けられない」
部屋の隅に無造作に置かれている残骸に目を向け、更に涙が溢れてくる。
それはどう見てもＩＳであり、もう２度と起動出来ないのが見て分かる位ボロボロだった。
装甲が融解して配線も露出し、中心部に格納されている筈のコアすらも配線でぶら下がっている。そしてそのコアすらも、原型が無いほどに壊れていた。
ふと、顔を上げた彼女の顔からは既に、涙は枯れていた。
「ごめんねやっくん、もう……止まれないんだ」
その顔には、狂気の笑みが張り付いていた。

その日の夜。
自室にて1人電話を掛けるセシリアの姿があり、その顔は真剣そのものであり友達に掛ける電話では無い事が伺える。

「こちらセシリア・オルコット、月例連絡を」
『承認。送れ』
「まずは先月に起きたクラス対抗の代表決めの模擬戦についてですが…」
その結果について渋るように、苦虫を噛み潰したような顔を浮かべるセシリア。
『その結果については聞いている、慢心があったとはいえ実に無様な結果だったとな。翻弄されダメージを与える事が出来ずに完勝を許したと』
「ッ！申し訳…ありません…」
既にその結果が上層部の知るところとなっている。
セシリア的には知られたくない事実だったが学園には他にもイギリス代表候補生は居るし3年には国家代表も居る。知られるのは時間の問題だった訳で、それが早まっただけだ。
『無様は無様だったが悪い結果では無いと俺は思っている、あまり気に病む必要は無い。

お前が戦った鷲崎八雲は相当腕が立つ。代表候補生程度歯牙にも掛けんだろう、あの男の実技入試の相手を知れば自ずとその評価になるしな』

「それは……ですが、八雲さんに勝てずとも良い勝負位には持ち込みたかったですわ……所で入試の結果というのは？」

『ああそうか、一部の者にしか公開されていないのだったな。この情報は他言するなよ？実技入試の際鷲崎八雲の試験相手が織斑千冬だった。両者共に訓練機で戦い、結果的に鷲崎八雲は織斑千冬（ブリュンヒルデ）相手にＳＥを４割削り取り敗北している。分かるか？互いに訓練だとはいえ世界最強を誇る織斑千冬を相手にしてそれだ相当な実力だと言うのが分かるだろう？』

もたらされた情報を聞き絶句した。

自分も確かに強く技量もあると自負しているセシリアだが、それでも千冬に勝てる程自分が強い等とは思ってはいない。

故に４割削った八雲の実力が想像すら出来ないのだ。

『まあだからお前が思っている程お前への評価は落ちてはいない、それにお前……誰にもなし得なかった事をしたという自覚はあるか？』

「誰にもなし得なかった事？」

『やはり自覚なしか……まあいい。お前と鷲崎八雲との模擬戦の最後、一矢報いよう

としたお前とブルー・ティアーズとの同調率が瞬間的にだが８６％を超え、更にお前が気絶したあともその意志を汲み取った機体が鷲崎八雲へと突撃を敢行している。分かるか？今居る国家代表ですら８３～８６％が最高値だと言うのにお前は国家代表すらも抜き去る勢いで同調率を上げた、しかも操縦者の意思を機体が引き継ぎ、操縦者が気絶してもなお動こうとするなど前代未聞だ。故にお前への評価は右肩上がりなんだよ』

もはや言葉が出なかった。

代表候補生として負けたら評価が失墜すると思っていたセシリアにとってべた褒めとも言えるその評価、しかもそれ以外にも誰もなし得なかった新たな事を気絶していた自分がしているとは思いもしなかった。

『まあお前の評価なんて俺にはどうでもいいんだよ、知りたい事が今出来たからな』

「知りたい事とは？模擬戦の事以外に報告するような事は何もありませんでしたが…」

そのセシリアの言葉に電話口の男ははぁっとため息をついた。

『鷲崎八雲だよ。男嫌いのお前が名前で呼んでたんだ、そう言う事で良いんだろ？あの男のどこが良いんだ？』

「……なっ!!何を仰っていますの!?べ、別に八雲さんとは何にもありませんわ!?」

何を言っているのか数秒考えてボフンと顔が真っ赤に染まり、大慌てで弁明するセシリア。

だがそれは何もないとは思えない態度であった。
『八雲さんねぇ……大の男嫌いのお前が指摘されてそこまで慌ててしかも名前で呼んでいるんだ、何もないなんてことはないだろう？惚れたか？』
「なななにを言っているんですの!?私が八雲さんにほ、惚れただなんて世迷い言を…世迷い言……」
次第に声から覇気が消え、無言になる。
沈黙は是也とはよく言ったもので、黙っている事自体が言っているようなものである。
『まあ何でも良いか、告るなら早めにしておけよ。青春は短いからな、頑張れ１０代』
「余計なお世話ですわ!!」
勢いに任せて電話を切って携帯を振り上げる。
がそのまま投げ捨てるわけにもいかず携帯を握る手を下ろした。
「私だって分かってますわ……私が八雲さんを好きな事ぐらい……」
携帯を握りしめる右手をふと見ると雫が落ちてきた。
そしてその雫は次第に増えていき、目の前が潤んで見えなくなっていた。
「どうして涙が…泣くつもりじゃ…」

「やっぱりハズキ社製のが良いなぁ」
「えーそうかなぁ、ハズキのってデザインだけって感じがして私は嫌だなぁ」
「そのデザインが良いのよ！」
「私は性能的にもトーラスかなぁ、デザインも自分で選べるし」
「あれ選んじゃう？性能的には凄く良いけど、今からだと凄く時間掛からない？確かフルオーダーメイドって聞いたけど」
　月曜の朝。
　クラスの女子がカタログ片手にあれやこれやと意見交換をしている。
「織斑君のＩＳスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど」
「えーっと、確か特注品らしい。男のスーツなんて無いからどっかのラボが作ったらしい、元はイングリッドのストレートアームモデルって聞いてる」
　男性操縦者用のスーツなんて元々有る訳がない為、あれやこれやと色々な企業が作ろ

うと名乗りを挙げたのだ。
そして一夏に選ばれたのがイングリッド社であった。
因みにだがトーラスのＩＳスーツは一般的なスーツに比べると特に性能も良く、なおかつデザインを注文者があれこれと意見を言って自分好みのデザインを作れるのだ。
故に注文者の依頼を受けてから製作する関係上フルオーダーメイドになり、総じて頼んでから届くまでの時間が一般的なスーツを注文するよりも倍近く時間が掛かるのだ。
「おはよう」
「あ、鷲崎さん。おはよう！」
「おはよう鷲崎さん！あ、鷲崎さんのＩＳスーツってどこの会社のなんですか？」
「俺のはうちの会社（トーラス）のやつを自分なりに改造したやつを使っている。防弾防刃を特に強化した特殊仕様で、ウェットスーツも兼ねている戦闘仕様のやつがベースだな」
「あ、それ持ってる!!」
１人の女子生徒が鞄の中から封を開けていないＩＳスーツを取り出し、全員の視線が集まる。
この時期に注文する者が大半だが、気が早い者もおり早々に購入していたりするのだ。
入学後直ぐに注文していれば競争に巻き込まれずに買えるので、だいたいこの時期に

届く。
「良いなぁ、私も早く頼めば良かった」
「高かったんだぁこのモデル、でもこのモデルが欲しかったから買っちゃった。カタログスペック凄いんだよこれ」
ＩＳスーツというものは機体展開時に着用する特殊フィットスーツの事で、肌から発する微弱な電位差異を検知してＩＳの各部位にダイレクトに送る機能を持つ。
耐久性にも優れており９ｍｍ弾程度なら確実に受け止める事が出来るが、受け止めた衝撃は殺せない欠点を持つ。
「諸君、おはよう」
「お、おはようございます!!」
真耶の事をあだ名で呼んだり雑談したりと、ざわざわしていた教室は一瞬で静かになった。
流石千冬、指揮はバッチリである。
「今日からは本格的な訓練を開始する。訓練機を使っての模擬戦が主になるので、各人気を引き締めるように。各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定の支給スーツを使うが、忘れたものは指定の水着で訓練を受けてもらう。だがそれも忘れたものは……まあ言わなくてもどうなるか分かるな？」

全員が絶対忘れないと心に刻んだ。
体調を崩したとかではない限りスーツを忘れたとしても授業には参加する他無い、故に下着で参加することになるだろう。
そうなれば余程粋狂な性癖でない限りはずかしさで訓練どころではないだろう。
ましてや男２人に見られるのだから。

「では山田先生、ホームルームを頼む」
「はいっ！」
後ろで書類を纏めていた真耶へとバトンタッチした千冬が下がり、真耶が前へと立つ。
「えっとですね、今日は転校生を紹介します。しかも２人です!!」
「「えぇぇぇぇぇ～」」
いきなりの転校生紹介にクラス中がざわめく。
今日まで１度だって女子の情報網に引っかからなかったからだ。
前回の転校生（鳳鈴音）の情報はいち早くゲットしたにも関わらず、噂好きの１０代女子の情報網を掻い潜ってきたのだ。
それも２人、それは驚くだろう。

「失礼します」
「……」
だが入って来た2人の転校生を見てその喧騒もピタッと止む。
それはそうだろう、うち1人が男だったからだ。

「フランスから来ました、シャルル・デュノアです。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さん宜しくお願いします」
転校生のシャルルがにこやかに微笑み、気品溢れる一礼をした。
「お、男…?」
未だ信じられない誰かがそう呟いた。
確かに情報等何も出ていない中の男性操縦者の出現である、信じられないのも当然である。
「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて、本国より転入をーー」

礼儀正しい立ち振る舞いに、中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪を首の後ろで束ねており、三編みになっているのがポイント高い。
体は華奢に見える位スマートで、スラット伸びた脚が全体の印象を貴公子に見せる。
「きゃぁあぁぁあぁ!!!」
状況把握が追い付いたのか、感極まった黄色い声が瞬く間にクラス中を埋め尽くしていく。
「男子！３人目の男子よ!!」
「しかもうちのクラス！なんて幸運!!!」
「守ってあげたくなる系の美形男子よ!!」
「お母さん、産んでくれてありがとう!!」
改めて認識した現状を声に出して喜ぶ彼女達。
それを多少冷めた目で見る八雲。
楯無に忠告を受けている為シャルルを注視しているのだが、八雲の目にはどう見ても女にしか見えないのだ。
「あー、騒ぐな。他のクラスもＨＲ中だ」
「皆さんお静かに、まだ自己紹介の途中です」
その言葉に期待の視線がもう片方に向き、ざわめく教室も静かになる。

輝く銀髪を腰近くまで長くおろし、綺麗ではあるが整えている風ではなく伸ばしっぱなしの印象を受ける。
そして異彩を放っているのが、左目の眼帯である。医療用ではない黒い眼帯であり、もう片方の赤目には感情が宿っていなかった。
否、絶対零度に近かった。
後ろ手に組んでいる、その佇まいに感じる雰囲気は軍人。
シャルルと比べて明らかに小さい身長だが、全身から放つその鋭い気配によって多大なる威圧感を醸し出していた。
「……」
だが当の本人は未だに口を開かず、腕を組んだ状態で冷えた目で教室内を眺めている。
だが直ぐに興味を無くしたのか、その視線も今や千冬にだけ向けられていた。
「……はぁ。挨拶しろ、ラウラ・ボーデヴィッヒ」
「はい、教官」
いきなり佇まいを直し素直に返事をする件の少女に一同があ然とし、敬礼を向けられた千冬は面倒臭そうに言い放った。

「私はもう既に教官ではない、教師だ。そしてここではお前も一般生徒だ、私のことは織斑先生と呼ぶように」
「ハッ！了解しました」
そう答えるラウラだが、まだまだ硬すぎる返事に千冬は溜息を隠せなかった。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「……」
いつかのデジャブ。
沈黙は次なる言葉を待つ合図であるのだが、ラウラは口を開かない。
「えっと……あの、以上ですか？」
「以上だ」
雰囲気に呑まれながらも出来る限りの笑顔でラウラへと問うが、無情なる即答が返ってきた。
そんなラウラがある一点を見て表情を変えた。
「っ！貴様がっ!!」
ズカズカと歩み寄ってくるラウラは、その速度そのままに最前列。
一夏の頬へと平手打ちをブチかました。
「……え？」

バシンっと、心地良い程響いた。
ラウラの背丈は座っている一夏に向けて平手打ちをするのに丁度いい程低い為、かなり力が入っていた。
かなり痛みを伴うであろうそれは、一夏の頬を赤く染めていた。
「私は認めない。貴様があの人の弟等と、認められるものか」
そう言い放った言葉には、強い憎しみの感情が見て取れる。
だがどう見ても、この構図は面倒事の予兆でしかなく。
「いきなり何しやがる!!」
「ふん……」
まるで興味を無くしたかのように一夏の前から空いている席へと座り、腕を組んで目を瞑ったラウラ。
その一連の動作に誰も着いていける者は居なかった。
「あー……ゴホン。ではＨＲを終了する。各人、直ぐに着替えて第２グラウンドに集合。今日は２組と合同で模擬戦闘を行う。解散!!」
気不味い雰囲気を払拭しようと千冬が強引に話の流れを変えたため何とかなったが、今後もギクシャクすることは必至だろう。
「おい鷲崎。お前の同室相手だ、面倒見てやれ」

「お、お願いします。鷲崎さん」
「鷲崎八雲だ、宜しく」
事前説明は多少受けている模様で、八雲が自分より年上だと理解していたようだ。
しかも無表情で真っ黒い制服を着ているのだ、第一印象はかなり怖いだろう。
「では着いてくると良い、俺達男子はアリーナ更衣室で着替えを行う。実習の度に移動となるので覚えておくと良い」
「あ、はい！」
「待ってくれよ八雲、俺も行くぞ」
小走りで荷物を纏めた一夏も合流し、八雲の先導で３人はアリーナへと向かっていく。
「いやぁ、それにしても男子が入ってきてくれて良かったぜ」
「そうなの？」
「ああ。女子だけの空間で八雲と２人きりだぜ、身が詰まる思いだよ」
一夏はシャルルに対して、自らの思いの丈を打ち明ける。
異性だらけの空間に放り込まれて早２ヶ月、一夏も限界を感じていたのだろう。
八雲も一夏と同じ男だが年上であり、敬語を使わなくて良いと言われたとしても同年代と同じ距離感では居られない。

その点シャルルは同年代であるため、気軽に接する事が出来た。
「ああっ!!転校生発見!!」
「しかも織斑君と一緒よ!!」
ＨＲが終わり、早速各学年クラスから情報先取の為にどっと押し寄せてくる。
「居たっ!!こっちよ!」
「者共、出会え出会えい!!」
いつからこの学園は武家屋敷となったのか、号令に従いぞろぞろと出て来る。
その数は最早、廊下を埋め尽くす列となっていた。
「織斑君の黒髪も良いけど、金髪も良いわね」
「しかも瞳はエメラルドよ、綺麗だわ」
ワイワイと一夏とシャルルを見て騒ぎ出す面々。
だが八雲にも一定の人気はある模様だった。
「鷲崎さんの薄銀髪も良い、金髪と並ぶとすっごく映えるわ!!」
八雲の髪は黒髪混じりの薄い銀髪であり、光の加減次第では銀髪だけに見えるのだ。
そうなるとシャルルの金髪と並べば、金銀と組合せ的にバッチリである。
「え、なに?何で皆騒いでるの?」
１人だけ状況が読み込めないシャルルが、周囲をキョロキョロと見回す。

「そりゃあ男子が俺達３人しか居ないからだろ」
「……？」
　意味が分からないといった顔をするシャルル。
　その顔を見て、八雲は訝しさを増すのであった。
「いや、普通に珍しいだろ？ＩＳを操縦出来る男って、今の所俺達しか居ない訳だし」
「あつ！ーーーああ、うん。そうだね」
　ようやく気付いたとばかりにシャルルは相槌を打つ。
「すまんな。話題の転校生と話をしたいのは分かるんだが、次は織斑先生の授業でな。退いてもらえると助かる」
「あ、すいません鷲崎さん。どうぞ！」
　バッと、八雲が話し掛けると波を分けるように道ができる。
　顔に表情が出ない為、何人かの女子は少し恐怖心を煽られて顔を青くしていた。
「ありがとう」
「い、いえ。こちらこそありがとうございました」
　お礼を言った生徒はそそくさと立ち去り、それに続くように行列を作っていた生徒達も去っていく。
　その中に八雲を睨む視線がいくつかあった。

第１０話

第１０話

「よーし、到着！」

プシューと、気圧差の影響で圧縮空気が抜ける音が響き、ドアがスライドして開く。

八雲の先導によりそこまで時間を取られずにすみ、着替える時間程度は確保できている。

だが急がない理由にはならない為、一夏は更衣室に入るなり制服もＴシャツも一気に脱ぎ捨てた。

「わぁっ!?」

「…？」

それを見たシャルルが悲鳴を上げ、ロッカーの扉を目隠しにしていた。

初心だと言えばそれまでだろうが、男同士で着替えを見たからと言って悲鳴を上げる人は居ないだろう。

「……隠す気あるのか？」
　ボソッと小さな声で呟いた八雲の声は、それと同時にシャルルに話しかけた一夏の声に掻き消された。
「荷物でも忘れたか？って、なんで着替えないんだ？早く着替えないと遅れるぞ？シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそれは時間にうるさい人でなーー」
「う、うん。着替えるよ？でも、あっち向いてて欲しいなぁって……」
　顔を赤くしたシャルルが弁明し、何とか一夏の注意を外そうとする。
「一夏、人には人のペースがある。急かすものでは無い」
「おう、まあそうだよな。って八雲、スーツ着るの早くないか」
　話し掛けた八雲に視線を向けると、既に着替え終わって立って居た。
「専用機持ちは基本下に着ているぞ、態々毎回脱ぎ着していたら有事の際に間に合わんだろう」
　一夏が自分の方へと向いたタイミングでシャルルへと目配せをした八雲は、一夏の注意を反らすために話題を投下する。
　暗に気付いているぞといった意思表示なのだが、シャルルには伝わらなかった模様。
「有事って、そんな大袈裟な」
「代表候補生にもなれば大袈裟ではないがな。所属する国や企業からの呼び出し、この

学園でも突然の招集」
チラッとシャルルの方を見れば着替え終わっており、八雲の思惑通りに事が進んだようだ。
「終わったよ、ありがとう鷲崎さん」
意図を読んだシャルルがお礼を言い、八雲が片手を上げる事で答える。
だが気付いていると思わせる事は出来なかったようだ。
「さあ、怖い先生に怒られる前にさっさと行きますかね」

第2グラウンドにて2組との合同訓練。
到着早々一夏が絡まれていた。
箒の近くに座った一夏に鈴が近付き、言い争いになる何時もの出来事。
それを咎めない千冬ではなく、今日もまた出席簿が振り下ろされた。
「では本日より格闘及び射撃訓練、同時に模擬戦闘を行う」

「はい！」
　合同故に何時もの倍の人数が返事をするため、響く声も大きくなる。
「まずは模擬戦闘だ、丁度いい専用機持ちが居ることだし実演してもらおう。凰！オルコット！前へ」
「何故私まで……」
　流れ的に先程怒られた鈴が出るのは分かったのだが、何故自分も出なければいけないのか。
「専用機持ちはすぐにでも始められるからだ、良いから出ろ」
「だからってなんで私まで…」
「一夏のせいなのになんでアタシが…」
　ぶつくさと文句を言う２人に千冬は溜息を付き、彼女らにしか聞こえない声でボソっと呟いた。
「お前ら少しはやる気を出せ。ーーアイツらに良いところを見せたいだろう？」
「乗せられている気もしますが…まあ良いでしょう。イギリス代表候補生として負けられないですわ」
「まあ、専用機持ちの実力を見せるいい機会よね！」
　やる気が出た２人だが、セシリアは妙な感じだった。

隣の鈴を見て分かるように、千冬に乗せられているのだ。
それを感じているからかいまいち気が乗らないが、それでも代表候補生であるからと奮い立たせていた。
「それで織斑先生、相手はどちらに？まあ私としては鈴さんとの勝負でも構いませんが」
「同じ代表候補生として戦うって？良いわよ、返り討ちにしてあげる」
「慌てるなバカ共。対戦相手はーー」
千冬が言いかけた直後、上空からキイィィンと空気を裂くような甲高い音が響き渡る。
何かが高速で接近する音に全員が上を向いたが、その前に声が響いた。
「あああああぁぁぁぁーー!!!どいてくださ～い!!!」
その速度そのままに突っ込んでくるそれは一夏目掛けて飛んできており、避けられる訳も無くそのまま激突して数メートル吹き飛ばされた。
それでも既の所で白式の展開が間に合っていたのが幸いし、ダメージを負わずに済んだ。
むにゅ
「ん、なんだこの感触」
むにゅむにゅと更にその感触を確かめる一夏だが、次第にそれの正体も分かり顔を赤

らめていく。
　落ちてきたのは真耶であり、一夏と絡み合いながら何故か一夏が馬乗りになるような形で倒れ込んでいた。
　そして一夏が手を付いていたのが真耶の胸である。
「あ、あの織斑くん？ひゃう…？!そこは、えっと…その」
　流石は思春期の男の子、吸い付いて離さないが如く揉み続けている。
　ラッキースケベだとしても、これは如何なものか。
「そのですね、あの…こんな場所では困ります。あ、場所を変えれば良いという訳では無くてですね…その、私と織斑君は教師となので…ああ、でもこのまま行くと織斑先生が義姉ってことはとても魅力的でーー」
　胸を揉まれたままトリップした真耶は、押し倒されたまま抵抗することなく顔を赤らめながらもじもじしている。
「はぁ……」
　その様をまじまじと見ていたセシリアは溜息を吐いた。
　一夏のラッキースケベぶりに呆れればいいのか、はたまた真耶のドジに呆れればいいのか。
　それにしても何時までくっついているのかと声を上げようとしたが、ふと隣を見て絶

句する。
そこには獣のような形相を浮かべた鈴が居た。
「ーーんなに……そんなに巨乳が好きかぁぁあぁ!!! 」
甲龍が瞬時に展開され、その武装である双天牙月を即座に連結して一夏に向けて投擲した。
鈴の胸部装甲はお世辞にも豊満とは言えず、コンプレックスでもある。
そんななか想い人が巨乳に手を埋めていたのである、キレるのも女の差がというものである。
「うぉぉお!!」
咄嗟に真耶から離れると、首へと迫っていたそれを間一髪で避けた一夏。
だが一息付く間もなく、それは戻ってくる。
連結した双天牙月はブーメランと同様装者のもとまで戻ってくるのだ、その間には未だ一夏が居る。
ドンッドンッ
一夏が避けようと身構えた直後に響く2発の銃声、そしてそれは的確に双天牙月の両端を叩いて無理矢理軌道を変えた。
落ちていくそれを横目に一同は銃声のした方向へと視線を向ける。

そこには倒れたまま上体を起こし、その状態で銃を構えていた真耶が居た。
普段あんなにもおっとりした先生が魅せた凄まじい命中精度、それにはその場に居た生徒全員があ然としていた。
「山田先生は元代表候補生だ、故にこれ位は造作も無い」
「む、昔の話ですよ。それに候補生止まりでしたから」
「何を言う、引退さえしなければ射撃部門優勝者（ヴァルキリア）を担っていた筈だが？」
「それは…そんな話もありましたけど……先輩も知ってるじゃないですか、緊張に弱いって」
真耶は極度のあがり症であり、緊張というものに特に弱い。
故にか、彼女は大会出場の話が来た時点で引退したのだ。
「さて小娘共、何時まで惚けている。さっさと始めるぞ」
「流石に無謀過ぎでは…」
「あの、２対１でですか？」
セシリアと鈴に声をかける千冬だが、セシリアと鈴は浮かない顔をしていた。
鈴は２対１で戦ったら勝ってしまうんじゃないかと、セシリアは引退さえしなければヴァルキリアになっていたと言った言葉が耳に残っておりそもそも自分達では勝てないと悟っているが故に。

「安心しろ、今のお前達ならばすぐに負ける」
だが勝てないと面と向かって言われると、自分でも分かっている筈なのに何かが湧いてくる。
代表候補生としてかはたまた彼女自身のプライドか、その瞳に闘志を滾らせていた。
入試で戦って勝っている相手ではあるが、その時とは状況が違う。
後からセシリアが聞いた話であるが、試験官には制約がかかっていたと。
決して本気を出してはいけない、勝とうが負けようが一定の実力以上を出さないというものだ。
だが今回その縛りは適用されない。
何より千冬自身が真耶を鼓舞したのだ、手加減などしてこない。
「では、はじめ！」
千冬の合図と同時に２人は飛翔、そしてそれを見届けてから一歩遅れて真耶も空中へと躍り出た。
教師である自分が生徒より先に行動を開始しては大人気ないという思いもあり、彼女は全て受けに回るつもりだった。
「さあ、何時でも良いですよ２人共」
「さっきのは本気じゃ無かったから、手加減はしないわよ!!」

「勝てるとは思いませんが……全力で行きますわよ!!!」
　千冬が見ているこの状況は真耶の緊張を吹き飛ばしており、いつも以上に冷静な態度であった。
　それに対し攻撃で応えた2人だが、それは簡単に回避される。
「さて、そうだな。今の間に……デュノア、山田先生が使っている機体の解説をしてみせろ」
「あ、はい」
　真耶の実力に惚けていたシャルルが指名され、それに一瞬遅れながらも空中戦闘を見ながら口を開いた。
「山田先生が使用している機体はデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代最後期の機体でありながらその性能は第三世代初期の機体にも劣らないものであり、その安定した性能と高い汎用性を持ち豊富な後付武装が特徴の機体です。特に特筆すべきは操縦の簡易性であり、それによって操縦者を選ばない事と多様性役割切替（マルチロール・チェンジ）を両立しています。その操縦の簡易性によって世界第三位のシェアを誇り、七カ国でライセンス生産、十二カ国で正式採用されています。装備によって格闘・射撃・防御といったタイプへの切り替えも容易であり、参加サードパーティが多い事でも知られています」
「ああ、そこまでいい。……墜ちるぞ」

千冬がそう言った所で上空で爆発音が響き、影が1つ地面へと落下した。
砂煙が晴れるとそこに居たのは鈴であり、セシリアはというと未だに真耶と相対していた。
『凄いですねオルコットさん、有効打を全て避けるなんて。ですが凰さんを身代わりに使ったのは頂けませんね、咄嗟に凰さんの後ろに隠れてグレネードをやり過ごし防ぎきれない爆風は武装を盾にしましたか。咄嗟の判断能力は評価しますけど、攻撃手段を捨てたのは悪手ですね』
自分でも分かっている事ながら全武装を盾にしてしまったのは悪手であり、残る武装は正しく最後のナイフのみ。
相手はノーダメージの射撃型であるが故にセシリアは降参する他なかった。
「ちょっとセシリア!!あんたアタシを盾にしたわね!!」
地面へと激突し目を回していた鈴だが、飛び起きてセシリアへと叫んでいた。
まあそれに関して自分が悪い事であるので、セシリアは即座に謝ったのだった。

「さて、これで教員の実力は理解出来ただろう。以後敬意を持って接するように」
あんなにもおっとりした真耶が現役の代表候補生を下せるのだ、それは敬意を持って接する生徒も出てくるであろうがドジっ子属性な真耶はいつまでもいじられるであろ

う。
「各専用機持ちがグループリーダーになり、８人グループを作って実習を行う。項目は事前に配布してある資料に書いてある、よしでは分かれろ」
　千冬が言い終わると同時に一夏とシャルル、そして八雲の元へと一気に２クラス分の女子が殺到する。
「織斑君、一緒にがんばろう！」
「デュノア君の操縦技術見たいな～」
「鷲崎さんお願いします！」
　ワイワイと騒ぎ始めるその状況に嫌気がさしたのか、千冬は額を手で押さえていた。
「この馬鹿者共が……出席番号順に１人ずつ各グループへと入れ、順番は先程言った通りだ。次に同じようにもたつくのならば機体を背負ってグラウンド１００周させるからな」
　途端、３人に群がっていた女子は蜘蛛の子を散らすように移動しそれぞれの専用機持ちグループが２分とかからず出来上がった。
「全く、最初からそうしろ馬鹿共が」
　そう溜息を零す千冬にバレないように小声で話す各班の女子。
「…やったぁ織斑君と同じ班っ名字のおかげだわ」

「…セシリアさん、さっきは格好良かったよ」
「…凰さんさっきは……ごめん、聞かない方がいいよね」
「…デュノア君！分からない事があったら何でも聞いてね！あ、因みに私はフリーだよ」
各々班長に対して気さくに話しかけていた。
「…鷲崎さん、色々教えてください」
「……」
1番異質な程会話が無いのが件の転校生ラウラ・ボーデヴィッヒの班だった。張り詰めたコミュニケーションを拒むかのような雰囲気に、生徒を軽視するかのような冷めた視線。
先程からこの調子であり、流石の１０代女子でさえ会話をしようとせずに俯いていた。
「えーっと、良いですか皆さん。これから訓練機を1班毎に取りに来てください。数は打鉄とリヴァイヴそして荒波が各2機ずつです。好きな方を班で決めてください。早い者勝ちですからね」
真耶はいつも以上に5割増し程しっかりして見える程だ。
恐らく先程の模擬戦で勝てた事で自信を取り戻したのだろう。
時折ズレた眼鏡を直す仕草により、その豊満胸に肘が当たりその重たげな果実を惜し

げも無く晒していた。
それを見ていた一夏は箒にどつかれていた。
自分が触った胸だと改めて自覚したのか、顔がほんのり赤くなっていたのがまた更に箒の機嫌を損ねたのだった。

「さて始めるぞ、時間が惜しいので少し巻きで行く。まずはーー」
『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。班員全員にやってもらう為最適化処理（フェッティング）とパーソナライズは切ってあります。取り敢えず午前中は動かす所までは全員やるようにお願いしますね』
「ふむ。では出席番号順に装着と起動、簡単に歩行して取り敢えずは終わるか。では１番目」
「あ、私です」
出席番号２３番の橋本早苗。
基本的にはクラスで目立たない普通の少女だ。
「では早速乗ってもらおうか、搭乗経験はあるかね？」
「えっと、中学の時に何度か」
「なら問題ではないな。ああ、降りる時は必ずしゃがんでから降りるように」

そう言って八雲の言う通りに装着を開始する。
そうしてつつがなく1人目が終了して降りたのは良かったのだがーー
「あの、鷲崎さん。これ届かないんだけど……」
ふと目を向けるとそこには立ったまま装着解除された訓練機の姿が。
専用機では問題にならないが訓練機の場合は必ずしゃがんだ状態で装着解除する必要がある。
装着解除した状態で機体は固定されるため起立状態では搭乗口も必然的に高くなり、十代女子には届かない距離にある。
八雲が呆れながら周囲を見渡すと一夏の班でも同じ状況になっており、何故か横抱きで運んでいた。
何人の目がキラキラと期待の眼差しを向けていることから、恐らくだがその圧に耐えられなかったものと思われる。
「橋本、装着解除する時はしゃがんでからと言わなかったかね？」
「え、あー･ご、ごめんなさい…」
純粋に忘れていただけならば、良かったのかも知れないのだがなってしまったものは仕方がないのだ。
八雲は徐ろに機体へと近づくとコンソールを呼び出し、数秒後には機体が独りでに

しゃがんだ状態に移行した。
「まあいい、次だ。言っておくが時間が押しているのだ、これ以上の遅延は許されない。良いな？」
「は、はい!!!!」
無表情で言う八雲の凄みにより全員が敬礼よろしく整列して、最早軍隊のようだった。

そうして午前の授業もつつがなく終了した。
「では午前実習はここまでとする。午後には今使った訓練機の整備作業を行うので各班の班長は班別に集合させるように。専用機持ちは訓練機整備と並行して自分の機体も見るように、では解散！」

片付けの際昼食を一夏に誘われた八雲であったが、用事があったのか断っていた事は割愛する。

「もしもし、親父。少し調べてもらいたい事がある」
『どうした。お前から電話なんて、それも頼み事など。なかなかどうして珍しいじゃないか』
昼休み、八雲は昼食を食べず制服を着て直ぐに部屋へと戻ってきて居た。
ここならば現在お昼時である為人を気にする必要もなく、また同居人になるシャルル・デュノアも一夏に誘われて昼食タイムであるため誰にも邪魔されないのだ。
「シャルル・デュノアなる人物について調べて欲しい。どう見ても男には見えん、仕草も所々で女っぽさがある」
『……我が息子ながら、その結論に至るのが早くて感心する。今まさに社内で調べている事だ、まあ8割方終わっているがな。今からメールで送らせる』
その言葉に八雲は驚いた。
まさにトーラスが調べている事を自分が頼んでいるということもそうだが、何より8割終わっていると言うのだから。

「ああ、ありがとう親父」
『例には及ばんさ。ではな、体調を崩すなよ』

電話が切れた直後、八雲の携帯にメールが入ってくる。
そこに書かれている事は正しく八雲が知りたかった情報である。

「シャルロット・デュノア……ね」

第11話

「改めて、お願いします鷲崎さん」
「ああ、よろしく頼むよ」
夜。
夕食を終えたシャルルと八雲は部屋へと戻ってきて、改まって自己紹介をしていた。
というのも八雲は昼休み丸々居なかった訳で、シャルルとの交流はしていないのだ。
朝の授業の時以来の会話となるため、シャルル自身も緊張していたようだ。
「そういえば鷲崎さんって、織斑君の特訓を引き受けているんでしたっけ」
「ああ、アイツの要望でな。ああ、あと敬語は要らんぞ。話し辛いだろうしな」
「ありがとう。良ければ僕も参加して良いかな？専用機もあるから少し位は役に立てると思うんだ」
そう言ったシャルルに少し考え出す八雲。

特訓の相手をしているとはいえ、色々とバタバタしていた事もあり本格的な特訓を開始するのが今回からだからだ。
「ああ、頼む。俺だけでは手が回りきらないだろうからな」
「うん、任せて！」
シャルルのいい返事を聞いた八雲は満足気に頷き、日課となっているランニングの為準備をして部屋の外へと出る。
「では少し出てくる。1時間程度で戻ってくるがな」
「うん、いってらっしゃい」
バタンッ
見送った八雲の背中が閉まった扉で見えなくなると、先程までにあった笑顔がシャルルの顔から消える。
もしその場に第三者が居ればその顔を見て感じた事だろう、その罪悪感に塗れた顔に。
「あんなに優しそうな人を……僕は裏切らなきゃいけないのか」
ふと冷たい何かが手に落ちた感覚を感じてそこに視線を向けると、そこには一滴の雫が手の平にあった。
「あれ……おかしいな、なんで涙が」

誰に見られている訳でもないのに急いで目元を擦るのだが、溢れ出るそれは止まることがない。
涙が出る度に自分の役割を思い出し、更に涙が出てくる。
八雲が戻るその直前まで、声を押し殺した泣き声が部屋に響いた。

「あら八雲君、奇遇ね」
八雲がグラウンドに出ると楯無が待っていた。
だが前のように運動するような格好ではなく普通に制服だったため、一緒に走りに来た訳ではない事が見える。
「楯無。どうした、また走りに来たのか？その格好だと醜態を晒す事になると思うが」
「もう八雲君とは走らないわよ、私の身が持たないわ」
体力不足の文字が出現した扇子を広げ、楯無は渋い顔をする。
学園最強を自負していた自分が簡単に体力面で負けたのだ、男女の差と言えばそれまでの話。それでも彼女のプライドに触ったのは確かだった、故に彼女は人知れず鍛え始

めたとかなんとか。
「所で八雲君、彼女の事はどうするつもり？」
彼女とは、勿論シャルル・デュノアの事である。
楯無にしてみれば正体を知っているにもかかわらず未だにアクションを起こさない八雲の事が心配なのである。
「まだ何も起こしていないだろう、俺からは何も起こせない。それに俺から何かしたら、それはそれで色々と問題だろう？」
「まあそうだけど…」
八雲の言う通りシャルルはまだ何もしていない、それなのに八雲から仕掛けたら問題になる。スパイであれば問題無いが、スパイじゃなかった場合が問題になるのだ。
「とりあえずは彼女が何かアクションを起こしたらだな、俺が動くのは」
「そんな受け身の姿勢で大丈夫？相手がスパイっていうなら寝首を掻かれる事もあるのよ？」
「余程な事でなければ、大事には至らんだろうさ」
例え不意打ちで刺されようと撃たれようと、一撃で心臓や脳を消し飛ばされない限りナノマシンにより修復される。
ちょっとやそっとの負傷では八雲に影響を与える事など出来ないのだ。

だが修復されると言ってもナノマシンは有限である故に常に負傷を与え続ければナノマシン切れを起こし八雲の体に傷を与える事はできる。
痛覚が無い為痛みで怯むことが無い八雲を相手にそれが出来るかは別問題であるが。

「所で生徒会入りは考えてくれた？今なら副会長よ」
「…そうだな、俺が生徒会に入ることによって生じるメリットとデメリット。それを詳しく聞いてからだな、前回聞きそびれた事だし」
「そうねぇ。メリットは生徒会の情報網が使える事、有事の際に八雲君の独断で戦闘行為を開始出来る権利かしらね。デメリットは仕事量の増加とやっかみかしら。自分は男より上位だと思っている人間がこの学園には多いから、そんな中八雲君が副会長になったらたぶん凄いと思うわ」
女尊男卑のこの時代、男を下に見る女が多い中どう見ても上に居る男を見れば、女からしたら面白くはないだろう。
だがその程度デメリットとはならない。
八雲にとってやっかみ程度、歯牙にも掛けない事だろう。
自分が何を言われようと気にしないのだから。
「やっかみ程度問題にならないな、その条件なら」

「なら引き受けてくれるかしら」
「ああ、受けよう。俺にとっても情報は重要だ」
　やったーと小躍りする勢いで両手を上げようとして思い留まった楯無が、顔を赤らめながらも佇まいを正す。
「じゃあ明日…は私が用事あるから、明後日の放課後生徒会室に来て頂戴、色々と手続きがあるから」
「ああ、分かった」
　じゃあねと言い残し去っていった楯無を見送り、ふと時計を見る。
　思いの外時間が経っていたらしく、来たときからおよそ３０分近く経っていた。
「……短縮メニューで行くか」

「ただいま、シャルル」
　１時間という想定を１０分過ぎた頃、八雲は自室であるがノックをして入ってくる。
「あ、おかえりなさい」

帰ってきた八雲を見て笑顔を浮かべるシャルル。
だが八雲の目には、その笑顔に隠れた涙の跡がはっきりと見えた。
「……」
「どうしたの？」
「…いや、何でもない」
顔を、特に目元を見ていた八雲の視線に気付いたシャルルが声をかける。
だが涙跡を見ていた等と言える訳も無く、涙の理由等問える訳がない。
そもそも出会ったばかりなのだから。
「あー、シャワーだがどうする？今のように俺は夕食後1時間程居ない訳で、先に入ってくれた方が良いとは思うが」
「んーそうだね、鷲崎さんがいいのなら先に使わせてもらおうかな」
少し悩んだシャルルだが、1時間という時間を考えて先に入る事にした。
八雲が居ないその間に入ったほうが時間的にも無駄がないのだ。
「あ、そうだ。鷲崎さんさえ良ければ、明日学校案内して欲しいな。まだ入ったばかりだから、僕まだ何も知らないし」
「ああ、そういえばそうだったな。良いぞ、俺で良ければ案内しよう」
ありがとうと笑みを浮かべたシャルルの顔に、ふと八雲は死別させてしまった妹を幻

視した。
「ーーーーッ!?」
その顔から目を離せず、湧き立つのは恐怖。
遺して死んだ八雲の事を恨んでいるのではないか、憎んでいるのではないか。
そんな感情が心の内から湧いてくる。
確認する術等存在しない故に、八雲のその感情は自己完結する他無い。
だが八雲にとって、そんな事無いと断じれる程軽いモノではないのだ。
「どうしたの？鷲崎さん」
「ッ！ーーいや、何でもない。少し考え事をしていただけだ」
覗き込んできたシャルルの顔にハッと意識を引き戻され、八雲は冷静を取り繕いそう言った。
内心で渦巻く負の感情を無理やり抑えつけ、何でも無いかのように。
だが考え事等という言い訳に騙されるシャルルではなく、優しげな笑みを浮かべて口を開いた。
「鷲崎さんも疲れているんだよ、今日は早く休んだ方が良いよ」
「そう、だな。そうさせてもらおう」
その１時間後には、部屋の電気は消え静寂に包まれたのだった。

『どうして私を置いて死んだの、お兄ちゃんーーー』
その声にハッと意識が覚醒する。
だが体が石の用に固まり、動かす事ができない。
聞こえる筈の無いその声に幻聴だと必死に自分に言い聞かせるが、前世の妹の声を聞き間違う筈が無い。
『違うんだ美遊！俺だって、死にたくて死んだ訳では!!』
『うん……お兄ちゃんが自殺するわけ無いのは十分分かってる。でも、約束したよね？私を置いて死なないって』
その言葉が、八雲に重圧となってのしかかる。
まさに彼女の想いが重さを持って八雲を襲っていた。
『お父さんもお母さんも死んだ女子中学生の私が、お兄ちゃん無しで1人で生きて行け

るとでも思っていたの？』

両親を喪った兄妹に頼る親戚は居なかった為、成人して働いていた【　　】が妹を同じ部屋に住まわせる事で衣食住を確保していた。

兄が居なければ未だに１人では生きていけない彼女にとって、どうしようもできない事となったのだ。

その状態での【　　】の死である。

大好きな兄。

彼が居なければ生活出来ない自分。

自分を遺して逝った兄に対しての想い。

『分かってる。お兄ちゃんだって死にたくなかったのは…でもーーー』

一度言葉を切った彼女から、さらなる重圧が発せられて【　　】にのしかかる。

『私はーーーーーー』

「ーーーハッ!?」

バサッと飛び起きた八雲の目に飛び込んできたのは見慣れたＩＳ学園寮の自室。

隣のベットではシャルルが寝ている事から、今の出来事が夢だと分かる。

だがそれが夢だとしても、どうにも幻だとは思えなかった。

「ーーー眠れる気分ではなくなったな」

もう過ぎた前世(過去)の出来事、今の八雲には全く関係ない筈の事柄だ。

だがそれでも、そう簡単に割り切れる訳がない。簡単にその記憶を捨てられる訳がないのだ。

目が冴え、ざわつく心を落ち着かせるために、八雲は体を動かす事にした。

大したことはない何時もの日課を違う時間にするだけ、走っている時だけは前世も今も嫌なことを忘れられるから。

寝ているシャルルを起こさぬよう静かに部屋を出て、八雲は無心でグラウンドを走った。

だがその日、八雲の心が晴れることは無かった。

次の日

結局眠れず朝を迎えた八雲だったが、一切顔に出ない影響で誰にも悟られる事なく授業を乗り切る事ができた。

そして放課後になり、シャルルとの約束である学校案内をすることになった。

「ここが普段授業で使う第3アリーナだ、教室からちょっと遠いのが難点だな。2，3年は第1と第2を使っているから普段かち合う事はないだろう。もしかち合うのなら隣の第4，5アリーナだな、あそこは全学年が個人練習や模擬戦等で使うから完全に予約制の上で使用区画が決まっている。この第3にあるようにアリーナ内の地面付近にホログラムで線が書かれているだろう?あれが第4，5では遮断シールドで区切られているんだ」

「ふーん、そうなんだ。あ、これはどういう機能があるの?」

まず八雲がシャルルを連れてきたのは授業でよく使う第3アリーナだ。

一度2組との合同授業で来ては居るのだがその時は八雲が先導していた為にシャルル1人で来たとしてはたして使い方が分かるかどうかという、シャルル自身の希望によるものだった。

「それは訓練用端末だ。全アリーナ共通で存在するそれは、主にアリーナ内の環境を変えるのに使う。例えば重力、仮想的にだが空間にかかる圧力を高める事で擬似的に高重力環境を再現出来る。例えば酸素濃度、区画内の酸素濃度を増減させる事で様々な環境を作り出せる。例えば気圧差、空間にかかる圧力を重力同様高める事で１０気圧まで高める事ができる、これは重力と同時に行われるな。こんな感じに様々な環境を再現できるが、普段使われる事はないな」

「えっと、どうして？」

「ここまで本格的な訓練となると軍事訓練と遜色無い訳だが、一体誰がやる？思春期真っ只中の女子が自分の体を苛め抜く戦闘訓練を率先してやるとは思わんな」

言い方は悪いがその通りであろう。

一体どこに、青春をかなぐり捨てて戦闘訓練に明け暮れる１０代女子が居るというのだ。

「それもそうだね」

流石にこれにはシャルルも同意した。

訓練の辛さは、彼も知っているから。
因みにだがこの環境端末のたった２人の使用者が千冬と八雲である。
前述した青春をかなぐり捨てた１０代女子というのが１０年前の千冬であり、現在もブリュンヒルデたる強さを誇る故に鍛錬に余念が無いのだ。
八雲は操る機体故に様々な環境に適応しなければいけないためやらざる負えないといった感じである。

「次はどこが見たい？」
「んーそうだね、部活棟が良いなぁ。僕、気になってる部活があるんだ」
そう言って２人でアリーナを出るが、こころなしかシャルロットの気分が上がっているような気がした。
程なくして部活棟の真ん中に位置するであろう部室に辿り着き、ドアに掲げられた部活名の入ったプレートを見て更にテンションが上がるシャルル。
「ここだよ鷲崎さん！料理部！」
そのテンションの上がり具合を見れば料理が好きだと言うことが分かる。
「失礼しまーす!!!」
感情の昂りからか声高らかに入室したシャルル。

「あ、デュノア君と鷲崎さん。こんにちは」
中に居たのは何かを作っていた七瀬ほのか。
ちょくちょく八雲と喋っている3人娘の1人だ。
そんなほのかは作業している手を止め、入口に居る2人へと駆け寄ってくる。
「こんにちは七瀬。七瀬が料理部だったとは」
「あー、今意外って思ったぁ！絶対思ったぁ！」
言葉から察したほのかが八雲に対して捲し立てるが、隣に居るシャルルのポカンとした表情で一気に佇まいを直した。
「ごめんねデュノア君、鷲崎さんのせいで」
「…おい七瀬」
小声で言った言葉は消え去り、代わりにほのかのシャルルを歓迎するような声量が際立ってくる。
「ようこそ料理部へ！料理したこと無い人から料理好きまで！ここは誰でも受け入れるよ！」
その生き生きとした表情はシャルルを圧倒し、八雲ですら圧倒される。
自分の好きなことに一直線に邁進するその姿、中々真似できる事ではないのだから。
「とりあえず、即決しなくてもいいから今から私が作るのを見ててね。さあ鷲崎さん、手

伝って！」
「俺は部員では無いんだが？」
「細かい事はいいの！それに自己紹介の時に言ってたじゃん、和菓子作りが趣味だって。お菓子を作れる人に料理が出来ない人は居ないんだよ！」
　謎理論を展開し八雲に手伝いを強要するほのかに八雲は反論するが、現在部室にはほのかを入れて自分達３人のみ。
　１年であるほのかや八雲達と違い、２、３年はまだ授業中なので居ないのだ。
「しょうがない、エプロンはどこだ？」
「ありがとう！エプロンなら３番棚の中にあるよー。あ、ピンク着る？」
「冗談。黒の無地に決まっているだろう」
　ほのかの戯言を笑って流し、棚から黒のエプロンを引っ張り出す。
「さてデュノア君、料理は好きかな？」
「あ、はい。料理は昔から大好きで…」
「それなら結構!!料理好きは大歓迎だよ!!」
　バサッと両の手を広げたほのかに少し気押されるシャルル。
　だがそれも料理にかける情熱は確かに伝わり、シャルルもその情熱に感化されるようにテンションが上がってくる。

「じゃあせっかく日本に居るんだし日本らしい肉じゃがを作ろう!!」
「肉じゃが!!」
料理名を聞きシャルルのテンションも上がる。
肉じゃがとは古き良き日本の言い伝えでは、肉じゃがが美味しく作れる女性は良い嫁になると言われている。
それは全ての女性の夢、それはシャルロット・デュノア（男装前の彼女）にとっても変わらない。
「肉じゃがか、いい料理だ。簡単で、故に奥が深い。……美遊が、よく作ってくれたな」
「ん？鷲崎さん、どうかした？」
シャルルと盛り上がっていた隣で上の空だった八雲を気遣ったほのかが声をかける。
だがそれに反応を返すより先に、八雲の体が崩れ落ちた。
「「ッ鷲崎さん!?」」
咄嗟に崩れ落ちた八雲の体を2人が支え、そしてその変調へと気づき驚愕した。
「ッ！、凄い熱！」
八雲の体は服の上から分かるほどに熱を持っていた。
人の体とはここまで熱を発する事が出来るのかと思うほどに高温で、それを発しながらも平然していた八雲が突如崩れ落ちる程に異常で、その異変に誰も気が付かない程に。

「……悪い。感覚が鈍いと、自分の体の変調にすら気が付かないとは」
常人なら意識を保つ事すら困難な筈の高熱を出しながら、それでも八雲ははっきりと意識を保っている。
だがそれでも尚、八雲は立った。
立ち上がれてしまった。
体内に宿るナノマシンが、八雲の体がどれだけ異常を訴えていても無理矢理にその体を正常へと戻そうとする。
それが尋常ならざる高熱を帯びる理由でもある。
「鷲崎さん、無理しちゃ駄目だよ」
「ああ、分かっている。すまないシャルル、学校案内の途中だって言うのにな」
「大丈夫。僕に突き合わせて無理をさせちゃったら申し訳ないし、今日は帰って休もう？」
シャルルの提案はご尤もであり、無理をして倒れたら元も子もない。
故に八雲は早々に帰る事にした。
「七瀬もすまない、手伝うと言っておきながらこのザマとは」
「良いから、鷲崎さんは早く休む！謝るのはその後！」
ほのかは八雲の背中を押すようにして出口へと誘導する。

それに遅れないようシャルルも出口へと向かう。
「ありがとう七瀬、また明日」
「すいません七瀬さん」
「明日も熱あって、それでも出てきたら殴るからねー!!デュノア君にも迷惑かけちゃ駄目だよー!!」
そんなほのかの言葉を背に、自室へと戻る2人。
先に歩く八雲を見て、シャルルは疑問が浮かぶ。

(どうして?どうして貴方はそんなに優しいの?僕の為に、ただの学校案内なのに……体調不良を押してまで付き合ってくれるなんて)
前を歩く八雲の背中がどうしようもなく眩しく見えた。

(そんなに優しい人を……僕は裏切らなきゃいけないの?)
そしてその優しさを裏切らなきゃいけない自分が、どうしようもなく嫌になった。

『魂の結合が不安定……否、そんな筈は無い。我が調整は完璧であった。であるならば何故……』

何もない無の空間に漂う【ベス】が八雲の映像を見ながらそう呟く。

それは盗撮に当たる筈だが、そんなのは関係ないと言わんばかりに【ベス】はそれを見続ける。

『ん……そうか。そなた、未だに妹に縛られているのか。人とは難儀なものなのだな、忘れれば苦しむ必要も無いのだが』

そう言う【ベス】にとって人とはやはり未知であり、それ故に見続けるのだろう。

『契約に従いそなたの魂は再調整を施そう、だが妹の事はそなた自身が折り合いをつける事だ。そなたの周りには魅力的な人間が多数居る、そなたを未だに縛る妹の幻影。それを断ち切ってくれる者も、案外近くに居るやもしれんな』

そう言って視線を向けた先に居たのはシャルロット・デュノア。

例え男装し姿形を偽っていようとも、【ベス】に通用する訳がない。

魂を偽れる訳がないのだから

『励め、提供者よ。そなたの生涯その全てが、我が娯楽故に。故に協力するのだ、我を楽しませよ』